

追悼會が青年會館にあつたげな。僕は知らずに出席し得なかつた。キールの寒さは常に想像して居る。山崎直方君肺患に苦しむとの事、過日傳聞せしが如何、ドーモ留學生の景氣が悪い。

君の健康を祈る!!!

卅三年十一月卅日

(興津より東京なる藤井氏へ)

僕は去る二十五日上京、昨日歸寓した。二十七日午後、御訪ねしたりしが、君も相馬君も留守で、本意ない事であつた。孝行仕たい時に親は無しで、君も此頃は僕が命の親なることをしみるゝ感悟せられし由、善哉々々。二十四日には石川君の内に一泊して、皆さんの健康な顔を見、又昨日は鈴川より偶然同君と同車して其奇遇に驚いた。僕が上京の日に大西君の追悼會があつたとのこと、斯うと知つたならば是非共都合して出席したりしものを！ 中徳君の細君のとは君

の書によりて始めて承知、實に御氣の毒だ。姉崎も其後又書をヨコして病氣の快復を報じ來り、且チーグレルの獨逸十九世紀文明史、ズーデルマンのロマーン二冊をヨコシた。其末に「秋の日の霧たちこめて今日も暮れぬ！」と云ふ句がある。此頃は大分神経質になつたと見える。僕は相變らず夢幻的生活で、此頃はそろゝ里心がついて來た。

「命の親であつた」との悟りが即ち善智識だ、精出して攝生したまへ。病氣程つまらぬものはない！

卅三年十二月四日朝

(興津よりキールなる姉崎へ)

Irnu Sorge と Eline と今朝達いた、誠に有難う！ 君の健康も勿論舊に復した事とは信するが、時節柄尙一層の攝生を祈る。僕も昨日平塚に行つて平塚には佐佐木の分院がある、佐々木博士の診察を受けたところ、患部は定着して蔓延の恐

は無いが、一生の禍根を絶つ爲には「ヘートル(?)」の注射を行つたら好からうとの助言で、近い内に平塚に移轉し、そこに二月末まで居つて、三月には屹度渡航の途に上ることとなる事と信ずる。勿論無理は露程もせぬから、安心して呉れ給へ。去る一日には丁酉會で横井君が大西君の追悼會演説をせられたとの事。又僕は其HowもWhenも知らぬが、黒田善三郎君も逝去せられたげな。大西君に關しては學術界は非常に悼惜の意を表し、早稻田大學舉て種々の方法で是を發表した。京都の文科は實に困ることであらう、其後任者にも何人も困であらう。僕は一個人の意見として、是非桑木にやつて貰ひたい、同人を除いては他に適任者が無様に認める。君の意見はどうか。——僕は近日平塚に出懸ける。三保松原清見寺、是の興津の景色に別れるのはしみじみ、悲しい。今日妻と龍華寺の方に遠足に出懸けるところだ。「日本美術」の秋季の分を送る。何か雑誌書籍等で君の要するものは、折返し言て呉れ給へ、ドンナものが君の所に行てるか分らない。君の健康を祈る。

卅三年十二月廿日

(天磯よりキールなる姉崎へ)

日廿月二十年三卅

(375)

今朝散歩から歸つたら、君の端書が來て居た。ア、物言ふ如き君の容姿に對して黙思を凝らしたと幾時ぞ！實は過般の病氣(今は勿論全癒とは思ふが)で或はやつればせぬかと愛て居つたのが、横濱で訣別の手を握つた時よりも圓く肥つたやうに見ゆるは、實に何より喜ばしい。僕は僕の此喜びよりも、京都にお在す君の令母令閨の喜びを想像して、更に多大の満足を感じる。先頃はズーデルマンの Fran Sorge と Elire とを送つて下すつて、お蔭で是現代詩人の一面を伺ふことが出來た。先達よりニイチキ、イブゼンなどをノゾイテ、又チーグレルの詳論を参照し、獨逸現代文學に就いて多少の觀念を得た様に思はれる。僕の病氣は極めてよい。醫者は用心さへすれば來春渡航差支ないと言つて居る。目下の所では増進の徵候等は更に無いが、一生の禍根を斷つには、此際「ヘートル(?)」の靜脈注射を試みるが好からうといふので、去る十三日興津を引拂つて當地方

に來た。注射は三ヶ月を要するといふことで、夫れが濟次第出懸けることゝ信する、安心してくれ給へ！ 興津を去る時は八十日間朝夕唯一の友として親しむだ清見潟の風光に別れるのが實に哀しく、汽車の中より幾度か振返つた。アア(其時僕は思ふた)コンナ事では西洋に行つたら、屹度懷郷病に罹るであらうと。君！ 健在なれ!!! 來春には遇ふ!!!

卅三年十一月廿三日

(大磯より國元の實父へ)

拜啓仕候。十八日の御手紙拜見仕候。神佛兩道の是非に關し卑見御尋に相成、了承仕候。今日の佛教はドダイお話にならぬものに有之、唯吾々は先祖の墳墓あるが爲に寺に詣で、死屍の埋葬を取扱ふが故に僧侶にかゝはる外、何の意義も無之事と存候。若し本來の信仰心にて佛教を非認せられ候は、そを御捨て被成候事些も仔細有之間敷と奉存候。神道とても宗教としては格別に價値あ

るものと不存候へ共、本邦元始の國體に合する、謂は、國教とも謂ふべき事、又仰の如く其やり方の清淨簡易なることゝは事實に御座候。されば神道の方御氣に入り候は、神道に歸依せられ候事、亦何の仔細有之間敷と奉存候。要するに私は何れにても御隨意にて別に致方なき事と奉存候。唯此際御注意まで申上度きは、神道に歸依する爲に、祖先の墳墓祭祀等に多大の不都合無之候や。此邊の所預め御一考御取極肝要と愚考仕候。私一個より申せば、世の中の神も佛も信じ不申候。但祖先崇拜、死屍處分のため暫く在來の所謂宗教に表面上歸依するものに御座候。右卑見申上候。

來る二十五日より

相州大磯角半方

に移轉し、來三月中旬迄滞在可仕候。三月下旬出發の事は昨日文部當局者と打合おき候。

卅四年一月一日

(大磯よりキールなる姉崎へ)

今日は明治卅四年の元旦に御座候。獨逸には雜煮も無之、フオークを手にして故國のことを想ひ出されしならむと察せられ候。此前の君の手紙はいつもながら嬉敷披見致候。懷郷云々のとに關し、申越されし條々、僕に於ても異存はなけれども、唯思慕の餘り心神を疲倦し、健康を害するあらむを恐れたる也。僕はかの強めて情を殺し性を矯むるを豪傑としてほむる我社會の風尚に反對すること、に於ては、全く君と所見を同じうするならむと存候。僕先年五月の頃、丁酉會席上(千葉氏宅)にて「人生とロマンチズム」と云ふ題にて、今の形式的方便主義の社會に純粹なるロマンチック、ムーブメントの起らむことを希望する旨を述べて、多數の人に驚かれ申候。

獨逸留學生に關する君の意見も丁知致候。紳士教育は獨逸に於て不可望事は誠にさる事もあらむと被存候。過日井上準之助氏より佛文 Edmund Demolins

氏の著英譯 Anglo-Saxon Superiority, to what it is due と題する一書を借覽し、英國教育の長所並に其社會組織の醇美に就いて深く同情を有する様になれり。渡航の節は是非英國にも一度は住居して見たく想ひ居候。日本の大學が獨逸の學風を過重し居るに非るかてふ疑惑は今日大學の影響上種々の點より見得べしと思ふ。此邊もお互將來の學界に盡さむとする吾々の注意すべきこと、存候。殊に……米國を頭から賤しむが如きは其の意を得ざること、言はざるを得ず候。

丁酉會員の家庭並に會員に不幸多きは残念なることに御座候。大西君の事は申すも恐也。其後黒田善三郎君逝かれ、中島徳藏君の妻君逝かれ、頃日又桑木の嚴父、引續きて祖母逝かれたり。同君は近來非常に落膽せる由、御氣の毒の至也。

扱過日も一寸申上候、京都大學の大西君の代りには是非桑木を推薦したきもの也。こは友人として言ふのみならず、局外者より見て同君以外に適當なる候補者無きことならむと思はる。……

本邦學界には見覺ましき活動更に無し。先月の哲學雜誌を君は見しならむ、元良博士の本邦學生の宗教心に關する調査報告をや、見るべき資料とすべしむ。……

僕は數日中に東京に一寸歸らむ。新稲戸氏の英文武士道でも送り申さむ。費用に關して精敷く申越あり、大に便宜を感せり、厚く謝申候。僕は或は四月になるやも知れざれども、必ず渡航することに致候。健康は大丈夫ならむと被存候。幸に安心あれ。……

當大磯には三月頃迄逗留せむ。今年は今所の非常に暖氣にて今日の如きは近年稀なる元旦にして暖氣甚だし。君は肝油を試み見るや、思ふに非常に効あらむ。一日 Is. — 20. 5. 夜食後二時間頃に。僕の語學はサツパリ駄目也、獨逸語の如きはトントダメ也、慨嘆々々。過般より、Jikai の小説を非常に面白く讀めり。Siolkiewicz の Quo Vadis は是非一讀せらるべし。是程面白きは近來なしとの事也。

君の健康を祈る！

僕も健康なるべし

卅四年元旦

日本相州大磯 角半方に

相模灣の聲濤を聞きつゝ

雲いろくの夕暮の空に、飛ぶ鳥の行衛もまらすまぎれ入るこそ羨ましけれ。われも幾度か願ひぬ、この思ひを胸にして、吾がむくろの露ともなりても、溶けよかし。かくて天風に散じて、かの限りなきみそらに、吹き渡りてむ！

二三日前こんなものを筆すさみ申候

卅四年一月十六日

(大磯より東京なる信策へ)

詩人ケルナル傳一篇唯今正に落手、直に一讀仕候。文章は絢爛、思想は醇雅、敬服いたし候。實は卿の文章が加ほどまで進み居らむとは、失禮ながら思ひがけ

ざることに御座候。唯強いて缺點を求むれば、形容詞あまりに多く、語句場所慣れざるところあり、こは老熟と共に自然になほることゝは被存候。シス、チツの假名づかひに顛倒あるは尙未だ郷音を脱せざるが爲ならむ、見苦し、御注意あるべく候。かく悪口は申候ものゝ、一篇の文字、青年の讀物としては至極適當、好文字と奉存候。多分來月の中學世界に掲載可致、中學世界にはチト惜しき位に存じ候。今日の吾等には如是青年の活氣に充滿せる文字はとても出來ざることゝ存申候。期日違へず御寄送被下候段多謝々々。

五十嵐氏其後如何、去十日御見舞申上候處、危篤の模様、御見うけ申候。かねて期したることゝは云ひながら残念至極の事共に御座候。

藤井は歸りしや、宜しく願上候。今日は室内七十度の高度を示めし申候、草々。

卅四年二月五日

(大磯よりキールなる姉崎へ)

十二月廿一日夜の君の書翰を受取つた。今日は此國では極寒の時節ではあるが、大磯だけに流石に暖い。伊豆箱根の山々にははや春霞立ち初めて、心も言ふばかりなく長閑だ。あゝ君は今頃は是故國の風光を如何なる處にか偲びつつあるではなからうかと思へば、何やら黯然たらざるを得ない。げに五年前には熱海、海邊で遊び暮した事もあつた。あの頃の生活は今から思へば殆ど夢の様だ。實に美はしい夢であつた、その夢の隈々を思ひたどれば何となう氣も遠くなつて涙が催される。君よ、心弱きものとばし笑ひ玉ふな。僕も多少書物を讀ただけに少しは考へもある積だが、人生の最もうるはしき趣はかゝる、恐らくは人から見たら何事でもなき事柄に存する様に僕には思へる。あゝ君よ、この世の樂みは哀みの中にこそ求めらるべけれ。君が十分の効果を負ひて歸られた後幾年、今の君の境遇を懐ひ起したなら、一層の感慨を催さるゝであらう。あゝ今より五六年後にはお互に如何なる境遇に如何なる遭逢を遂ぐるであらう。僕は斯る事を考ふると、兎角うら哀しき心地がする。

桑木の事は過日の手紙に書いた通の僕の意見だが、願はくば君も賛成して松

本君より(又は他の方法にて)適當の運びに至りたい。同君は過日哲學概論一部を著はし好評嘖々であつた。丁酉會幹事ハ吉田高島外一人だ君の傳言は屹度傳へる。

扱僕は其後身體もいよ／＼健全になつたらしい。醫者も出發を許した。四月上旬に當地を出發したいと思ふ。……………

四月上旬なれば此手紙が着いてからいよいよ一度君の書面を此地で見ることが出来るであらう。或は六かしいかも知れぬが、或は十日位は後れるかも知れぬ、ドカ折返し送つて呉れ。

携帯品に就いての御注意は謹で拜承する。僕の最も掛念するは獨逸語だ、ドモだめだ。近い例が君の手紙にエムジヒと云ふ字があつたが、それが一寸出ない、と云ふ仕儀だ。こんな風では渡航後の不自由が思ひやられる。

君の送つてくれたフラウゾルゲは實に面白い。ドーデーの Jack と同じ行方ではあるが、其の寫實が如何にも Idealistic で僕は満足を以て讀了した。エーレの方は少々妙味が解りかねる、蓋し語學が足りないせいだらう。Ziegler のは至極

有益の書と思ふ、此地で讀了して行く。

今日福澤翁の訃音が傳はつた實ニ惜むべき一種の模型的人物であつた。伊藤圭介翁も過日逝かれた。古老の凋落は吾々の義務を大にする。

早稻田でもいよ／＼大學設置を發表して資本金參拾萬圓募集を廣告した。

大橋佐平さんは先日番町の川上大將の邸を買入つたが、同時に胃病で一年持たぬと宣告されたそうで、今度は拾貳萬圓餘を文部省に寄附して圖書館設立の事とした。其趣旨書を昨日頼みに來た。一念發起したのであらうが、兎に角大美舉で感すべきことだ。人は金錢ばかりで安心が出来ぬと云ふことの如何にも哀れな例にも思はれる。

僕は此頃は大きくつまぎれに道樂者のすなる玉突と云ふものを初めて見た。三週間計りになつたが、ドモ物になりそうもない。君のテニスを思ひ出して打笑まれる。イヤ是は失敬!

君の健康を祈る!!!

近咏一首

如何にうるはしく空にかゝやけばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にして幾時ぞ、思へば惜しき過去なりき。

卅四年二月十三日

(大磯より信策へ)

息
おひく春げしきに相成申候。一昨日は紀元節とて親廣殿も當地に見えらるべきやの様子もありしが御見えにならず、残り惜しう候ひき。手島精一君は日曜日より訪られ一泊して歸られ候。旅中のつれづれには訪問の客程嬉しきは無之候。昨日は伊豆箱根の山々青がすみたちこめ、暮靄一抹の風、光杯流石にうれしく候。三保薩埵の景色はそれにつけても思ひ出され、夜半の夢に入ることも間々有之候。清見瀉の山水はわれに如何なる因縁ありや、怪まるゝばかり懐かしく存候。注射の濟次第イマ一度出發前に、清見寺の鐘の聲にあしたの夢をさますべく樂居候。

扱中學世界のケルネル傳誠に見事に出來申候。其文末に記入せる文字「高山生……」の中に編輯者か活版屋か「先」の贅字を入れ、見苦しき事に致し心外に御座候。同志主筆上村よりも別紙の如き申譯來候、不惡御諒可被下候。

其後健康の具合も好良に御座候。在京諸友にはとんと無沙汰に致居候、藤井にも相馬君にも宣布願上候。日々玉つき研究いたし餘念なし、今日は少し風あり散歩も出來ず、玉でもつくべく候。早々不一。

卅四年二月二十日

(大磯よりキールなる姉崎へ)

一月七日の君の書は去ル十一日に落手した。健康で何よりも欽ばしい。僕も天の祐で非常に宜い。ヘトールの注射も來月即ち三月中旬に局量に達する。一兩日前博士(佐々木)の診察を受けて渡航の事を談せし折には「醫師として責任を帯ぶることは出來ぬが、だまつて行く分には、差支無い」と言はれた。如何にも

尤だ。よしんば此地に止りて朝夕博士の指導の下に生活したからと云つて博士はヨモヤ何人の健康をも保証は出来まい。僕は断然渡航する……四月上旬には出發する。僕の行先はいづれ君と面晤の上なきめよう。あゝ君と遇うのも最早や二ヶ月餘りだ何たる天の恵であらう！ 想へば……人生は奇しきことのみ多い。此地には別に變りは無い。知人同人間の消息も一向此頃は聞かぬが大した事は無い、僕は先月十五日來東京へゆかぬ。此手紙を君はミュンヘンで見るとあらう！

卅四年三月二十四日

(東京よりキールなる姉崎へ)

君！ 僕は如何にして目下の情を君に言ひ表はすことが出来やうか。洋行は断然見合はせることに決心した。予はこの決心を齎らして昨日大磯より上京し、それ〴〵事を纏めつゝあるのだ。自分一人ならぬ身のかばかりの病氣の

ために數年來の希望を空しうするのは是非も無いが、いさゝか遺憾にたえぬ。あゝ君と彼の地に遇ふた後のことは日毎に想像して樂しみ居つたが、今から思へば、さぞや運命の神の失笑に堪えぬことであつたらう！ あゝ過ぎ去れることは是非もない、さればとて僕はこれと云ふ未來の見透しもない。かゝる時に人は往々薄志弱行に陥るものぞと覺悟はして居る。あゝ君ならで誰か是の僕の衷情を察して呉れるであらうか。多分君は此手紙を書く今頃は印度洋あたり

に僕を想像して居るだらう！……………

卅四年四月廿四日

(大磯よりベルリンなる姉崎へ)

其後は度々の御手紙で君の近状を審にし甘心致候。殊に四月十六日より同廿四日迄に御認めめの君の書は、中にも嬉しく讀んだ。續いてキールで御寫しの寫真にて君の健やかなる、故よりは多少肥満したるらしき、眉目髯の一段の秀を

加へたる君の容貌の活けるが如きに接して懐しさに勝え得ぬ。あゝ僕も是非寫眞を送らうが、今は氣候の爲か、やゝやつれたる顔を見せるのは何となう忍びない、其中是非送る。僕の渡航中止に對しての御慰問は實に忝ないが、兎に角此健康が十分になるまでは致方ないと諦めて居る。……獨逸に對する嫉惡の感情も君にしては無理ならぬ事と思はれるが、獨逸語迄も嫌はるゝは餘り過ぎはせまいか。それでは政事軍隊の國家の外に吾々の住む邦は無様ではないか。Her Prof.の話は實に突梯の極だ。ワグネルのオペルの事よく想像も出来ぬは残念ながら徐ろに神往に堪えない。かゝる娛樂を有して居る獨逸の社會には、君の觀察以外、多少は君のアンチ獨逸的感情を融和する或物は存して居はせぬか。素より僕は君の感情を尊敬するものであるが、一時の外感の爲に左なき場合には得らるべき多くの利益を逸し去るは、間々ある習ひと思はれる。君にはかゝる愛は無からうが、僕のつまらぬ老婆心をも悪くとつてくれぬ様に願いたい。南の方ルドキッヒ一世の美術市やデューレルの生れた町などでも、北方のミリダリズムの影響はあるものか。僕にはトント事情は解らぬが、これ

は君が後日の觀察を待ちたい。兎に角獨逸人が偏狹な人民であることは君の書面にあるアンチセミチズムにても解ることである、慨はしい事情と思はれる。ハイチ、ピョルチの如き此國の恩人ですらあの迫害に遇うて、今日では紀念碑を立つるにすら異議あると云ふ話しは、如何にも吾々には解せられぬ偏屈と思はれる。……

去る廿一日星亨が殺されたことは新聞又は電報で見られたであらう、是は意外だ。社會の輿論は一般に悼惜の情を表して居るが、刺客が儼然たる一個の紳士であつたと云ふ點から其方へも相當の好意を表して(暗に)居ることは新聞の調子でも分る。つまり社會の制裁と云ふ考が暗に何人の胸中にもあるらしい。併し星もシーザルと同一の最後をした、其死や寧ろ其歴史を飾るものと云つてもよからう。

大學内に先月來斃鼠にペスト菌があつた爲に今度は建物の一部を燒棄することに決した、市中は鼠買上げで忙がしいが、ペスト患者は一人もない。

笹川種郎君ハ今度宇都ノ宮の中學校長になつて今日(二十四日)送別會がある

答だ。先日同君と芥舟及び登張の三人來訪して快談した中には君の噂も大分あつた。

大西君の遺稿も近々出版せらるゝことゝなつた、其の書目は倫理學、論理學、心理學、良心起原論、哲學史、雜著の六種で、哲學史、雜著は何れも一千頁以上のものだ。僕は君の歸らるゝ頃までには日本美術史を完成したいと心懸けて居る。此秋からは鎌倉に引越し、其處で越年する積りだ。大磯も最早や半歳になる、厭き厭きした。此頃は又水繪を始めてるが、何分意の如くならず。

先月來先輩には頓と遇はぬ。上田萬年氏も一時は辭職との噂もあつたが昨今は又落着いたとの事だ。晚翠は去る十五日常陸丸で西航した、始めは倫敦に落ちつくとの事……

此頃の僕の精神には、此の一兩年の間に醗酵し來つたかとも思はれる一種の變調が現はれて來た。人は病的と謂ふかも知れぬ、又自分でも境遇、健康等の爲に然るのかとも思はれるが、併し僕は僕の精神の自然の發展と外信じ得られない。僕は此の變化を明瞭に君に知らせることが近い内に出來るだらうと信す

るが、要するにロマンチズムの臭味を帯びて居る一種の個人主義たることは争はれない。僕は曾て日本主義を唱へて殆ど國家至上の主義を賛したこともある。今に於ても是の見地を打破るべき理由は僕には持ち得ぬ、唯是の如き主義に満足の出來ぬ様になつたのは僕の精神上の事實である。僕は道德、教育、もしくは社會改良に關する今の人の説には殆どすべて満足の出來ぬ様になつた。曰く國語改良、國學改良、言文一致、風俗改良、是等の主張者には實用以外別に人生の幸福と爲すあるものなしと信じて居る様だ。例へば文藝の慰藉、訓養が此世に如何ばかりの幸福を齎すかは、今の俗學者は解し得ぬらしい。僕は宗教に關しても少からず考へた。曾ては一種の反感を以て迎へたが、今では如何なる宗教に對しても少くとも同情を以て見る迄になつた。あゝ吾人は自己の弱點を掩はむが爲めに知らず知らず自己の性情の缺如せる所の者を自己中心の信仰として發言することがないか。僕の過去は多少此趣があると今では思はれる。

君！ 此邊の所を如何思はれるか。

此頃は梅雨で天氣は概して不愉快だ。思ひ出したが、桑木も東京大學からの

留學生に推薦された然し何時行かれるかあてがないとの事。又民間では大學増設に反對する有力なる議論が現はれつゝある。其の要點は日本の國家は高等専門學校を要するが大學は要らぬ。大學増設は少くとも學校系統改革後の問題であらねばならぬと云ふにある。早稻田でも大學基本金の募集が好況であつたため大に意氣込で居るらしい。高田君が英國主義の大學を思ふまゝに現はすのも遠からぬことであらう。……………

近い中に僕の舊稿を集めたる「文藝評論」と云ふ小冊子が出るから出次第送る。先日アナクレオンと Geschichte des Gottesdienstes 難有落手した。……………大著述も大論文もない唯大塚君が竹栢園(佐々木信綱君の歌會)の席上に演説せられた日本服の美術的價值と題する論説は一寸面白い。餘り長くなつたから是でやめる。くれぐれも健康で居て呉れ僕も精々健康となる。

卅四年五月七日

(大磯より宇都宮なる笹川種郎氏へ)

御之上讀書仕候。御序文早速御執筆被下、難有奉存候。元祿時勢粧新紙上にて刊發拜由拜承、江湖之喝采さこそと被存候。何れ拜讀之上鄙見も有之候は、申候。債度候。昨今は雨にて爲すこともなくたれこめて暮居候。湘南之春之佳ならざるに非れども、思ある身には兎角愁の媒と相成申候。兩三日中には東京より家族引移り可申候。

其後令嬢には御壯健に被爲在候や。山水の放浪に慣れたる身には妻子の事思ふもうるさきやうに被感、吾ながら薄情の人よと歎かれ申候。あゝ青春人にして幾時ぞ、思へば惜しき過去にて候ひき。一春一秋如此にて經過し去らば、吾に於て得るところ何事ぞ、思ふて是に到れば被髮伴狂の悟道無理ならぬ儀と存候。唯小生今の境遇、遺問の靈水用ふるに由なし。睡眠の中に百事を忘却するをこよなき樂と觀念致居候。

清見瀉日記御目に入りしよし、御はづかしき事に候。帝國文學に去月來の文逃るゝに道なく、かの日記の焼なほしを二三枚送りおき候。大の悪文に候へば、平に御見のがし被下度候。

高著奈良朝史は何時頃御脱稿に候や。其節は高著に相應はしからず被思候へども拙文早速差上可申候。右御禮かたぐい例のぐち申上候。意氣銷沈などと御笑被下間敷候。草々。

卅四年六月六日

(大磯よりベルリンなる姉崎へ)

あゝ君よ、僕は誠に申譯がない、三月末に渡航見合せの事を君にしらせたのみで、今日まで無音で送つたのは吾ながら、無念であつた。あゝ、此間には僕の心中に少からぬ煩悶があつた。誰にも知らせずに、恐らくは吾れ一人の外には永劫知る人もなき黙思が、どの様にあつたであらう。ああ吾ながら心弱いことだ。

僕の受取た君の書は三月十二日附の端書であつた。其中には、此書をつく頃には君は出發したであらうと書いてあつたが、あゝ僕はさうあつたら、どの様に幸だらうと、甲斐なきことながら思ひ返して居る。君も僕の來るのを指折り數

へて待つて居つたであらうが、僕の最終の端書を見て無無念に思つたであらう。僕はそれが誠に氣の毒でならぬ。あゝ君よ許して呉れ給へ。病軀は如何とも爲難い。今以て湘南の海濱に放浪の身となつて居る。あゝ僕の昨今の境遇は誠にく寂しいものだ。病氣はまだなほらぬし、友人もなし、學問も進まぬ、人物の修養も思ふ様に行かぬ、生活も餘り裕でない、年は經つ、思想はふける、感情のみが強くなつて兎角に善愁の人となる。悟りきれぬ身には、同輩の榮達も何となく羨ましい様な氣もする。それくは羨ましい凡夫と吾ながら呆れることもある。大なる信仰の頼るべきものがあつたらばと思はれるけれども、力及ばない。あゝ君如何したなら好いのであらうか。

僕は他人の慰めも聞きあきた、兎角吾れ自ら安心の出来る地歩を求めねば何もなるものではない。人物の修養はこゝであらうと兎に角に希望は繋いで居る。

僕の事をのみ言ふが、少し近狀を知らせやう。渡航を已めてから別に仕方もないから僕は日本美術史の研究に一身を委ねやうと決心して、大學の講師にし

て貰うた。この願は容易に成つて、四月中旬からさう云ふことになつた。併し講師は無給同然であるから、是れは學問上の事と心得て、外に生活の路を求めたが、博文館主人の懇談もあつたから、仕方がない、又々雑誌記者となつた。そして住處は九月一杯は當大磯に居て、其からは鎌倉かどこかに移るつもりだ。大學の講義は五月初めに今學年丈け先づ「日本美術の特質に就いて」と云ふ題で初めたところ、案外に聴衆が多く、十七番室では足りないで、立て居る人も餘ほどあつた位、先づ満足であつた。來年からは正科にするとやら、其邊は僕は餘り望むところでない、どつちでも自分がやる丈けやるは同じ事と思つて居る。

其から僕の住居―去年の暮この大磯に來てから今日まで、又今日以後九月一杯は當地に居る。鴨立澤の西に小さな貸別荘を借りて、大抵の書物は持て來て、先づは不自由なく暮して居る。體もだん／＼好い方にのみ向て居たが、先月即ち五月下旬に一寸やられて、昨今は少しわるい氣味だが、大シタコトハ無い。兎角用心が足りなかつたらしい、併し追々回復しつゝある。友人も時々尋ねて來るが先づは獨棲の姿である。幸なことには妻も子供も丈夫だ、是のみが何とな

う心強い。

今月一日乙羽は百日計り第一醫院に入つた後遂に死だ。病氣は腸室扶斯に肋膜炎、實に惜しいことをした。

……丁酉會の最近の會は去月三十日夜青年會館に開かれた、演者は藤井吉田、浮田、僕は病氣で出られなかつた、此頃では雜誌も君の處へ行くだらう。村上專精さんは先日石川渥美諸坊主と仲直りして京都で何か會があつたさうな、仲直の仕様が餘り早い様だ。四月八日には伯林に君等の催で面白い會があつた相だが、僕は實に羨ましい。晩翠はいよ／＼近日獨逸に行く、君と相見る日も遠くなからう。出發は本月十二日と云ふことだから、此手紙よりも前に君を見るかもしれぬ。本月の太陽に君に與ふる書を書いたが、實に君を引合ひにして例の理屈を述べたに過ぎない。新大學總長は山川健次郎君だと今日の新聞にかいてあつたが、多分さうだらう。

君の健康は如何か、健康を失ては凡を失つたも同然だ。學問杯は大概にして先づ氣永に保養して來給へ。僕はせめては僕の友人知人が皆健康に榮ゆるの

を見たい。建部も追付け歸るだらう、歸來後の氣焔が想ひやられるが、彼れも一個の性格だ、通常人以上の人物だ。旅行や外國へ居るのは性格修養には好機會であらう、病氣も然りと僕は思ふ。人は兎に角死生の間に入ると人生の趣味もいくらか分る様だ。此頃は宗教(僕の)に關して思念することも往々ある、同時に僕の個人主義とでも云べきものが一層明瞭になつた。ドモ日本主義時代の思想が僕の本然の皮相なる部分の發表に過ぎなかつたことが今から思はれる。君の思想は獨逸の文明に接して如何様の状態にあるか聞きたい。笹川の近信には君は頻りに排獨逸主義を唱へた相だが、大方は想像して居る。吾々お互に是より數十年の後になりて少年からの思想性格の發展を考へたなら、嗚々興味あることであらうと思はれる。

日本では梅雨も近い、此頃 Mr. Johnson の ミュンヘン、ドレスデンの紀行を讀で美術上のことを想像したら、實に神往の情に堪えなかつた。近來精神上の慰藉を持ち來した書物はトント手にしない、精神は餓て居る。是からチト宗教上の書物を讀まうかと思て居る。あゝ人は何故に是の限り生命の中に無窮を求む

るの心があるのか。楽しい様な、又恨めしい様な氣がする。

芥舟は先月下旬又た男兒を産だ、是れで二人目だ、盛なりと云ふべしである。先達大學病院の斃鼠にベスト菌ありしより、東京市はベスト豫防の爲に大騒をなしつゝある、水道の蛭問題も中々盛だ。

岩谷君に遇うたら、健康を祝してくれ給へ、藤代君にもよろしく頼む。君は何時まで伯林に居るか。キールを君が立つた後に二三通はがきを出したが、無論落手の事と信ずる。此書面を草する時は天氣もわろく、濤聲高く、擔を掠めて聞える恐しい夕暮である。あゝ今頃伯林で君は何をして居るのか、三千里途は遠いが、四十日程に過ぎない。此からださへ丈夫ならとツイ愚癡も出る。必ずしも無理でもあるまいか。健康で暮し給へ。僕は出来る丈け愉快に、満足に暮して居る。人間としての修養の足らざることを思ふて自ら勵まし、且樂みつゝある。

卅四年七月五日

(大磯より東京なる笹川氏へ)

思ひながら御疎音に打過候。相變らずツマラナク暮居候。連日梅雨僅に霽れては又も昨今の暑さ何共不如意之世の中に御座候。過日三君御來訪の後は、何等會心の談話も耳にせず口に上らず、湘南と云へど風雅でも洒落でもなく、しやう事なしの佗住居例によりて如例御座候。……御書中御申越の博士論文云々の事御書面と同時に或他方よりも勸懲有之、何やらオカシキ心地せられ申候。ドーセ吾黨の立場よりは、學士も博士もイッタものにあらず候へども、貴命の如く……

卅四年七月二十四日

(大磯よりベルリンなる姉崎へ)

チューリングゲン旅行中の君の端書はシルレル、ルーテルの遺跡を上せて遙に日本湘南の病客を音信れた。今朝は又イルメナウのゲーテの像を有せる端書が来て、僕はドンナに長い間楽しく、懐かしく、又哀しき沈思に耽つたらう！君の書末に「君の音信に接せざる數句」とあるは實に愧かしかつたが、僕はこの數句をばドンナに苦んで暮らしたらう。今頃は兎に角僕の二三の書面も君の手に入つて居ると信ずる。此頃は僕は妙に *geninental* になつて僕自身もドーモ抵抗が出来ぬ、此一年間程多忙なる精神的生活を経験した事が今迄無い。君は君の幸福なる旅から既に歸られたであらうと思はれるが、其中の感慨の一斑だに Partake することが出来るならば僕はドンナに幸であらう。湘南の夏景色も美はしからぬではない、唯人生の樂は一心にあるのだ。吾々は何時ゲーテと同じく *über allen Gipfeln ist Ruh*……の三昧に入ることが出来るものか。學問も道德もまだく人生の解釋には足らない。——昨日は喇嘛教主の來朝で東京では歡迎に忙しい、隨て西藏は社會の一視點となつて居る。獨逸は暑くはないか、歐洲大陸は大暑で非常に死人が多いと電報に見えたが、言ふ迄もなく用心し給へ。近

日に長い手紙を送りたい、僕の家族は丈夫だ。諸同人も丈夫だ。サラバ！

卅四年七月二十五日

(天磯より東京なる登張信一郎氏へ)

憶起す、昨年の今日は晩、芥、臨、貴兄と小生と玉川に遊びたる日なりき。今や臨、地方に行き、晩、海外に去り、予は病客となりて放浪す。感慨何ぞ堪えむ。今月帝文の時論、痛快の極、不覺拍案三歎。お互に大に奮ひたし。來月の太陽に美的生活論と題するもの、随分思ひ切つたものに候。御批評を乞ふ。

卅四年八月十五日

(天磯より登張信一郎氏へ)

昨今の暑氣、都も此地も同じ事と存候。酒あれども飲めず、語りたくも友無く、

苦熱の中に展轉致居候。過日御來磯の折は久々にて會心の興會、今以て忘じがたく候。未だ落手は不仕候得共、シヤックの書御郵送可被下よし、苦心萬々忝奉存候。唯今帝國文學到着、雜報欄内の御氣焔至極面白く會心の文字、空谷梵音の思あり。大兄の文字、月毎に雄大、大慶々々。ニ一テ、論も時流を抜ける一大論文、拵として當今に比類なし。藤岡氏の文も面白く讀まれ申候。『文藝評論』の御評溢る、如き御同情、感涙に不堪、人生知己あれば死すとも恨なきにて候。小生氣力消耗、筆端窘縮、昨日來儿に向ひて一字を成さず、顧みて撫然たり、御憐察被下度候。近日折にふれて、小生の詩、左の數首、字數の制限は御免の事。

△

かつて此世、かくまでは

狭からざりしを

今の我身の老いぬるぞ

口惜しき。

△

さらくと悲しくもひびくか

蟬の小川よ

やがては大濤の中に

没るべきなれば。

△

波にも似て碎けたるか

わがこゝろ

などまどかのまゝに照さるる、

大空高く澄み渡る月。

△

君よわが名を問ふなかれ、

わかれてはまた會はるべき我ならず、

見すや空行く雲の右と左を。

尙ほ二三首も有之候へども、まづはこんなものに御座候。境遇御推察被下

度候。

芥舟兄にもよろしく此頃の御無沙汰の御わび願上候。

卅四年八月十九日

(天磯より登張信一郎氏へ)

拜啓シヤツクの書二巻、昨日落手、色々御厚配奉謝候。残暑如焼、興會索然。臨風、芥舟諸兄に御序の節よろしく。

非詩非歌一首

「波にも似てくだけたるか、わかこゝろ、などまどかのまゝに寫さるる、大空高く澄みわたる月」

卅四年九月二十四日

(平塚より宇都宮なる笹川氏へ)

昨日匆忙之際あとにて思へば御話申度事山々ありしを殘多きことに候ひき。秋霖連日詩興盡適(唯胸中悶々遂に一字を得ざるを恨とす。兩三日中には興津へ參可申候。昨夜夢甚苦今朝尙懊惱。君之健在を祈る。

三十四年十月二十六日

(鎌倉より東京なる佐々木信綱氏へ)

拜啓秋もやうく深うなりまさり候處如何御暮し被遊候や。大磯に罷在候節は色々御厚意を給はり其後御親切なる御文給はり候ひしが例の懶怠の身とて御返事も差上げず打過候事面伏の至に御座候。何卒御仁免被下度候。今月初旬當日に罷越例によりて何事ともなう夢の如く朝夕を送り居申候。流石に由緒ある土地とて丘陵のながめもたゞならぬ心地して心なき身にもくさくの哀を催し申候。身體の具合よろしき日には處々舊跡古社寺を歴訪して七百春秋の短きを吊ひ居申候。幕府編纂の新編相模風土記百廿餘卷參考致候へば

鎌倉志など別に見る必要も無之名所の枝折にはこよなき書物に御座候。右書によりて山々谷々残りなくあさらばやと樂しみ居候。日蓮上人の事蹟も小生年來研究致度志望候ひしがこの度の卜居を幸ひ出來る丈け調べ見むと先日より高祖遺文録讀み初め昨夜第十卷讀了申候。上人の文殊に消息文は一種異様の文體にて上人の性格その儘の氣魄光燭眞に鎌倉文學の一偉觀かと被存候。尙佐渡配流前後の御書は實に天地の大文字なるよしなれば先きくを樂しみ讀居候。又此地の美術の殘品をも調べ見たき念願有之是も近々着手致度考に候。運慶安阿彌等の作は少々は正物有之候半宅間法眼と稱する佛師の作に秀でたるもの甚だ多し。右諸書に見えざる名稱なれば何人にやと後日の研究を待居候。過日後藤齋宮と申す北條時代(早雲)よりの舊家の代々佛師なるが今も扇ヶ谷のほとりに住む候を訪ね造像のことなどくさく語りあひさすが老人の事故吾等の知らぬことも大分知り居申候。右談話中金澤稱名寺山門の仁王像が關東一の名作なること小生の鑑識と突然符合いたし膝を打つて感嘆致候。一兩日中には建長圓覺二寺の古書畫檢覽可致候。當地にては古畫を藏し候は

右二寺と光明寺位のもの、八幡宮のは少々あてにならざるとのことに御座候。
 秋晴の候一日御散策如何に候や。當地は大磯よりは俗氣も少く、心も落付き、
 觀念の書窓にうつる月影もいとさやかに照りうつり申候。御奥様へも可然御
 鳳聲被下度候。

御公達御健康如何、當方幸に無事、乍餘事御安心被下度候、草々。

こよひは晩秋の十五日、空もよく晴れ、夕べのながめ樂しみ暮し申候。

卅四年天長節の朝

(鎌倉より東京なる井上哲次郎氏へ)

拜啓仕候。今日は四海同慶之佳節芽出度申納候。此年は秋に入りてより晴
 雨寒暖兎角不序、病軀特に不快を覺候處、別に御障も不被爲在候や。去五月以來
 打絶御疎音仕、懶怠の罪陳謝之辭も無之候。過日御報知申上候通、去月初より當
 鎌倉に罷越、幽靜之旦暮相重居申候。大學へは毎々出講致候へ共、氣の爲にや京

地之塵氣胸苦しき心地せられ、矢の如く往返致居候。講義は先回にて總論を終
 り、來る十一日より愈々本文に入可申候。總論は日本美術史研究之過去及現在
 より、本邦美術の特質に關するものに有之候。後者之目次大略如左有之候。

日本美術の特質

一 歷史上ノ特質

- イ 印度支那ノ勢力ヲ攝受シテ是ヲ集大成セルコト
- ロ 繪畫彫刻共ニ外國人若クハ外國人ノ子孫ノ先導ニヨリテ發達セルコト

ハ 父子兄弟ノ傳統ニヨリテ流派ヲ繼續セルモノ多キコト云々

二 技巧上ノ特質

- イ 骨法用筆ト日本畫書畫ノ關係
- ロ 寫實法ノ缺乏
- ハ 一種ノ印象派トシテ見タル本邦美術

三 美術ノ理想ニ關スル特質

イ 實際上
ロ 審美上

以上十二時間講了

猶右は其中訂正淨書の上、御高評を仰度存居候。

鎌倉は大礎に異り、古霸府之遺跡として流石に興味深く候。此地居住を幸ひ、鎌倉時代に關して多少の研究を遂度、目下結構中に御座候。考證上にては幕府編輯之新編相模風土記百廿五卷にて盡たり。是れ以上の時代之文明、殊には偉人、美術等に關しての歴史的考察追懷は即ち缺けたるが如し。小生は此方面に於て多少力を試むべくやと考居候。日蓮上人六傳記并に高祖遺文錄卅卷は過日來大なる趣味を以て讀了、殊に開目抄、種々御振舞抄等之諸篇に於て、感激夜眠を成さず候ひき。是人こそ獨り鎌倉時代ノ偉人なるのみならず、本邦稀有之大才なるべきかと愚考仕り、猶其人物を一層深く了得せむが爲、法華經讀誦罷在候。實に壽量品の一文は本化妙宗の根底なること、略々悟了致候。何れ此上人に就ては後年一書を物し度懸念致居候。

當地古美術は思之外に乏しく候。建長、圓覺、光明、兩三寺を外にすれば、古畫之襲藏言ふに足らず、佛像も到る處、運慶、安阿彌之作と稱するもの有之候へども、見るに足るものは割合に乏しきを恨とす。唯東慶尼寺、宅間寺等に散在する宅間法眼なるもの、作に珍らしく逸品有之、此宅間、古文書に未だ見當らず、目下探討中に有之候。小生の見る所によれば、本邦の佛像彫刻の中には、佛師系譜類之書中に其名見えざる所謂無名作家中に名人不少やに相見申候。例せば定慶の如きは、運慶、快慶以上の名手と其作によりて推斷致候へ共、系圖に名あるのみにて、其傳記は勿論、他に就いて一言も所傳無之、畢竟沒鑑識なる古人之不用意之所爲と遺憾に存候。

秋も深く相成、屋後之山の樹もや、紅を染來申候。病軀おのづから哀情多し、朝夕風露に對して亦如是觀を爲す、御憐察被下度候。時下爲邦家、爲大學、切に御自重、奉祈候、恭々不一。

拜復、昨日は御狂駕難有奉存候。唯今は御使者を以て、法華會義全部八冊御貸與被成下、奉謝候早速可及拜讀候。又預て恩借之宗義鈔一冊御使者に托して御返却申上候間、御落手被下度候。又明日あたり參堂如何之御指諭、難有拜承、夜分歸途寒風に襲はるゝも如何と存じ候へば、乍勝手午前中に罷出度、尙右にて御不都合可被爲有や伺上候。萬々其折申述度、草々不宣。

卅四年十一月十五日

(鎌倉長谷より同要山なる田中智學氏へ)

卅四年十一月十五日

(鎌倉よりライプチヒなる姉崎へ)

嘲風兄！ さて何事より書き初むべきか。此の秋のはじめより絶えて御消息を申さざりしが、君よりは度々の御書面、うれしく懐かしく讀み返しく候ひ

き。今は言はまほしきことも此の狭き胸には忍び難きまでに多くなりまさりつ。いでや巻紙のあらむ限を是の思にて染め申し候はむよ。

されど君よ、何事より書き初むべきか。曾てはイルメナウの幽棲に老詩聖が晩年の安慰を偲び給ひし御書、世にもあはれに誦し候ひしが、さても今朝のゲテが *Caroling* の畫箋に述べられたる感慨こそ世にも貴く覺えたれ。國を離れて千萬里、雨蕭々の夜半などにかゝる思念に逢着せば、懐郷の情如何に切なるべきよとくれぐれも御察し申し候ひぬ。げに此世廣く美るはしくはあなれど、園守の身には旅すべき要もあらじ。己のが花園を養ひ護るところ、そこには天の譽れもあれ地の福ひもあれ。——あはれ吾等には如何に貴き教訓に候ぞ。されど君よ、こは園守の身の上の事也。君は是の廣き世界を以て其の園とすべき身ならずや。日本は真理の前にはいと小さき國土なるべし。君は是の大いなる真理の爲に世界の花園に心し給ふべき身ならずや。強ちに故郷を輕しめざれ、唯君が天分の大きいなるに思ひ及びて自ら重する所あれよ。予が如きは所詮此世にては敗亡の身也。たゞ君が如き人器の友たることによりて、天の寵靈

の吾が上にも彰はれむことを祈るのみ。あゝ君よ、心強かれ、自ら重せよ、自ら尊大なれ。

君よ、予は敗亡の身なりと云へり。げに、敗亡の身也、屈辱の身也、無念の身也、思ふこと内に結ばれて外には狂者の如く想はるゝ身也。せめて是の體軀の健かにして事に勝ゆべくむば、叶はざるまでも亦詮術へあれ。今の吾身は且暮の樂餌是れ事として、書を讀み筆を執ることだに心にまかせず、空しく青天白雲を望みて如是觀を爲すもの、あはれ敗亡の身に候はずや。年來心甚だ穩かならず、偉人の前蹤を望みては徒に此身の力足らざることを哀しみ、さりとは斯くて已むべき身ならずとは何によりての覺悟なりけむ、敢て螻蛄の斧を揮て樓車の轍に當らむとすることしば、事敗れ心落ちて而して已む、残るところは斑斑たる創痕のみ。予が心是の如くにして日に月に老い且つ衰へぬ。世人と知友と這般の苦惱を知るもの稀也、たゞ空しく孤影と相對ひてこゝに亦如此觀を爲すのみ。君よ、あはれ斯らむは敗亡の身ならずや。人は訓えて曰く、愚なる者よ、汝は此の世に於て如何ばかりの者と思ふや。人は多く國は弘し、汝が如きの

生死存亡得て關する所に非ず。小我に慢じて増上の惡念を起すとも、世の汝を見ること飛花落葉にも劣るらむと。げに、飛花落葉にも劣るべき身也。うたかたの有れども無きが如き果敢なき身也、とは素より存知の旨ながら、たゞ此一念の抑えがたく、ほだし難きを如何にすべき。あゝ君よ、人の生るゝ己れの爲に非ざれば、そも何物の爲めにぞ。世に最も悲むべき眞理は人生の事實なることには候はずや。

かゝる思ひを君讀まば笑ひもし給ふべきを、暫く止めなむ。去月初めより鎌倉に移り越し候ひぬ。大磯よりは聊か樂しかるべしと望み居申候。大學にては一週二時間一回として本邦美術史を講じつゝあり。其の總論をば去る頃十二時間もてやうやく講じ了り候。こは本邦美術の特質に關するものに御座候。かねても申し上げし如く、本邦美術史は小生が是迄の罪滅ぼしに聊か抱負ありて従事せる研究に有之、幸に健康許さば數年の後にはモノになる物成就したしと結構罷在候ひぬ。鎌倉は君の好み給へる土地の一なりしやに覺ゆ。今や秋

も深うなりて古き覇府のたゞすまゐ、一向所感の身にはたゞならず覺ゆ。縣孝孺が所謂百里停雲總殺氣、一林高樹皆秋聲のながめ、目も寂しう心も疎く相成申候。此地に住へる縁に何か土地に關する一著述試み度思へども、例の古跡の探討は鎌倉志八卷と新編相模風土記百廿五卷とにて盡きたり。何かそれ以外の述作もやと思念罷在候。日蓮上人の追懷に勵まされて過日來其の傳記並に高祖遺文錄など繕き居候が、さても是の偉人の生涯こそ今更貴くも仰がれ候ものかな、心も言葉も中々に及ばず候。上人の人物は其の教義を味ははでは解し難ぬるふしありと、さる先輩の勸めにより、法華經等をも讀み申候ひしが、げに方便壽量二品の本義なくては日蓮上人一代の大信仰大抱負も其の根柢を失へるに同じきこと覺束なくも合點致候ひぬ。げに遺文を讀まむものは先づ彼の經を讀むべきにて候ふべし。遺文中の開目鈔種々御振舞鈔などは、申すに及ばず、其他の消息文みなく、上人の傳記に對照して與會難盡。文學として見るも上人の人物そのまゝの大發現、げにく、鎌倉時代第一の偉觀とや申すべき。三上氏等の日本文學史に一語も言ひ及ばざりしは如何にともしぶかし。君の意見如

何。若し興大いに加はらば、せめては是の偉人の一面を攝取して吾が筆端に活現したきもの也。當地古美術は多く言ふに足らざるが如し。古畫を多少製藏せるは建長、圓覺、光明、其他兩三寺に過ぎず。建長寺の顔輝が十六羅漢、これはた天下の一品たるべく候。佛像には運慶、安阿彌の作と稱するもの多々あれども多くは信じ難し。唯東慶寺其他二三の古寺に宅間法眼の作あり、是れいさゝか珍とすべし。唯宅間法眼と名告れる佛師は、寡聞なる小生の未だ聞き及ばざるところ、何れ研究を遂げ度しと思ひ居候。かゝる道樂に暮らし、頃日は誠に快よく候へども、少しく熱氣あり、頭重き日には終日室を出でざることあり、困却の至に候。

過日御送りの Das Künstlerbuch の第一卷 Böcklin 並に ツォーリヒなる エートゥス學

會出版の二論文、何れも興味少らず讀申候。ベックリンが事は此夏頃の御書にも相見え候ひしが、吾等には全く新しき題目に有之、趣味別して不淺候。該書所挿畫圖中、Toteninsel の一幅は先年『エヒョー』紙上にて一見せし印象、是の書により

て呼び起され申候。本邦の繪畫もまづ依例如例と申すべきか。御存知の正木直彦氏過日美術學校長となりてより、さしも情弊の府たりし同校も追々面目を新にすべしと期待被致候ひしが、今は改革一頓挫の由風聞有之候。今秋の白馬會には黒田氏の作はじめ數幅の裸體畫ありしを、下谷警察署長は行政處分として腰部に黒布を纏はしめたりとか、トンダ滑稽に候はずや。是の爲に何時も世間に冷遇せらるゝ同會は大に世上の好奇心を惹起し、觀者日々如堵と申す事。或人は何故に黒布に代ふるに友禪縮緬のあてやかなるを以てせざりしやなど戯れ候ひき。いつもながら馬鹿しく覺え候。

息
* 學界近來の著述としては村上專精氏の佛教統一論第一編大綱論と題する一書、殊に世間の注意を呼びしかの如くに候。氏は是の著述の爲に眞宗大谷派の僧籍を脱するの已むを得ざるに至り、過日其理由告白書を公にせられ、予も亦一本を領し候。佛教教理に門外漢たる予には、氏の所説の是非如何は解らざれども、氏の高潔雄大なる精神は深く有識者の歎美する所と存じ候。

建部君去月無事歸朝、本邦社會學の爲に一生涯を開き候事と存じ候。可賀可

賀。歸朝後未だに面會の機を得ず。去月二十日頃同君並に新留學生諸君の留送別會上野精養軒に開かれ候ひしが、病體遠在の身として遺憾ながら出席致さざりき。當日同君の例の大氣焔を待設けたる人々は其の挨拶の簡單低聲なるに一本参りし由にて、同君の演説をば空腹にて聞くはたまらじとして食終る頃まで引き延ばせし幹事の用意は凡て無になりし由に候。藤岡氏は言語學、八杉氏は露語、熊谷氏は教育、塚原氏は兒童心理、小西重直氏は教育、是二人は第二高師より何れも今回留學を命せられぬ。大學、高等學校の増設のとも例によつて聲のみにて、唯九州に醫科大學の新設あるよし傳へ聞く。げに大學増設は多く政黨の御都合上より唱へ出され當局者亦政略上已むなく賛成を口にするものにて、學界の事情眞に是を必せざるは少しく眼あるもの、皆視る所也。大學教育の擴張としては京都大學の完備こそ目下の急務ならぬ。田舎議員のオドシなどは當局者一笑に附して可也。視學官は今回文部省の手を離れて内務省の所管に移りたる由かゝる無用の官こそは全廢して其の費用を留學生の方にでも廻せばよかるべきにと思はれ候は如何にや。丁酉倫理會は從來の如く活動し居れ

り、御安心あるべく候。

雑誌太陽は毎々御一讀成され候事と存じ候が、さても小生が近來の言論を何とか見給ふや。友人先輩の中には其のあまりに詭激、偏僻、且つは幼稚なる由、毎毎教誡を賜はり候向も候へども、小生に於て如何に自ら直うすべきかを知らず。或は小生の年來の病苦と失意とによりて狂せるに非ずやなど言ひはやすも候由なるが、是れはた小生に於て素より存知の旨也。時に深夜自ら省みて其の云爲の常道に外れたるものあるを思ひ、自ら我心の健康をさへ疑ふこと無きに非ず。たゞ、是非も無きは一念の發作にて候ぞかし。狂か疾か自ら知らず、山も拒ぎ難く、河も留め難きものあるを如何ともし難うぞ覺ゆる。詮する所は一身の所繫已みがたく五感の道尙ほ永しと見るべきか。何れは我心の澄む時やがて來りぬべし、今の我に於て如何とすること能はざる也。あゝ唯耻かしきは世上の萬人よりは君一人の見る眼也。高山こそは小事の得喪によりてかくも迷ひ惑へるよと想はれむことの口惜しさよ。願ひ思ふ所詮はたゞ、笑て是

の一局面の通過を眺められよ。理を争はば合はざることもありなむ、道に照さば許し難きふし素より無きにもあらじ。是れはた小生に於て存知の旨也。唯君よ、一個樗牛の存在は日月の天に麗るが如く、大日本帝國の世界に樹立せる如く、動かし難き事實ならずや。而してこの一個樗牛の思惟信仰まことに己に忠なるものならましかば、はた是れ同じく日月の天に麗るが如く、大日本帝國の世界に樹立する如く、動かし難き事實には候はずや、如何。

あゝ君に別れてはや二歳に近からむとす。君は學びの路深く分け入りて世の暗きを照すべき位を得給へり。吾れは日に衰へ月に衰へて、恐らくは其の心さへゆがみ曲れり。筆執れば人に狂なりと呼ばれ、物言へば君は健かなりやと問はる。曾ては吾れに理想の天地ありしが今や無し。新になる光明を提ふれば、人は見て悪蛇の眼ぞと誡めり。吾が手は久しうしてパイロンが詩集に觸れぬ。あゝ、マンフレッドやサルダナバラスに再び青年の慰藉を仰がむとは吾が想ひ設けざる所なりき。君よ、憐れと見給はずや。吾れは又ニイチエの思想に先天の契合あるを覚えぬるは如何にぞや。人は吾れに向て言へり、汝は先

日蓮上人!!

消

息

に日本主義を唱へたるに非ずや、文學美術をさへ國家的歴史的の立場より論評せむと企てしに非ずや、今や則ち如何の状ぞと。哀しい哉吾れは答ふべき言葉を知らず、唯自ら省みて、心のまゝにして自ら欺かざりしを喜ぶのみ。天も照覽あれ、遠きに在ます君の我身近くにありても見をなはせ、良しや世を擧げて偽と罵らむも吾れに於て引くべき一分の責あるを覺えず。所詮は矛盾の人身を受けて此の末法の世に人となりぬ。大覺世尊だに四十餘年未顯眞實と宣らせ給ひて法華爾前の經典をば一妄語に附し給ひぬるものを、いかに況むや、性淺く果乏しき吾等如きに於てをや。あゝ多くは言はじ、君よ這般の煩悶を如何とか見給ふぞ。見上ぐれば窓前の山樹一分の紅を染めぬ、春秋席あり、日月晝夜を度る、人心何ぞ獨り是の如く常なきや。なか／＼に申すも愚かの限と存じ候。

ことし秋に入りて君が懐かしき書の瑞西の印しを染めし頃より此地兎角雨のみ降り續き候ひぬ。憶へば去年の今頃、興津の浦邊にさすらひて三保、薩陞のほとりに遊びくらし、この哀しき記憶とはなりけるよ。今としは十月の大

半は雨に鎖ぢられ、晴天三日とは續き申さず。大方人の心の物狂はしうなるは斯る時ぞと聞き及びぬれば、わが是の朝夕の物思ひもたゞならず思はれ候ひぬ。君が先つ頃の文にライン河のほとりに雨に降りこめられて遠く吾れをば憶へるよし書き給ひしが、あゝ此の心、互ひの心ぞ唯よく解すべかむなるを、如何に如何に。此の手紙君が手に落ちむ頃には君は既に萊府の學窓に書讀み給ふ頃なるべし。萊府はよからぬ處と聞き及ぶ、現に大西氏の病を獲給ひしも此地なりき。言ふまでも無けれども、何事を差置いて攝生第一と心得らるべく候。

書かまほしきことの半ばをも書かざるに、書くべき紙の残り少なになり候ひぬ。佐渡は紙の無き處とかこたせ給ひし日蓮上人の語も思ひ出されて、由無きことを永く書き列ねむの心無き業を已むべくや。畢竟吾徒はお互に強からざるべからず、又強がらざるべからず。叶はぬ迄も理想の旗押し立て一度は甘心の軍果し申さむす。君の歸りまさむ頃は明後年の暮なるべくや。吾れは先づ生を力めむ糧を蓄へむ。壯き者のすべき程の事爲さで朽ちむは口惜し。開目

鈔下巻の左の文字をば君には如何に見給ふぞ。あゝ是の意氣是の精神ならでは何事も果し得られまじうぞ覺ゆる。

詮する所は天も棄て給へ諸難にも逢へ、身命を期とせむ。……善につけ惡につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てむ。日本國の位を譲らむ。法華經を捨て、觀經等に就いて後生を期せよ。父母の頸を切らむ、念佛申さずは、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば用ひじとなり。其の外の大難風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ。我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ等と、誓ひし願破るべからず。

是の書認め了りたる夕べ、ラインフェルデンの三通の御書並にニイチエ詩集一卷難有領手候。ゲーテを以て無聊孤獨の唯一の友とせられむ程の君の境遇こそ心憎く、覺え候へ。 *Menschengefühl* の譯面白く拜見仕り候ひぬ。げに、太史公の如く天道の是非を疑ふともまことに益なし。神は良し天にいますと

も我等は地に横はれるを如何にすべき。所詮は人々己れの中に神を見出し天を造るの外無きこと一に高論の如し。人間一大事の覺悟即ち是の一問題の解決によりて決定すべしと存じ候。くれぐれも御身大切に遊ばさるべく候、不盡不盡。

卅四年十一月二十日

(鎌倉より東京なる藤井氏へ)

來二十二日丁酉會之件御報被下候へ共、出席仕かね候間左様御了知被下度候。古瀬府之秋色中々に見捨てたものにあらず、源氏山あたりの紅葉も見頃に御座候。其中御一遊如何。當今は大の鎌倉通と相成、御尋ね之件には細大無凝滞御答申候。

卅四年十二月十日夜

(鎌倉より東京なる登張氏へ)

今夕歸來、御書拜讀仕候。昨日午後貴寓に御訪申上、久々にて傍若無人の放談致度樂候處、御不在にて残念に候ひき。即ち芥舟漁郎を驚かし、夜九時近くまで氣焔を吐き、近頃愉快に候ひき、唯兄も席に在らざりしを恨とす。御書の趣一々色讀、感會不淺候。吾黨の言論世俗に容れられざるは素より覺悟の前ながら、無能無格の凡小輩の譯もなく囁々たるは笑止且つ忌々しき限に御座候。仰の中、央公論は昨夜芥舟子の注意にて一讀致候ひしが、かゝる愚論は一笑に附して可也と存じ候。……斯様の者共の申す事決して齒牙にかけられまじく候。早稻田學報の記事は小生見す候へども、御書によれば、言語道斷の不埒、其下劣なる根性憐み且つ憎むべく候。……かゝる劣輩の云爲はまづく雲烟過眼視せられて然るべく候か。唯親分の常識一點張の俗論は大に討つべし、小生も此點にては先輩ながら、一步も譲らざる覺悟に御座候。今月の雜誌に馬骨人言の駁論あるよし、鶴首々々。來春紙上にもお互に大光焔を吐かむは如何に候や、小生はなか／＼屈せず勝ち誇りたる者の態度にて盛にやる積に候。醒雪金港堂に入る由、小生はがらにもなきに、ヨセバヨキニと思ひ候が、事後なれば不及申。

何れは同社は博文館の向ふを張りて雜書雜誌發行の企あるよしなれば、其爲ならむ。醒雪は桂月と同じく國文學者が山也、吾等の相手にはならず候。然し賑かになり、仕合に御座候。目下の處、吾黨の勢は偏に君の方に倚らざるを得ず。事黨同伐異に類すれども、主義上の争、可然事と存候。芥舟兄とも御申合せ大文字御染有之度候。……

帝國文學の原稿は、過日歸りがけに芥舟に話せし通り、ドモ是から新しきものは出來ニクシ。依て中學世界の爲に書き候「況後録」と題する日蓮物語、是れは到底中學物にあらず、聊か小生得意の文體に候間、右御掲げ被下度候。讀者は全く別なれば不都合なかるべきか。右況後録は小生假りに豪傑文體と名くるものにて、今の……ヌラクラシク、奴隸文體に反せるものにて、即ちニイチエ主義を文體の上に發現したるものに候。小生は帝文の讀者に、一讀して貰ひたい、依て右様御取計被下度、博文館に謄寫申附置候間、兩三日中には屹度御送申上候。尙有無御返事を乞ふ。

あまり永く候へば、是にて擱筆いたし候。此花は屋後の山の産物にて机上芳香紛々、御手に落つる頃には凋落すべくや。早稻田學報おあきに候は、御送被下度候。小生も一打撃一叱咤を加へおくべく候。頓首。

卅四年十二月十一日

(鎌倉よりライプチヒなる姉崎へ)

是頃は兎角無沙汰勝になつて面目ない。當時は萊府に住つて居らるゝ事は、學士會の名簿宿所に承知して居る。健康は如何か、僕は兎角はかゝしくないに困る。學校の方も此十二月の暮から來年の三月まで休で、跡で補缺することにした。別に變つた事もなく、唯々不愉快だ、………僕は來年の帝國文學に「況後録」と云ふ一夜作りを書いたが、いさゝか一氣呵成の得意物で僕を精神を日蓮の自叙を假りて現はして居る。是非讀んでくれ給へ、文體もいさゝか注意した。………家の後の山には水仙が盛だ！

卅四年十二月十四日朝

(鎌倉長谷より同要山なる田中智學氏へ)

拜啓仕候、此頃は寒氣頓に加候處、御起居如何。今朝は御近刊の妙宗一部御寄送被下、毎々の御芳情不堪感謝候。爾後恩借の法華會義は隨時熟讀罷在候。今朝の妙宗紙上、山川若の物し給ひし聖祖の洪化文中の本化上行菩薩の一段は、特に興會不淺拜讀仕候。高祖遺文録も十五卷までは略目讀仕候へば、近日參堂の折は其後卷拜借相願度候。來る十八日頃までは少々俗事の爲め拜趨仕難く候へ共、廿日頃には拜眉の榮を得度存居候。其節は上人御傳記并に法華經に就きて御垂訓を仰度奉存候。萬々其折に申殘候、早々不一。

卅四年十二月二十日

(鎌倉より宇都宮なる笹川氏へ)

過日の御書拜讀、御無事御精勵の趣大賀々々。小生事病痾依然あしともよしともなく、先は心境共に碌々たる事と御承知被下度候。鹽原にてポインター種の善きもの御求の由、涎羨々々、御令弟よりの御書も拜讀仕候。同君より過般來拙文可寄稿旨御來命に候ひしが、病軀懶怠の事として御返事も不差上打過候ひき。新春の松陽新報へは何か近日起草致度考居候。……新春には御歸京と存候が、其節當地方へ御一遊如何。醒雪上京して金港堂の文學雜誌編輯に従事の由、先日同社岩田より承知致候。今時文學雜誌記者として上京の事は、小生に於ては不賛成に候へども、事後の詮議如何ともしがたし、首尾よく成功すればよきがと被案申候、貴説如何。但京地同人の來るは喜ばし。君去れる代りに醒雪來れりと見ば可ならむか。來春の帝文に美文御寄稿の由、久々の御執筆、鶴首罷在候。小生も況後録と申すもの一篇寄稿仕候間、御一讀の榮を得ば幸甚、右は日蓮上人の述懐に擬したるものに有之候。當地移住來、日蓮研究は愉快なる一事業に有之候。上人は實に日本第一の偉人と思はれ候が、貴兄所見如何。小生は日本二千五百年史中是人に於て、始めて崇拜的英雄に遭遇せしの感あり、興會不淺、

感謝之念日に深く相成申候。小生は來春梅花の咲迄當地冬籠りに御座候。貴兄御赴任以來、教育上の所感切に承りたし、至囑々々。竹風芥舟依舊盛也。桂月にはトント遇はず、何だか少々ノイツタ様に見え申候。時下向寒之候、御自愛是祈、不盡々々。

此花は屋後の山の産物に有之、御手許に參候節には香氣も失せぬべし、机上の芳烈中々にゆかし。

卅五年一月二日

(鎌倉よりライプチヒなる姉崎へ)

僕に與へたる君の書は……今日……讀んだ。嗚呼讀了た時の僕の心持を何に喩へやうか、僕は自ら力を増した様に感じた、實に會心の文字とは斯の様の文の事であらう。中段以後は特に文調に一種天籟の響があつて、其の自然の流露に千萬鈞の力がある。君の大なる信向が活々として表はれて居る。僕は

此書が我邦の思想界を警醒する力の大きなることを疑はぬ。丁度僕が今月の太陽に「本邦思想界に對する吾人の要求」と題した論文と大に趣きを同じうする所がある様に覺ゆ。此頃は日蓮上人の研究に身を委ねて居る、此英雄の生活によりて吾等の弱き命の強くなる様に感じらるゝ。病氣は寒に向つてから少し善い様に感ずる。……………

(二月九日頃ライプチヒ著)

卅五年一月五日朝

(鎌倉長谷より同要山なる田中智學氏へ)

新春の御よろこび申納候。

一昨三日は、折あしく荒風の爲め、參堂致かね、遺憾此事に御座候。又昨日はわざわざ御使者給はり候處、是亦折惡敷外出中にて御芳志を空しうせし段、御海怨被下度候。今五日には午後には拜趨可仕と構居候處、夜來風邪惡寒を催し、卅八度内外の發熱にて臥床罷在候次第、一兩日は外出叶ふまじきやと被存候間、此旨

あしからず御諒察被下度候。又過日御會下山川君より少年雜誌記載の事項につきて、御丁寧なる御書給はり痛入候。生意氣なる小兒輩の惡戯もとより懸念するまでも無之事、御一笑被下度候。同君は右の記事に就きて來月の妙宗紙上に御辯駁の御文可有之やに御報有之候ひしも、貴重の御紙面此れ體の瑣事に御汚の事は勿體なき事と被存候。尙同君へ御傳被下度奉願候。
楮餘萬々、兩三日風邪快癒後、早速參堂の節申述度候。勿々不宣。
舊臘御約束申上候帝國文學は別封御郵送申上候間、御一覽被下度候。號揃はず御判讀是祈。

卅五年一月十七日

(鎌倉よりライプチヒなる姉崎へ)

Tierek の D. geniale Mensch 今日落手、多謝々々……………天才の批判に就いては僕のいさゝか異存を挿む所はあるが、君は如何いふ意見か、精しくは後日言ひ送

ることによしう。来る二十日には學位授與式があるとの通知があつた。……新年に書いた僕の論文に同情する人が不思議に多い、いろ／＼の方面から賛成の意を申込んで来る、いさゝか快よい。冬籠でトント出京せぬ、マヅ愉快にくらして居る、*adieu!*

(二月廿一日頃ライプチヒ着)

卅五年一月十七日

(鎌倉より東京なる藤井氏へ)

實に旅中の病人と云ふ格で、何方へも一切缺禮の事に仕候。別によくもあしくも無く、心境共に碌々と御承知被下度候。アカン坊はさぞめでたく相成候半、蛇は三寸にして人を呑む氣ありと申せば、君に似たらば眼光燦々の事と存候、如何。其中土曜日より泊りがけに、是非々々御出あれ、ブタ位は有之候。此地案外温暖也。

況後録は、………ヌラクラ文が癢に障り、一番強い所をお目にかけてし迄也。

報顔々々。

卅五年一月二十六日

(鎌倉長谷より同要山なる田中智學氏へ)

拜讀。一昨日寒天の處はる／＼御來訪を給り、光榮不過之候。段々の御高論與會難盡、いよ／＼退轉なく修業の上、本化妙宗の醍醐味に接するの日を樂み居候。高著攝折論單行は發刊のよし拜承、拜讀の上は批評等は力不及候得共、何分の所感無臆面、太陽紙上に掲載可仕候。極寒の際御上京、折角御厭可被遊候。

早々不一。

三十五年一月廿九日

(鎌倉より吉村寅太郎氏へ)

拜啓、其後は久々御無音に打過御申譯も無之候。佐伯、高島二君より御近狀はば拜承仕、益御壯健御事業御精勵之趣珍重之至奉存候。其後新築御企圖之成女學校之寄附募集は如何の御模様候や、御漏被下度候。獨立御一身にて萬事御配慮の事奉恐察候。小生事昨冬向寒の頃より少々快方に向候様にて病魔と戦居候。昨今はかねて御配慮相願候ひし米國の吸入劑佐伯君の御芳心にて用居申候。此夏には富士山下の高燥なる地に卜居候事にほゞ決定仕候。小生の病は真に克己を要し候事とて、疎懶の小生にとりては不本意の事のみ多く候。唯年來の病苦と閑居とによりて靜思冥想の機を得候は不幸中の幸かとも被存候。昨今は極寒の候とて一切上京相やめ、梅花の節までは當地冬籠の事と相決申候。久々拜晤を得、御懐かしき限に候、其内可遂本意樂居候。右は御無音御詫旁々、身勝手のみ申述候、勿々不一。

追而御聞及も候半が、過日論文呈出致候處早々及第し、去二十日學位受領仕候。素より虚位にして、得失もとより意とするにも足らざれども、先輩の獎勵も有之、且は國元の老父母等は流石に昔氣質によろこび候はんと存じ、大

俗氣を奮ての業に候。貴下多年の御保育の御蔭と感銘不淺候。

廿五年二月十六日

(鎌倉より東京なる畔柳都太郎氏へ)

一昨日マタヤラレタ、換言すれば咯血した。コ、三週間は何事も出来ぬ、便所へも行けぬ、随つて帝文へも書けぬ、併しまだ死にさうもない。何れ又書くことの出来る日が来るだらう。

廿五年二月二十四日

(鎌倉長谷より同要山なる田中智學氏へ)

謹啓。小生事過般持病の咯血を起し、十餘日間絶對安靜を命せられ候まゝ、御寄送の高著御親切なる御書面に對しても、御禮の御返事も不差上、缺禮御許被下

度候。唯今は初めて楯上にて執筆仕候仕合に御座候。

丁度日蓮と基督と題する論文に着手せむとする間際の障碍相起候事なれば、
今月は何も書き得ず候ひき。此のみ遺憾に候へども、或は更に静思熟考の機会
を與給へる天の攝理にもやと一層同問題に就きて省慮罷在候。御經驗も爲有
候半が、病臥もなかく趣味あるものにて、多用なる平生難得多くの精靈上の經
驗を得、且讀書の暇を得候上には、無上の機會と存候。

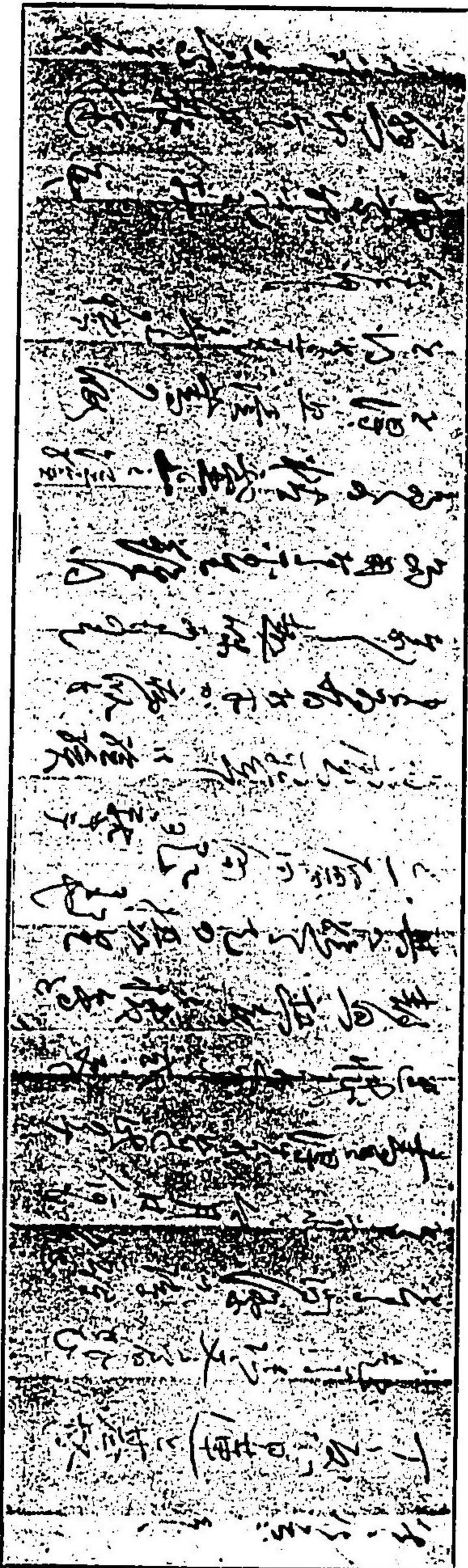
妙宗研究に就いては、毎々御懇切なる御鞭撻にあづかり、驚馬小生の如きも、其
度毎に不少力を得候事に御座候。尙此上とも何分の御指導仰上候。

右病中亂筆御免被下度候。追々快方に趣候間、乍憚御安心被下度候。

草々不一。

卅五年三月七日

(鎌倉より宇都宮なる笹川氏へ)



去る六日の御書嬉しく披讀仕候。去年暮より打絶え御無沙汰仕居候ひしが、思へば無念之事して候ひき。新年の御よろこびも羈旅の病客とて何方へも缺禮候ひし、御海容被下度候。春色四もに到りて、野も山も流石によそならぬけはひに候へども、病客例によりて藥餌に親むの外他事無し。去月中旬のはじめ又又やられ候ひしが、昨今は褥をはなれ碁など圍み居候、御安心被下度候。御地は赴任以來既に半歳を超えたり、例の里心起り候頃と御噂致居候が、都も別に面白きとありげにも見えす、文壇の近時など別に御話申上候事も御存知の外には無之と存候。醒雪文藝界に成功するや否や、昨冬來訪之節大に警戒を加えおき候。雑誌編輯は大俗務にて、第一八方美人主義ならねばならず、随てふくるゝ腹をさすり、耐えねばならず、一個半個の丈夫魂ある者にとりては、一難義と存候。……

……過日太田の三浦校長殿より來書の中、貴兄の事に關し、笹川の奈良茂の大臣、僅かの中に校長のヨツを吞こまれ候には流石の大通と感服(原文のまゝ)云々と
なり、遙に兄の校長學御研究の昨今を想望仕候。……此春休には是非々々
御一遊、久々の御面晤を樂み居候。姉崎の手紙太陽紙上の大氣焔、痛快と存候。

水城大先生には今以て面會の機を得不得、吾等と心境日に疎きを覺申候。何やら面會日をきめて一々友人等にくばり候やに傳聞、何だか訪問も怖ろしげに感せられ、ほと／＼大先生にはなるまじき事と決定仕候。紙幅盡き候へば、又之日を期し申候不盡々々。

倭文子殿健全なりや。

卅五年三月七日夕

(鎌倉よりライブチヒなる姉崎へ)

Griffin Potockaの半身像を載せた君の二枚續きの片信を、一昨日病床で讀むた。タイホイゼルは誠に面白く讀むた、殊に君の手澤を存し、且君の胸がこの同じラインの上に恐くは吾と同じ鼓動したかと思ふと、僕は言ひ知らず愉快に感じた。如何にも Cruel wall of time & space は、此世に於ける幾多の惱みと涙の媒ではあるが、是ある爲に人生に詩もあり、宗教もあり、又哲學もあるではあるまいか。君の

言は實に尤もだ。唯眞の友情、眞のラブに對しては如何なる惡魔の障害も無駄であるだけは、樂もしい世の中と云はねばならぬ。僕は此前の手紙に病氣だと書いたが、昨今は褥を離れて居るから、心配して呉れ給ふな。……………

卅五年三月十日

(鎌倉長谷より同要山なる田中智學氏へ)

拜啓、過日は遠路御見舞を給はり、御芳心之段々不堪感佩候。かの夕は折あしく荒風に候ひしが、御歸途別に御障も不被在候や、御案申上居候。日蓮上人論はいよ／＼近日起稿仕べく候。試に腹稿之大要左に略記し、御高見を仰ぎ度候。尤も實地に筆とり候折は、序次題目等に多少の變化有之候と存候。

一 結要付屬(?)

靈山會下結要付屬の次第を法華經によりて畧序し、後文日蓮上人と上行菩薩との關係を暗示す。

二 上行菩薩出現の預言

時に關しては大集經之五々の五百歲藥王品の「後五百歲」の定解等處に關しては彌勒菩薩天台傳教等の預言的遺文等によりて末法の初、日本國の時處を上行出現の舞臺とし、次に其人に關して勸持品等の預言によりて上行菩薩の概念を定め、

三 法華經の行者としての日蓮(？)

文は一轉して日蓮傳に入り、佐渡流竄の迫害の起盡を述べ、佐渡は日蓮によりて一大自覺の機縁なることを一言す。

四 上行菩薩の自信

上行の天職を自覺せる日蓮の心的徑行、其宣言より、佐渡三年の大法悟を略述し、此大使命の自覺が日蓮一生の大基礎なることを論じ、前文の上行出現の預言等を日蓮の自覺により解決す(所謂本地垂迹の意義を評す)。

五 日蓮と預言

次に釋尊の預言と日蓮との關係を論じ、日蓮の信仰、自信は預言によりて證せ

られたるを述べ、自らも預言の力によりて一生を感化せむとせし次第を述べ、預言は天地人生の上する(上に有する?)至上方を意味すること、而して日蓮が此力は釋尊付屬の法華經の行者、上行菩薩たるによりて生ずることを論じ、開宗の預言、立正安國論、蒙古來襲十一通書……等を略叙して預言者としての日蓮を評叙す。

六 日蓮と日本國

佛識、佛敎に本ける國家主義の眞面目を論じ、其遺文によりて是を證し、一閻浮提廣會流布の一大理想と日本國護持の觀念との關係を説き、終に其超國家的大理想を讚嘆す……

七 蒙古來襲に對する日蓮の態度

日蓮傳中の一疑問なること、又恐らくは日蓮生涯中の一苦悶なりしことを推論し、日本國滅亡を喜び、若くは希望せる日蓮の精神を解釋もしくは其外觀の矛盾を調和するもの(するものは恐らくは一閻浮提廣會流布の佛識に本ける大理想によりて確立せられたる日本國の一時的膺懲手段に過ぎざりしなら

むこと等を論ず。
八 日蓮と基督

大略こんなものに有之候。先生などより見れば、極めて幼稚の觀察には候半なれども、廣く日蓮上人の精神を知らしむるには多少の力あるべきか。小生の論文の一の希望は、専ら日蓮の心境に入りて其當時を解釋せむとするにあり、而して可成は全篇を枯淡なる歴史的哲學的の者たらしめず、詩的(假構的空想的に非ず)のものならしめむとするにあり。小生の景仰する上人の人物性行によりて、活ける人生の一大詩篇を感得するを得ば、小生の大に(脱?)とする所に御座候。楮餘萬々御面晤の折に讓度候。右畧稿に對し御高見御漏被下候は、大慶奉存候。勿々不一。

追而過日御願申上候高祖遺文錄卷十二、十三、十四、十五、四冊拜借願はれ候はば難有奉存候。甚だ虫のヨキ願には候へども、其中御家人中にて長谷へ御序の節も有之候は、御付托之程奉願候。

三十五年三月二十七日夜尊上にて

(鎌倉長谷より同要山なる田中智學氏へ)

拜啓其後御病狀如何候や、御伺申上度心懸居候處、今年は梅にもそむける身の櫻にも縁無からむとてや、兩三日前よりまたく、尊上の人と相成候ま、仰臥のまゝに一書認申候。本月妙宗紙上卷頭の御論は近來の大文字承讀仕候。殊に小生の感動せしは、御高著宗門の維新に對する世評に就ての御文に候ひき。物の數ならぬ不肖如き者をだにかばかりの御力と思召候迄の時勢の非は、二十餘年來金剛不壞の御熱誠もて經營せられ候鴻業に對して如何ばかりの御無念ぞや、感涙といめあへず候。妙宗合卷一、二遺漏なく拜讀、興味津々、中にもをりく草の御物語、病中所觀など面白く拜讀候。其中三、四をも恩借仕度、事理兩觀之御説は、猶ほ三卷に涉りて不少小生の樂觀を惹起致候。

此等は借おき候、日蓮上人の國家觀に就いての御高説の段々重々拜讀、且拜聽

仕候。尙ほ氷解せざる一難圃有之是等いづれ其中拜芝之上親しく教を請度候。太陽紙上へは今後半年許は上人に關する卑見(或は感慨とも申さむか)を陳述致度結構仕居候。師子王門下の學衆方等へは釋迦へ說法に候半事勿論ながら、少世間に上人研究の端緒もしくは動機を與ふるならんかと望居候。中には幼稚の見も多々可有之其折に御叱正被下度候。

日親上人の傳記も本邦希有の佳談と被存候まゝ、其中離蓐會心の折には何か小兒輩の爲に一篇草し度心懸居候。

開宗紀念大會も近き候折柄精一御攝養奉祈候。小生も今後一週間も相續き候て床をはひ出ること可叶かと望居候。萬々拜晤之折に申殘候、不一。

三十五年四月一日

(鎌倉よりライプチヒなる姉崎へ)

君のワグネルに對する感情は誠に人生の尤も深い意味に觸れた言葉だらう

と思ふ。あゝ自己の生命を撫無することの出来る愛が此の世にあり得るならば！此言葉の意義を解する人でこそ、大宗教家、大詩人乃至眞の人となり得るのではないか。世人は文明の資と云ふ、されど古より吾人の生活を積極的に豊富にしたものは其根底に於て是の大渴仰を有する所の宗教、文學、美術乃至一種の唯心論的哲學ではないか。僕の所謂道學先生の道徳や學究居士の眞理などは共に與らずと云ひ度い。Phantasia一を生々發展の天地人生の大道を助成したものは實にこのフハンターである——僕は言ひ過ぎたであらうか。道徳は道徳の腐敗を説明するがそを救済する力は無い。丁度蛆虫が糞土の必然の産物であるが、そを清淨にする力の無いと一つではあるまいか！(昨年十二月以來上京せぬ)

僕の健康は餘り良くないが、良くなる望はある！

ワグネルのタンホイゼルの外のオペラを送つて呉れ、面白！

(五月九日ロンドン着)

卅五年四月九日

(鎌倉よりロンドンなる姉崎へ)

此頃は夜毎に君を夢みぬことは無い、昨夜で三夜續いた！ 何事とも取りとめもない夢ながら、其夢の全體の色あいが一種の陰鬱悲哀なる趣がある！ ああ光明快瀾なる希望を君と共に夢みることの出来ないのは、想ふに、是のからだの不健全なるからであらう。夢ながら僕は悲みに堪えない。

三月二日の二枚續きの端書は今朝受取たいよ、カイゼルの國にアデューをして英國に行くとの事、願くは到る處に幸あれ。………晩翠に遇うたら又色色面白い話もあるだらう、後便を待つ！

(五月十三日ロンドン巻)

卅五年四月十六日

(鎌倉長谷より同要山なる師子王學人へ)

拜復唯今御使者を以て御書及日本橋論御遣被下、落手仕候。御使者の言によれば此頃は餘ほど御回復の趣、大賀奉存候。小生も漸次快方に赴き、昨今は平生とほゞ變ることなき氣分に相成候間、乍餘事御放念被下度候。日本橋論は慥に今日の俗物共を驚覺するに足るべき御論と存じ、早速御書添の旨意をも申含め、博文館へ送附可仕候。

小生此頃大遺憾の事有之候。此頃醫師並に近親共より『書くことは已めよ』との忠告を受け、不得已當分廢筆同様、唯短小の漫言位折にふれて書き漏らす事と定め申候。日蓮上人に關する論文も、右事情にて一兩月は相休み、短文にて十分鼓吹致す積に御座候。無念御察被下度候。乍併願みれば病餘苦惱の際の筆は筆端萎縮、思想縦横ならず、却て體胖氣旺の時機を待つかた可然と存候。此月末の御紀念會には都合次第可成上京仕度心念に御座候。萬々拜晤の折、草々。追て過日懇々御垂示の心理的療法は、目下大に實行中に有之候。

卅五年四月二十三日

(鎌倉よりロンドンなる姉崎へ)

英國よりの君の手紙には接せぬが、定めて幸ひの朝夕を過ごされつゝあるであらう。倫敦に就いての君の觀察に接するの日は待遠い。此方には何も珍らしきことは無い、菅公祭、承陽大師六百五十年忌、日蓮開宗六百五十年紀念會などの祭りが盛りだ。僕は健康が兎角思ふ様でないので、長論文を草することは已めて、小さき庭に四十餘種の草花を培養などして、此月日をマギン暮らして居る。あゝ哲學が何だ！ 智識が何だ！ 是の憂き世の苦を脱るゝの道は三つしかない、曰く Long love, early death, or madness. 三 Al, my friend, which shall I choose? 鎌倉は新緑の時期で、野も山も楽しげな笑を含んで居る。東京には頓と行かぬ。桑木がニイチュエの……を丁酉會で説くとの報を今日得た。思想界は凡俗の極だ、君の聲も僕の聲もなかく、人の耳には入らぬ！

(五月廿七日ロンドン着)

卅五年五月一日

(鎌倉より東京牧野啓吾氏へ)

拜復仕候。貴下御歸朝之仔細に就いては、預て手島氏より傳承仕居候處、先般同氏の手を経て御述作之御消息文并に御論策御寄送被下、隨時拜讀仕候。續て去月二十五日附之御書牘を領し、御懷抱之一端ほゞ了解致したるげに存候。現世に對するくさくさの御感懷餘所ならず、拜讀同情之至に不堪候。唯小生に對する御獎美之御詞に至ては、眞に當らず、汗顔之極みに御座候。小生の如きは物の數ならぬ一俗子にて、たま／＼不遇に際して一身の孤情を訴ふる、たと／＼蛙の晴雨に鳴くにも等しかるべくや。素より平生物し候文筆にても御判斷被爲候半が、偏狹奇矯之世評を被るべき、聖代一不祥之論者に有之候へば、自らの身だに常に満たすとすものゝ、他に對して訓誨がましきことのもとよりあり得べくもあらず、若し拜晤之機を得候節には、必ずその眞に一俗子たるには吃驚可被成事と奉存候。乍併、未だ面識なき貴下よりかりそめにも多少之矚目を給

はり候事は、小生之名譽とする所に候へば、御來訪は素より歡迎する所に有之候。如今病餘之身とて何時にても在宿仕候へば、御都合次第御枉駕被下度候。現世之苦悶を御色讀被成候御經歷は、小生之知らむことを樂む所に御座候。先は御返事かたぐし申上候。萬々他日に讓申候、不一。

卅五年五月十六日

(鎌倉より大阪なる井上準之助氏へ)

拜啓。此度は益雄君御寫真一葉御郵送被下、難有奉謝候。誠に可愛く相成られ、朝夕之御たのしみさぞくと御察申上候。借又益雄君には何時の間にかやられ、御妹之君もあらせられ候由、雲の外より音信有之、盛大の御儀と羨殺之至に御座候。畔柳氏も此度にて三人の父となるよし、吾黨之諸士いよ／＼盛なりと謂ふべし。獨り惜む、小生は昨今一向意氣地もなく、朝暮藥餌に親しみ申居候。

右御禮申上候。御近狀を審にせず候へども、定めし御健勝之御事と奉賀候。

小生は當地に常に罷在候間、隨時御通行の節は必ず御立寄被下度候。不盡々々。

卅五年六月二日

(鎌倉より宇都宮なる笹川氏へ)

拜啓。別封奈良朝史序文放言相認め候へども、徒らに高著を汚し候半と不堪懸念、御取捨御隨意奉願候。明三日は乙羽兄葬儀に付、上京致度考候へども、如何せむ、先月二十一日以來微恙呻吟、今に外出せず、上京不任其意、残念此事御座候。乙羽兄も遂に逝きたる乎、昨報に接して終日茫然として沈思懷想致候ひき。近來文字も兎角思ふに任せず、偶々筆に上るもの大々の悪文心地あしきこと限りなし。松韻濤聲獨り舊に依りて颯々たり。何れ其中遠からず上京可仕、御面晤を樂居候。草々。

芥舟男兒を擧げし由、氣煽不可當。此氣煽文學系統に少し向けてやりたきものに候。倭文字娘日にまし可愛く被相成候半、みな／＼様へ宜敷御願上

候。
テト御出懸可被成候。
序文の中不適當の處は御刪正、毫頭不苦候。

三十五年六月十七日

(鎌倉より東京なる佐々木信綱氏へ)

御書ならびに竹柏園歌文集御寄送被下、難有奉謝候。此度は甲駿の名勝御探りの趣、うらやましく存候。兎角にからだ弱く相成候へば、旅行も心にまかせず、甲斐なき朝夕送居申候。大塚君にも此度は度々御めもじ叶ふべくやと樂し居候。

卅五年六月二十六日

(鎌倉よりロンドンなる姉崎へ)

僕の方から久しく書かなので、僕の健康に就いて心配して居るかも知れぬと思ふと、怠りの罪が怖しく感じられる。君からの獨逸以來の端書 *Les musées de la Hollande* 殊には四月初めの倫敦からの手紙など、たしかに受取つた。あゝ、僕は目下の感情を何と言ひ送つてよいものであらう。トテモ此短かいものは盡せぬから、近日必ず長い手紙を書く。是のはがきを書く傍には、山百合の挿花が盛に香つて居る。此心もちを是の香ほりの様に寫すことが出来た時、人は初めて自然に勝つたと言ひ得るであらう。

倫敦からの君の手紙の末段に、マコーレーを引ひて、且つ我の大なるを知らざりせば、此所と人との大塊の中に没し去らるゝであらう、との君の言葉は實に僕自らの言葉の様に、吾耳には聞へる。土井の病氣は肺ではないか、心配でならぬ。保護してやつて呉れ。僕は講師をやめて、斷然漂浪の人となつた。此地長谷に小さき家を求めて先づ鎌倉の住人となつた、併しドーモ吾思ふ所は駿河灣にある、ドウシタラ好からう。健康はまづ〜好いから安心して呉れ。いろ〜後に書送る。

(八月一日ロンドン書)

五月十四日から同二十日に亘つた君の精神に充ちた手紙を廿四日之他の手紙并に端書、タイムズ週報と併せて一昨日受取つた。即日にも又昨日にも返事を書き度かつたが、此頃は梅雨期の最中で健康の少からず衰へた爲め、氣力が沮喪して幾度か机に向つて遂に筆を執りかねた。今夜は力めて書くが許して呉れ、ドーモ長く書く譯には行かぬ、君の精神に充ちた手紙に應ふべき僕の感情の十一をも現はすことが出来ぬ。呉れ、くも残念ではあるが、ドーカ赦して呉れ。シヨールペンハウエル、ニイチエ、ワグネル、此三人の間の關係を論じた君の文によりて、僕は此三人間の關係其者を知ることよりも、君の精神の要求の那邊にあるかを知る處に僕は少からず幸福を感じる。此事に就いては僕は君に滿幅の敬意を捧げねばならぬ。恐らくは僕は尙ほニイチエの理想に彷徨する者であらう。愛の福音に應へ得る迄には尙ほ多少の曲折を経ねばならぬのであらう。

卅五年七月三日夜

(鎌倉よりロンドンなる姉崎へ)

此事は僕の中心の慚愧で、又同時に讖悔である。此間の僕の精神状態は他日精しく君に打明けたいと思つて居る。日蓮に對する君の批評も大に僕を啓く所がある。併しながら國家と宗教との關係については、君の日蓮觀には多少の不備がある様だ。丁度此事を明後日發行する太陽紙上に僕はザット書いて置いたから、自然君の手に届いたら是非一讀して呉れ。僕は日蓮に於て其の信念の爲に國家をも犠牲とする偉大なるイゴイストを觀た。今日の道學先生的倫理説に勝えざる僕の大きな安慰は此人の此特質に現はれた。是の如くにして安立し得らるべくむば、天下他に何物を要せざる如く感せらるゝのが僕の目下の病であらうも知れぬ。ワグネルに就いては僕も少し研究して見たい、近日井上さんの處から借り受けることにしやう。

君の今度の論文は先度のよりもインハルトが多い様に僕は思ふ。……………土井からは度々書面や書物を貰つたが、トント無沙汰をして居る。何も病氣を桶にするではないが、不快の日には一日茫然として何事もせず、陰鬱な考えをとりとめもなくたどりつゝ暮らすこともある。同君も健康になつたか、肺な

どに故障があつたら何事を措いても心配せねばならぬ。願くは僕の友人間の肺病は僕一人で負擔したいものだ。これは恐らくは訛傳ではあらうが、僕はドーモ氣になる。先日……新歸朝者の談に姉崎は肺が悪い様だと話したと僕に告げた。そんな事は無論嘘だらうが、先年キールで肋膜炎たる風など引いた事もあれば、此點はドーカ十二分に注意して呉れ。

僕の寫眞をよこせと言はるゝが、僕も送りたいは山々だ。唯ドーモ此の瘵せに衰へた面貌を遠方に居る君に送るに忍びないのだ。ドーカモウ少し肥つてからと毎々思つて居るが、其の肥りが中々來ない、僕の是の心根を憐れと思つて呉れ。僕が此儘に死んだら君の送別に丁酉會連と一處に撮つたのが君の僕に對する永遠の想像となるであらう。其方が僕は願はしい。但是秋にでもなつたら君に送り得べき寫眞も取れるかもしれぬと僕は潜に願つて居る。

日本では、今年程雨の多い年は無い。四月花の頃から天氣の續いた事は極めて少ない實に不愉快な年であつた。僕の家には二百坪ばかり地面がある家を

合せて、其中に小さい花壇を拵らへて草花などを植ゑて楽しんで居る。此れで平和な樂が得らるゝか如何か、今尙ほ試験中だ。先日土井が花の種を送つて呉れたので兩三日前早速蒔いた。今日はもう出さうなものと、其の翌日から小兒の様にノゾヒて居る。

此地には語るべき友は田中智學氏の外には一人もない。氏の門弟の一人は、如何いふ因縁かヒドク僕を慕て朝夕病氣回復の祈禱を僕の爲にして呉れて居る。田中氏は扇ヶ谷の奥に居る、相見ること一月に一度位で日々寂寥な生活をして居る。山水の風景も餘り面白くない。ドーモ清見瀉のあたりが思ひ出さるゝ。

社會も別に變つた事もない、學界も別に變つた事もない。ダルマパーラが先達田中氏を訪うて當地に來たので、氏の依頼で一日接待してやつた。……太陽の文章で君も見らるゝ通に、近來僕の意氣が少からず衰へたことを自覺する。會心の文章などもトント書けない、強て文を賣るの已むを得ざる境遇を僕は哀しむ。

此頃メレヂョースキーの Death of the Gods を讀むで少からず面白く感ぜられた。ヘレニスムとクリスチアニスムの争は永久のものであらう。別紙は土井に序に届けて呉れ。

卅五年七月二十七日

(鎌倉よりロンドンなる姉崎へ)

先達の君の開書は來月五日の分に全文を掲げる事にした。此地は今尙梅雨期同然の天候で、毎日鬱陶敷で大に困つて居る。憶へば此春の花の頃から氣候は押なべて大不順で、雨天曇天の多かつた事は、僕の記憶中に比較のない年だ。僕等の如き病人には實に困る。其爲に病氣も昨今は宜しくない、安眠を得ぬ事が最早や二ヶ月以上も續く。あゝ一夜小兒の如く眠れたならばと、半夜子供の規則正しき寢息を窺ひながら思はぬ夜とてはない。送つて呉れた草花の種は、毎日生長して楽しみにして居ると、土井に傳へて呉れ。人は脆いものでドンナ事

でもしてまぎれて暮せるものだ！……………

いろ／＼書きたい事が山々あるが、心緒亂れて糸の如く、トテモ今日は書けぬ。東京の友からもトント消息がない。最早や是身は人々に忘れられたのであるか。嗚呼吾友よ、君さへ忘れて呉れなければ、僕は少しも寂寥を感じない。途で辭儀をする人が幾萬あつても世の中は沙漠に等しい。自愛せよ、不盡々々。

(八月廿五日頃ロンドン着)

卅五年九月二十八日

(鎌倉長谷より同要山なる山川智應氏へ)

廿六日の御書拜讀仕候。十數日前より健康大に衰へ、病徵思はしからず心氣懊惱を極め候まゝ、何となしに鶴沼へ罷越候處、素より病に遁るべき身ならねば、病苦は彌増り候まゝ、過日又歸宅、臥床罷在次第に御座候。毎々の御心遣永世忘じ難く候。十年の友も一月逢はざれば路人に等しくなる今の世に、君は如何なれば物の數ならぬ小生に斯くは憐を垂れ給ふらむ。殊に久しき以前より日々

の御祈禱まで之御志のうれしき、何に喩へ申すべき。兎ても長からぬ生命なるべければ、折角の御祈念もあだにならずやと、是のみ心苦しく候。仰せ越されし御書は、小生も爾か思ひ立ちし折なれば、早速讀始、今更に新しき慰藉を感じ申候。是よりは日々誦讀可仕候。秋氣定まりて天朗かに相成候は、病勢も或は衰へ可申や、其節は少々思立候事有之、駿河清見瀉の邊りに數日之旅行を試可申候。昨日は咳嗽劇しく、且定時發熱盜汗等あり、閉口致居候。小生思想に關して御思寄の事は、何分之御注意を仰度候。素より定まれる信念も思想も無之、唯隨時思念する所は隨時の發作とも見るべきものか、三界廣貌として一心寄するに處無し、色心共に浮浪の小生に候へば、人にも世にも飛びはなれたるふしのいとく多かるべく候、是非も無き事に御座候。山崎氏の新體詩に就いては、其中佐々に相談可致候。田中先生の序文は御あづかり申候。今朝の暴風雨にて師子王文庫は別に損害なきや。小家南の垣根倒れいさゝかの花壇は淤泥に委し去り見るも哀れげに御座候。誠に昨日までは紅根紫怨の風情もありしが、誰か此夜半のあらしを想ひしりたるべき。——夜半に嵐の吹かぬものは——他の上のみ

に無之候。不盡。

卅五年十月一日

(鎌倉より國元の實父へ)

卅五年十月一日

(465)

拜啓。何時頃よりか絶て書面不差上、御申譯無之候。身體の都合にも可有之、とかく諸事懶く相成、何方へも書狀はトント書不申候。先以て別に御障もなう被爲在、珍重奉存候。直殿も此頃は回復と存候、如何に候や。過日信策來鎌之節、皆々様の御様子も略承及候。私事健康此五月頃より兎角引續き思はしからず、昨今は病兆甚だ宜しからず、困却罷在候。咳嗽頻に出で、安眠と申すことは數月前より相忘れ申候。加ふるに近時は定時の發熱有之、體量も大に減じ、吾れながら驚かるゝ程に瘦せ衰へ申候。醫師は格別あしゝとは不申、何れ氣候定まり候は、多少回復することも可有之と望居候。時々は一切外出せず、大抵臥床罷在候。

此は不申上もの事には候半が、預め得御意度一事有之候。人は何時死ぬるやも不被測、まして私の如き病人は猶更之事に御座候、身後の事御依頼致おき候もあながち無用には有之間敷と存候。先づ此度は墓地之事申上候。駿州清水港附近龍華寺と申すは、三保の松原より富士山への眺望本邦無比と存候。私も數回遊覽し、常に慕居候土地に有之候。若し小生死後に相成候は、右龍華寺に埋葬相願度候。素より故郷には祖先之墳域も有之候事ながら、かの陰鬱なる禪宗寺は、私の氣には如何にしてもかなはず、是非々々右願之通に被成下度候。龍華寺之宗旨は日蓮宗には候へども、宗門の異同などは御かまわなく御許可被下候。日蓮上人は私之平素崇拜する一大偉人にて、其門末之寺に埋らるゝは何かの因縁と見え可申候。右墓地は私健康回復次第彼地に罷越、預め談合、買求置度考居候、此亦御合被下度候。兎角の御異存は被爲有候やも不被測候へ共、此事は私之頑固なる願と御召、新士町養家高山家とも御相談、是非御許可被下候。斯様之事縁義不宜事には候へども、生前に於て死後之事を計るは、毫も怪むに足らずと存候へば、何も御氣にとめられまじく候。私も出来る丈は攝養可仕候。初子、里子

此は不申上もの事には候半が、預め得御意度一事有之候。人は何時死ぬるやも不被測、まして私の如き病人は猶更之事に御座候、身後の事御依頼致おき候もあながち無用には有之間敷と存候。先づ此度は墓地之事申上候。駿州清水港附近龍華寺と申すは、三保の松原より富士山への眺望本邦無比と存候。私も數回遊覽し、常に慕居候土地に有之候。若し小生死後に相成候は、右龍華寺に埋葬相願度候。素より故郷には祖先之墳域も有之候事ながら、かの陰鬱なる禪宗寺は、私の氣には如何にしてもかなはず、是非々々右願之通に被成下度候。龍華寺之宗旨は日蓮宗には候へども、宗門の異同などは御かまわなく御許可被下候。日蓮上人は私之平素崇拜する一大偉人にて、其門末之寺に埋らるゝは何かの因縁と見え可申候。右墓地は私健康回復次第彼地に罷越、預め談合、買求置度考居候、此亦御合被下度候。兎角の御異存は被爲有候やも不被測候へ共、此事は私之頑固なる願と御召、新士町養家高山家とも御相談、是非御許可被下候。斯様之事縁義不宜事には候へども、生前に於て死後之事を計るは、毫も怪むに足らずと存候へば、何も御氣にとめられまじく候。私も出来る丈は攝養可仕候。初子、里子

も丈夫に暮居候間御安心被下度候。

右諸事とりませ御返事やら御願やら申述候。不盡々々。

信策は學校教員の外には何れへも不向に御座候間卒業之後は何れ地方
等學校あたりの語學教師になる外無之と存候。トテモ此煩雜なる社會に
出で仕事を成し遂ぐる様の性質には無之候。其節には乍不及周旋可致候。

卅五年十月二日

(鎌倉より印度なる姉崎へ)

等しく相見る能はざれ共同じくば歐洲よりも印度に來られ候方如何ばかり
吾等にとりて心強かるべき。名は知らねども、美はしげなる花の色之尙しのば
るゝ匂ひに、君が濃き情も思はかられ申候。印度と云へば何となう恐ろしき心
地す。たとへば瘴癘之地のごとく思はれて、其處に住む外國人は多く熱を病む

こと、我臺灣よりも甚しげに想像せらる。こは事情を知らぬ人の誤れる想像なるべけれども、君が千金の身の、此地の風土に習さるゝ様の事無きやう、切に祈る。歸朝の期は來春なりや、又は夏にも可成や指折りかぞへて待わび居候。あゝ君を横濱の埠頭に迎へて互に手を握りたらむ時の吾が歡びは如何なるべき。吾は此歡を如何にして顯はすべき。恐らくは言葉もなく泣きくづれむも知れず。其時君は如何に思ひ給ふらむ——なむど、樂しき小兒らしき想像に耽り居申候。唯今の吾身の悲しさ！此春以來健康は一體に思はしからざりしが、此の一月前よりは急に衰へ來り、咳嗽頻りにして發熱さへあり、安眠の味は數月來忘れたり、體も甚しく瘦せ衰へ、骨立ち、見るから憐れげ也。あゝ此健康を如何にすべき。或は君を横濱に迎ふる能はざる様之事あらば、何ぼう悲しかるべき、なんと思ひなやみ居申候。唯攝養は十分に致居候へば、其中には多少の回復を見るべきかと望み居候。九月五日發行の太陽紙上には君に與ふる開書を載せしが、其折一部御送いたしたれば既に御覽の事と存じ候。兎角は色心共に相應せず、見思の惑未だ斷たず、煩悶懊惱の狀情御憐察を給はるべく候。唯君が

スピリチュアリズムに於けるが如く、一面幽冥に對する一種の憧憬ありて、やがては何物にか發展し來らむとするものゝ如し。されど這般の消息殆ど言語に絶す、御推量可被下候。

本邦學界何の奇無之、哲學界の狀態など全く死灰の如し、生命絶てなし。社會ニハ紛々擾々と種々の現象旦暮に往來すれども、精靈界の光明は何處よりも照さず、世は常闇に御座候。大に罵倒したき情に堪えざれども、此聲到底人耳に達すべからずと思へば、せめては書き遺して後世に傳へ度く候。願はくは天イマ暫らくの健康を與へて靜思と冥想の時を與へよ、かくて遺憾なく此磊塊を吐き盡くすを得ん、なんと日夕願居申候。

鎌倉より此秋には清見瀉へ移り度と心懸け候ひしが、前申す様の健康の爲め、轉居は先づ見合せ申候。……

只幸に天候は自ら四時の序を違へず、今とし又清明の秋に入り申候。やがて健康の回復を待つて山野の秋色を討ねばやと樂居候。書き度き事は多々ある様なれども、目下熱あり頭重し、筆進まず、凡て次便に讓る。くれぐれも印度の氣

候に注意せよ。君の身は大切の身也。

(十二月上旬ボンベイ巻)

卅五年十月五日

(鎌倉より登張信一郎氏へ)

さて何と御詫申可や、先月半ばより病狀兎角思はしからず、咳嗽咯痰之上に發熱盜汗さへ加はり、二十日よりは臥床のまゝ、今日まで引つゞき申候。昨今のやせをとろへ様は我ながら哀れに御座候。かゝる様にて御約束の文もかき得ず、御作も床中にて讀居申候。何とぞ御ゆるし被下度候。

卅五年十月三十日

(平塚杏雲堂病院より宇都宮なる笹川氏へ)

運命は復小生を病院裏の囚人たらしめ候。過般よりの再度の御書たゞゞ

風情偲びがたく候。鹽溪の紅葉を手にして其の寫真に對すれば、神往禁じ難く候へども、今は何事も思ふに任せず、是の一年の好風光を陰鬱なる病室裏に閑却することの無念さ、たゞゞ御察可被下候。來年嘲風は定めて歸り來るべし、生と兄と三人相携へて此の奇勝を探らむは此上なき願ながら、生の健康是を許すや否やは頗る疑問なり。是春の暮つかたより病勢自然に進み來り、最近二ヶ月に於ては、特に諸種の惡症候を呈し來ぬ、此頃は咽喉をさへ大に痛め、嚔下發聲共に困難を覺ゆるの狀態に陥り申候。尤も苦しきは咳嗽の爲に安眠せられざる一事なり。三ヶ月程以前より安眠の味はトント忘却せり、枕に就けば慄然として畏怖の念のみ起る。あゝ、是れ何事ぞや。睡眠は吾等の第二の生命なるものを、これをすら取去らすむは休まざるは、何の無情ぞ。生は是迄多くの金も識もなく、加ふるに病にさへ冒されしが、猶是の睡眠てふ貴重なる國土を有せしに、今や則ち亡矣。あゝ、兄よ徒に病苦を訴ふるとなす勿れ、予は安眠なき人生の慘境は、そを経験せしものにのみ語るべきものと思ふなり。

かゝる話は兄の前に語るべきことには可無之候。兎も角も醫師の勸告に任

消

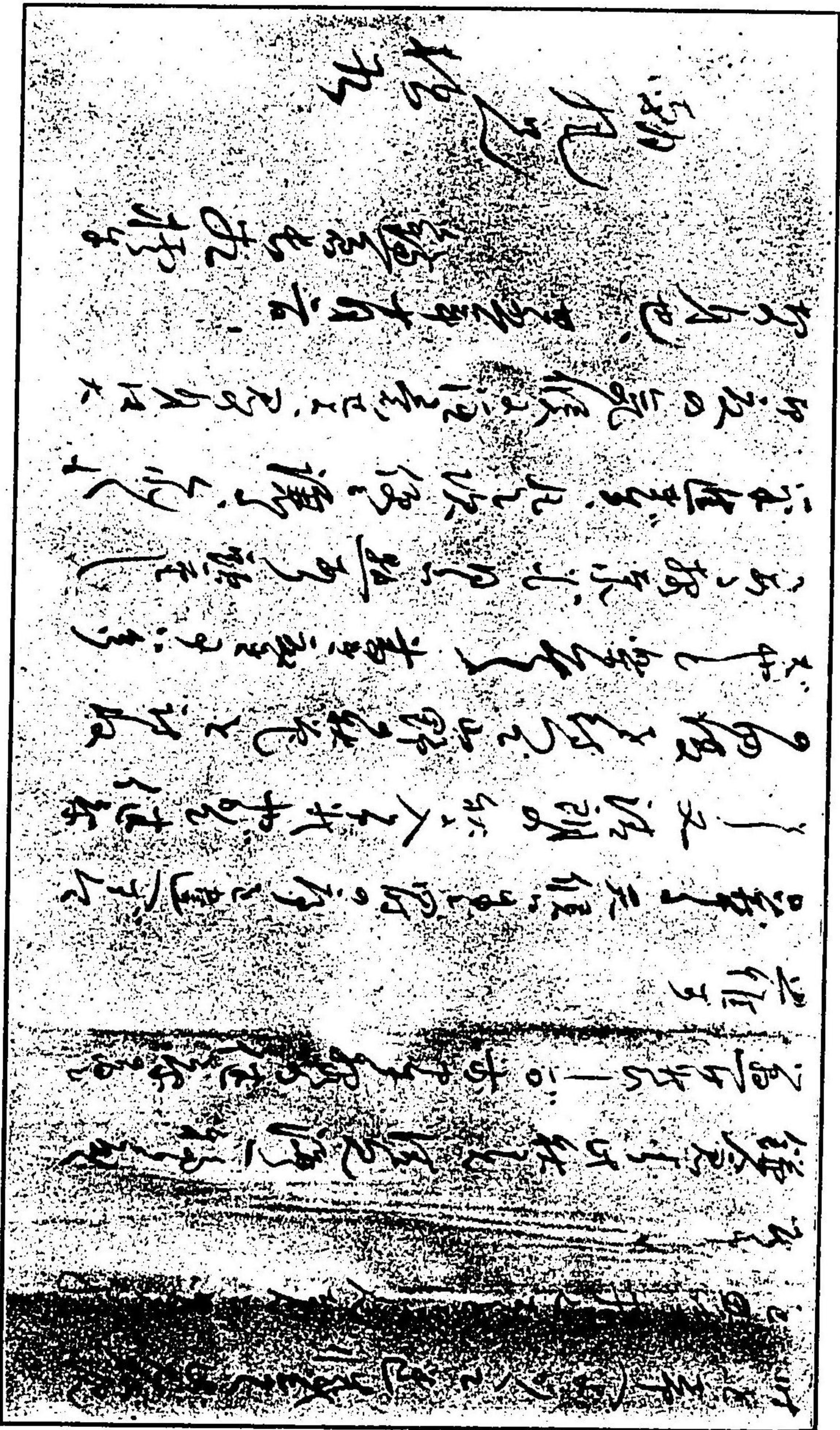
せて、去る二十五日當病院に入り申候。國元の親共などはひどく驚いて倉皇馳せ參する様の態、おのづから重病人の如くに何時しか相成候へども、實はさ程にも無之、一二月も経ちて、熱も去り悪症候も去りて良傾向を呈し候はゞ、一日も早く歸宅すべく候、御心配被下間敷候。

竹風のあらひ髪は、少々あらひ様の足らぬ所ありしが如し。つまりは自ら知ることの明無きに歸せんか。是の弊竹風のみならず、吾々同士何れも警むべきことゝ存候。………

息

嘲風今頃は印度にありて果物に牛乳を食ほり居るならむ。さるにても晃山鹽溪の秋色を擅にし給ふ君の隠逸こそ美ましけれ。

あゝ日は暮れたり、一穗の孤燈は文字通りに前世紀の光を放ちつゝあり。筆とらむも覺束なし、眠に就かむも畏るし。空には夕やけの光眩けれども、吾心地獄の如く暗し。已むなん〜。



外篇第一

倫理教科書

(第三卷第一章) 社會總論

社 會 總 論

(475)

國家と直接の關係無く、隨て一定の法律制度の下に在らず、唯、其生存幸福の利害を同うする人民の間に存在せる結合體を稱して之を社會と云ふ。故に社會は其範圍の廣狹に於て、素一定の界限あること無し。之を小にしては一郷一黨の興衆より、之を大にしては四海萬邦の人類に至るまで、苟も之を組成するの人民にして其生存幸福の利害を共有するものある時は、之を社會と稱することを得べし。例へば東京の社會と云ひ、日本の社會、東洋の社會と云ひ、若くは一般に人類社會と云ふは、皆此理に據るなり。蓋し吾人は生まれながらにして人類として互に同族の間に盡すべきの義務を有す。其の所屬の國家を殊にし、所生の人種を異にするも、尙ほ相依りて一般人類社會を組織する所以なり。然れども吾人は一層完全に吾人が生存の目的に到達せんが爲めに、國土人種の親近せるもの相集まりて、社會の上に獨立の國家を建設し、其統一制裁を仰ぐ。是れ今日世界の現状なり。故に社會の物たる素其範圍に定限無しと雖も、實際に於ては

國家の事業と相聯帶するもの甚だ多し。是を以て世界を通じて人類の社會なるもの、存するを妨げずと雖も、日本には自ら日本社會の特質あり。歐米諸國には自ら歐米諸國の社會の特質あり。是れ皆其國家の特性に由來するものなるを以て、彼此相混淆すべからざるものあり。實踐道德の點より之を觀る時は、各國の社會は、當に一般人類社會の道德を通有するの外、更に其風土、人種、風俗、歴史等の殊性に本ける特別の道德を偏有すべし。是れ吾人が本書に論述せんとする所の主として日本國民の社會を目的とする所以なり。

夫れ人の社會を組織するの理は、其の家族を組織するの理に同じ。一個人の家族に於けるは、猶ほ一家族の社會に於けるが如し。人は素群居社交の動物なり、寂寞冷索の生活は其の先天的に嫌忌する所なり。是を以て、人は其配偶を求め、其子女を養ひ、一家團樂して終身愛慕の情を失はず。家族の成立は人性必至の理に基くことは素より明白なる事實なり。然れども吾人の社交的慾望は、吾人の血族間に成れる家族のみを以て満足すること能はず。吾人若し吾家の牆外に在る人と交際せず、世を舉げて人々一も利益を交換すること無く、一も感情

思想を共通すること無く、正義相守らず、仁慈相救はず、互に獨立して毫も相關與せざらんか、是れ窮山荒野の中に家すると少しも擇ぶ所無からん。是れ吾人の忍ぶ能はざる所なり。單に之を實利の上より見るも、斯の如き状態に於て、家族は永く成立し得べきものに非ず、個人も亦隨て滅亡するを免るゝ能はざるべし。是の如く、社會の成立は吾人の社交的感情に基くものなり。而して此感情の生ずる所以を尋ねれば、蓋し吾人が精神及び肉體上の能力の不完全なる、到底單獨の力によりて其生存の目的を達する能はざるが爲めならん。之を肉體上より觀れば、吾人は社會の幫助を離れて如何にして生活の資を得べき。風土の刺撃に勝へ、猛獸の禍害を免れ、安寧適宜の生活を經營し得る所以のものは、殆ど全く社會の資に非ずや。之を精神上より觀るも人の孤立を惡むの情は、殆ど死を惡むの情に異ならず。吾人の有する諸種の感情思想は、他人と與にするに非ざれば、到底満足する能はざるものあるは、明白なる事實なり。人若し一切他と交通を絶ち、此くの如き感情思想の發生を抑壓する時は、名狀すべからざる苦悶を感じ、甚だしきに至りては、其心を傷り、其情を害ひ、遂に狂疾を發するに至るべし。

吾人の社會に負ふ所是の如く其れ大なり。更に吾人の依て以て思想を交換し、發達し、且つ保存するを得る所の言語文字の如きも、亦社會の組織を待て初めて存在したるものなるを思は、吾人の享有する事物の、一として社會に負ふ所にあらざるなきは、寧ろ彰々として明白なるに過ぐ。

個人と社會との關係の親密にして須臾も隔離すべからざることは是の如し。之を要するに吾人の安寧幸福は其細大に論なく、凡て社會の直接、若くは間接に與ふる所の恩恵に非ざるは無し。果して然らば、吾人は社會に對して當に盡すべきの義務無かるべからず。一身一家の利益のみを圖らず、博く社會公衆の爲めに、其利福を増進せんことを務めざるべからず。公益を廣め、世務を開き、社會の爲めに永久なる功業を設計成就せんが爲めに、甘んじて一身の利害を顧みざるがごときは、實に社會の一員として其の本務を全うしたるものと謂ふべし。純粹なる利他の精神は、道德の尤も高尚なるものにして、社會の改善進歩は一に此精神に負ふ所なり。是を以て博愛の仁人の己を棄て、社會に盡すものある時は、後世子孫永く其餘徳を享け、其流風を慕ふ。一社會の完全に近きと否とは、

實に此種の人物の多少に由るものなり。若し國內に孤獨主義大に行はれ、人々唯自己の利益のみを求め、毫も社會公衆の上に着眼するもの無からんか、其社會は腐敗し、其衆庶は零落し、其國家も亦凋衰微弱の狀態に沈淪するに至るべし。蓋し一身を抛て社會公衆の爲めに盡瘁するを甘んずる所の博愛の精神は、人心を結合する所の鐵鎖にして、社會是によりて完美の域に進むべく、國家是によりて富強の策を講ずべし。苟も是れ無くんば、人心盡く解散崩壊するに至るべし。人心已に解散崩壊せば、社會國家獨り何に據りてか其完美と富強とを望むべけんや。

然れども、吾人は社會の上に於て、更に社會に統一を與へ制裁を加ふる所の國家を有することを忘るべからず。國家は獨立の主權を以て一定の土地人民の上に臨み、其の定むる所の憲法法律の力によりて、其人民を統制するを務む。吾人は社會の一員たるも同時に國家の一民なり。故に社會の一員として社會の道德を全うすると同時に、國家の一民として國家の法律を遵奉せんことを要す。然れども國家の本領は素社會に在らざるを以て、國家は必ずしも社會萬般の事

業に對して盡く干與するものに非ず。故に社會は國家所定の法律の範圍内に於て其道徳の自由を有するものなり。若し夫れ國家の法律を冒犯して尙ほ且つ社會の道徳を全うし得べしと謂ふが如きは、蓋し矛盾の甚だしきものなり。何んとなれば道徳は法律の力の及ばざる所を制裁すると同時に、法律も亦吾人の安寧幸福の爲めに社會道徳の至らざる所に對して其制裁を加ふるものなればなり。

社會公衆に對して盡すべき本務は一にして足らずと雖も、是を大約して公義と公徳との二者と爲すことを得べし。吾人の社會に對して第一に務むべき所は、他人の權利を侵害せざるにあり。蓋し苟も人類として一社會の中に共存すれば、其の人たるの權利に於て自他の間に徑庭あるべきの理無し。若し吾人にして、自己の生命、財産、及び名譽を享受し、且つ他の侵害に對して之を保護防衛するの權利あらば、他人も亦其生命、財産、及び名譽に關して之と同等の權利を有すべし。故に人々互に他人の權利を尊重し、敢て之を侵害せざらんことを務むるは、其の社會に對する第二の道徳なり。換言すれば、是れ即ち惡事を爲さざるの

本務にして、社會の安寧秩序を維持する所以なり。

然れども、互に他の權利を侵害せざるのみにては、未だ吾人が社會に對するの本務茲に全く盡きたりと思惟することを得ず。是の如きは、單に吾人をして道徳、若くは法律の罪人たるを免れしむる所の消極的制裁に過ぎざればなり。吾人は依て以て惡人たるを免れ得べきも、未だ依て以て善人たるを得べからず。吾人をして社會に於ける一個の善人たらしむる所以のものは、實に其博愛慈善の積極的道徳に外ならざるなり。

抑も博愛と慈善とは、吾人の道徳心の最も貴重なるものにして、人の人たる所以の價値は實は茲に存す。若し一身一家の狹隘なる幸福を目的とし、若くは自己の親愛昵近せるものの利益を主眼とし、毫も社會一般の公衆に對して博く愛憐の情を有すること無くんば、何を以てか山禽野獸に異ならんや。故に吾人は、管に他人の權利を尊重するに止まらず、更に一步を進め、他人の困厄危難に臨みては、須らく之を援助すべく、他人の貧窶窮乏に遭ひては、須らく之を救済すべし。或は身罪なくして不慮の禍を蒙り、或は生まれながらにして不具の身體を有す

るものの如き、薄命不幸の輩、世上甚だ多し。且つ夫れ文化漸く進み、社會の事情複雑となるに隨ひ、貧富の懸隔亦自ら増加するを以て、薄命者の數も亦隨て増殖するを免れず。是の如き輩は身儼寒に苦むも、道德法律の制裁によりて他人の權利を侵害すること能はず、故に富裕なる慈善者にして、愛憐の情を垂れて之に惠與するあるに非ざれば、坐して死を待つの外無かるべし。同じく生を享け、同じく社會に民たるものにして、其の眞に憐むべきの理由を知りて尙ほ且つ袖手傍觀するが如きは、蓋し高尚なる道德心を有するものの忍ぶ能はざる所なり。

吾人は他人の權利を尊重し、不幸を救恤するの外、更に進みて公益ある事業を興して其利福を増進せんことを務めざるべからず。吾人が社會に負ふ所の恩惠の深厚なることは、已に説述したるが如し。若し社會にして秩序無く、公衆にして徳義無くんば、吾人獨り何に依りてか其の幸福なる生活を經營することを得べきや。假りに蒙昧野蠻なる黒人の社會に生まれたりとせよ、吾人は決して禽獸よりも遙に優等なる生活を營み能はざるべし。而して吾人の幸福を保護し増進する所以の社會の秩序徳義なるものは、多く吾人が祖先より繼承したる

ものにして、之を成就するに於て吾人の與り知る所に非ず。是の如く、生まれながらにして先人の遺徳に沐浴せる所の吾人は、當に其の繼承したる社會を一層善良完美なるものとして之を子孫に遺傳すべきことは、蓋し至當の義務なりとす。是故に吾人は各其職能に隨ひ、其天分に應じ、盛に公益を計り、世務を開き、社會をして益々圓滿完全の域に達せしめざるべからず。其の企畫する所は單に眼前即時の結果を望むに止まらずして、社會永遠の利益の爲めにするものならざるべからず。一人を以て博く億兆の爲めに盡し、一代を以て遠く百世の後を憂るものは、古來聖賢の心事にして、須らく後人の模範とすべき所なり。是の如き人は、身死するも功滅びず、永く萬世の景仰する所となる。社會的道德は茲に至りて其理想的完全の域に達したりと謂ふべきなり。

以上述べたる如く、他人の權利を侵害せず、却て其困乏を救助し、更に進んで一般の公益を企成することは、吾人が社會に對する本務の綱領なり。而して此事は東西の二聖が訓示したる二個の格言を以て總括することを得べし。己の欲せざる所之を人に施すこと勿かれ。是れ孔子の言なり。己の欲する所之を施せ。

是れ基督の教なり。是れ二者の中前者は消極的に吾人の行爲を制限し、後者は積極的に吾人の行爲を推奨す。彼は悪事を作すことを戒め、此は善行を勤めんことを勸む。彼の教ふる所は公義にして、此の示す所は公德なり。此二者は偏廢すべからず、兩々相並行して初めて社會に對して完全なる本務を盡すことを得べし。吾人は自己の權利の毀損せらるゝことを欲せず、故に他人に對しても亦其權利を侵害すべからず。是れ前者の訓ふる所なり。吾人は自己の困乏を救濟せられんことを欲し、又他の社會の公益を企成するを喜ぶ。故に吾人は他人の困乏を救助し、又自ら進んで社會の公益を計らざるべからず。是れ後者の示す所なり。前者は道德上の本務たると同時に、多くは法律上の本務にして、後者は専ら道德上の本務なり。單に法律上の罪人たらざらんことを欲するものは、前者を以て足れりとすべきも、苟も道德上の罪人たらざらんと欲せば、進んで後者を實踐せざるべからず。

(第四卷)第四章 皇室に對する本務

熟史を案するに、天祖天照大御神、瓊々杵尊に詔して曰く。「豊葦原の瑞穗國は、是れ我子孫王たるべきの地なり、爾皇孫宜しく就て治むべし。行けや、寶祚の隆當に天壤と窮りなかるべし。」皇孫此詔を奉じて、此土に降臨し給ひてより、列聖相承け、神武天皇に至り、奸を討じ、逆を誅し、以て四海を統一し、始めて政を行ひ民を治め、以て我大日本帝國を建て給ふ。因りて我邦は神武天皇の即位を以て國の紀元と定む。

神武天皇の即位より今日に至るまで年を閲すること殆ど二千六百年。歴聖相承くること茲に一百廿餘代。皇統連綿として一絲會て紊れず。道に盛衰あり、時に汚隆なきに非ずと雖も、未だ會て臣下にして神器を覬覦したるものあらず。偶々是の如き狂暴の徒あれば、天誅立地に至りて、皇道益々蕩々たり。萬世一系の皇統と無窮不易の寶祚とは、大日本帝國の世界萬國に秀絶する所なり。之を世界の歴史に徴するに、古今を貫き東西に通じて、何處に我國の如き崇嚴

なる國體ありや。外國の中には間々廢讓常無く、革命相追ひ、君臣の情見るべきもの無く、國體の美取るに足らざるものあり。之を我帝國に比すれば、其差管に天淵のみに非ざるなり。世界各國は何れも長久の歴史によりて各々其國體風習の美を成したるを以て、漫に國の内外によりて是非の別を立つるは不可なり。但我國民たるものは、皇祖皇宗の宏遠悠大なる遺徳と、歴代聖主の宏深篤厚なるを思ひて、報效の實を擧げむことを期すべきなり。

夫れ皇恩の大なるや、殆ど物の得て比すべきなし。其の遠きを言へば、天祖此國を肇め給ひしより以て今日に至る、其の廣きを言へば、億兆を擧げ四海を包みて遠く異邦に及ぶ。其の政教を施すや、刑憲の密なる、非違を抑へて遺漏なく、聖恩の普き、普天の下率土の濱に及ぶ。世々の臣民禍害を免れ、壽康を保つを得たる者は、一に皇恩に非ざるはなし。其の廣大無邊なる實に計數測量の限に非ざるなり。

蓋し君主は國家の中心骨髓にして、億兆臣民の安寧幸福の繫かる所なり。蓋し吾人の社會を成し國家を組織するに當りては、必ず之を統治する所の主權者

無かるべからず。是に於てか、之を小にしては會長あり、之を大にしては君主あること、猶ほ一家の中に家長あるが如し。是の如く、統治の大權一身に集まるは、凡て團體結合より生ずる自然の結果にして、天地自然の大則なり。蜂の如き、蟻の如き、亦皆之れが首領なるものあり。群鶴群象の如きも皆然らざるはなし。獨り生物界のみならず。我太陽系にありても、太陽之が中心にありて諸星の運行を調攝するの地位を占む。一國の君主亦是の如く、衆庶の上にありて、統治の大權を有せり。是れ無數人民の幸福を増進するに於て必要の條件たるなり。假令ひ共和民政等の如き邦に在りても、必ず之が統領を設くるは皆此理に出づ。社會に平等の實行し難きは、即ち國家に主權の必要ある所以、亦以て君民の別は天地自然の組織に於て然らざるを得ざるものあるに出づるを見るに足るべし。殊に我國にありては、皇祖建國の當初より其國體は一種の特質を有し、君臣の關係異邦の例を以て類推すべからざるものあり。是れ我國民の須らく記憶すべき所なり。已に數々述べたるが如く、我皇祖は獨り外より來りて我國の人民を征服したるに非ずして、我國民は却て皇室の中より分岐したるものなり。我

臣民は遠く其肖を神祖に發し、億兆悉く皇室の末族たり。是を以て皇室の臣民に於けるは、猶ほ宗家の同族に於けるが如し。臣民の間多く異姓を交へず、名は即ち君臣たるも、實は則ち一族たり。大日本帝國は實に是れ一大宗族の團結して國家の形を取れるものと謂ふも、敢て不可なきなり。之を諸外國の君主が侵掠劫掠によりて異種の民族を臣屬せしめたるものに比すれば、國體の性質に於て根本的差違の存するを見る。是れ我邦にありて殊に君臣の情親密にして、忠君愛國の精神の熾盛なる所以なり。

一家と一國との比較は我邦に於て最も其適切なるを見る。我國は大なる一家なり。天皇陛下は其家長にして、億兆臣民は其子女なり。故に吾人臣民たるものは、各自の家庭に於て其父母に仕ふる所を以て、一國に於て天皇陛下に仕へざるべからず。是れ父母に對するの孝を推して、君に仕ふれば則ち忠なる所以なり。

是の如く、吾人臣民は全國一種、上下同氣の人民なるを以て、其の皇室に對する本務に至りても他邦臣民に比して遙に敦厚惻誠なるものあらざるべからず。

況や歴代の聖主悉く皇祖皇宗の宏圖を紹述し、其遺徳を顯彰し、以て皇國に君臨し給へり。吾人臣民の祖先は、皆世々君主の鴻恩に沐浴し、其餘慶を世々子孫に傳へ、以て今日に至れり。吾人の子孫も亦長へに皇子皇孫の聖恩に浴すべきこと、尤に天壤と共に窮り無かるべきなり。故に我邦君臣の情誼は決して一朝一夕に成れるものに非ずして、遠く建國の昔時に由來し、尙ほ之を萬世の下に傳ふべきものなり。

君主は天下の心を以て心とし、萬民の休戚を以て一身の利害となし給ふ。是を以て歴代の聖主或は高臺に登りて炊烟を望み、或は寒夜下民の窮苦を憐みて御衣を脱がせ給ふ。宵衣旰食、偏に國民一般の利益の爲めに、徹慮を惱むるの深厚なるは國民の能く思ひ至る所に非ざるなり。國に禍災あれば、内帑を割きて窮民を賑はし、國防軍備其急を告げて、而も國庫歳入未だ遽に其鉅費を辨じ易からざるに當りては、宮禁の儲餘を擧げ、内庭の歳費を省きて、其資に充て給ふ。山高く海深きも未だ以て國家臣民を軫念し給へる聖慮の優渥なるに比するに足らず。吾人臣民たるもの、思ひ一たび茲に至れば、感涙袂を濕さずんばあらざる

なり。

且つ夫れ吾人臣民の生命財産より名譽信教に至るまで、安全なることを得るは、主として君主の統治其の宜しきを得るに因る。之を人體に譬ふれば、君主は心意の如く、臣民は四肢百體の如し。四肢百體の安全健康なるを得る所以のものは、専ら心意の指導調攝、其の宜しきを得たるが爲めならずんばならず。而して四肢百體の中、若し心意の命する所に随ひて動かざるものある時は、心意は其目的を遂ぐるに能はず、全體亦之が爲めに活用を爲さざるに至るべし。是れ臣民の君主に對して従順ならざるべからざる所以なり。従順は實に臣民たるものの第一の本務にして、又最大の美德なり。是れ君臣自然の情誼にして、又社會の秩序を維持し、國家の福祉を増進する所以なり。

臣民は常に従順なるのみに止まらず、苟も事皇室に關するものある時は、國法の容す限り、躬を挺でて忠良の誠を致さざるべからず。若し夫れ一朝緩急ある時は、粉骨碎身、以て義勇奉公の精神を鼓舞し、各、皇室の干城たらざるべからず。男子生まれて、皇室の爲めに一命を犠牲に供するは、實に千歳一遇の名譽と謂ふべきなり。

べきなり。

我邦にありては、皇室は國權の存する所にして統治の本源なり。一切の法律命令は天皇の制定する所なり。歐洲諸國の中、或は統治權の本體を國家に存し、君主は唯行用の權を有するを以て國法となすものあり、是れ我國體に反す。我邦にありては、國家は皇位と須臾も離るべからず。皇位は國家の生命骨髓にして、皇室の隆替は即ち國家の盛衰なり。皇室亡ぶれば帝國滅す。故に忠君と愛國と、其名は則ち異なれども、其實は則ち同じ。蓋し強大なる愛國心と雖も、之を集中する所の點なくんば、散漫に失して或は效果少からん。是れ尙ほ一物を動かすもの、其重力の中心に對して其力を加ふるに非ずんば、十分の效果を表はす能はざるが如きなり。皇室は國家の機軸なり、燒點なり、一國活動の中心なり。故に眞に國家を愛するものは必ず皇室に忠ならざるべからざるなり。

皇室を扶翼するの道、他無し、能く國法に遵ひ公益を務め、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるにあり。我帝國今日の盛運は歴聖の偉業に成るが故に、之を天壤無窮に奉戴守衛するは吾人臣民の務なり。而して之を爲すの道、只一身を脩め、一

家を齊へ、其軀を健にし、其産を治め、平素忠勇無雙の精神を涵養するにあり。臣民にして文弱に流れて尙武の氣象に乏しく、忠憤死を辭せざるの精神なからしめば、遂に國家の萎靡を來し、皇室の衰替を速かん。是の如きは君國に對して不忠不義の甚しきものと謂はざるべからざるなり。

外篇第二

世界文明史

提要世界文明史自序

從來我邦に於て歴史に關する著譯甚だ多しと雖も文明史に到りては殆ど稀なり。是れ斯學の爲に大に恨みとすべき也。

文明史は人類社會の統一的歴史なり。故に個々事實の研究に憑依すべきは素より論を待たず。然れども個々の事實が一般人文の間にありて如何の關係位置を占得すべきかを説明するものは、翻て是を文明史に待たざるべからず。文明史の意義價值是に存す。

文明史の可能に對する二個の批難は是を序論の中に辯解せり。然るに世には其可能を疑はざるも尙ほ其尙早を説くものあり。曰く、今や資料拾收の時代なり、未だ其統一的説明の期に到達せずと。資料の拾收と研究とは將來歴史學者の益々盡瘁すべき所なり。然れども一切資料の拾收を待て初めて文明史成り得べしとせば、吾人は何れの時にか是統一的歴史の知識に到達し得べき。史的發展の主腦は大體の觀察に依傍するを以て足れりとすべし。無限の資文は

却て是に依りて初めて其繁縟と散漫とを免れ、歴史の明晰なる觀念はた是に於て初めて成立し得べし。

予が是小著必ずしも是目的を充實せりと謂はず、予自らも其不完全なるを熱知せり。良し事志に伴はずと雖も、本書著述の精神は實に是目的を充實し、以て本邦史學の建築に一片の瓦石を寄與せむとするにありし也。眇たる一小冊子、名實恐らくは相稱はざらむ。而かも馬骨も時に千金の價あり。尙ほ以て將來學者の完全なる文明史を喚起するを得ば、著者の事業亦必ずしも徒勞に非ざるなり。

是書筆を佛蘭西革命の前に擱けり。蓋し最近世に於ける文明の進歩は、更に細心精緻の研究を必とす。乃ち更に稿を起し、『十九世紀文明史』と題し、別に一卷となせり。其の出づる數月を出でざるべし。是書殊に眼を世界現今の大勢に着け、東西人文の交渉、西力東漸の趨向を明にし、以て史學研究者の外、經世事務を知るもの、爲に將來の畫策に資せむことを期せり。庶幾くば本書と踵跡相接して一部世界文明史の大觀たらむか。

紙數に限りあることは、著者をして一々事實の説明に逸なからしめたり。是れ著者の大に遺憾とする所なり。讀者或は其談理に精にして記實に粗なるを咎めむ、然れども文明史の體裁として亦已むを得ざるなり。想ふに固有名詞の送迎に忙殺せられて史的發展の大主腦を捉ふるに由無きは、一般政治史の通弊なり。故に本書は故らに事實の豊富を貪らず、専ら讀者をして是大主腦の那邊に存するかを知らしめむと欲す。是を以て著者は本書の讀者に向て一般政治史の知識を預想せり。

本書は其大きに於ては敢て誇るに足らず、然れども著者が研究の勞は甚だ少からざるなり。但著者、學尙は淺く、識尙は博からず、素より所期の十一だも達する能はざりしと雖も、目下の事情に於て爲し得べき十分の力を效したりと信ず。幸に先輩諸氏の批評を得て完成を他日に期せむ。

明治三十一年一月 東京 高山林次郎識

目 次

序 論 文明史とは何ぞや。

第一編 非文明的人類

第一章 原始人

第二章 自然民族

第二編 東洋の文明

第一章 總 說

第二章 ツラン人種

第三章 アールヤ人種

(上) 印 度

(下) イラン民族

第四章 ハム人種 (埃及)

第五章 セム人種

(一) 總 說

(二) アッスリア及びバビロニア

(三) フォイニケイ

(四) パレスチナ

第六章 古代西洋人文に及ぼせる東洋人文の勢力。

第三編 歐羅巴

第一章 希 臘

第二章 古代羅馬

第三章 羅馬帝國と基督敎

第四章 民族大移動と歐羅巴の人種

(一) 總 說

(二) 歐羅巴に於けるアールヤ人種

(三) 歐羅巴に於けるツラン人種

第五章 ビザンツ帝國

第六章 中 世

第七章 亞刺比亞と十字軍

第八章 文藝復興と宗教革命

第九章 近 世

序論 文明史とは何ぞや

エドワード・ギボン氏は英國の大史家、其椽大の史筆もて述作せし羅馬衰亡史は、洵に歴史文學の一大偉觀なり。然るにヤコブ・ブルクハルト氏は是書を貶して大體に通せずとなし、以爲らく羅馬帝國の没落が歴史上の眞意義は異教者の基督教化したる一事實に歸すべしと。其説の當否は暫く論せず、是二者の反對は、やがて文明史と政治史との差別を表はす。即ちギボン氏の歴史眼は政治史的にして、ブルクハルト氏のは文明史的なり。

政治史とは何ぞや。一言すれば、國家生活の過程の中に起りたる事件の順序及び關係を誌せる歴史なり。而して其關係は主として外面上の現象に終始せるものにして、是の如き事件の由て生起し來りたる時代及び個人の内面的の探索を旨とするものに非ず。人文史は則ち然らず。其の目的とする所は、人類社會一般の發達を其精神的方面より觀察し、其外部に表はれたる政治、經濟、宗教、文藝、其他もろくの文物に對して、其成立變遷の説明を與ふるにあり。政治史は

即ち國家を中心とし、其盛衰興亡に關して一切の文物を照査す。人文史は則ち人類社會を對象とす。苟も人類社會の進化に與かるものは、凡て人文進歩の過程を成すに於て、缺如すべからざるの要素となす、已に缺如すべからざるの要素と爲すを以て、彼此の間に輕重の別を立てず。宗教も、文學も、哲學、美術も、政治、經濟も、觀するに人文を經緯するに、須要の線條を以てす。何れを先とし、何れを後とすべき謂はれ無きなり。政治其物も亦是の如き人文發達の根本的説明に依傍することによりて、初めて其の精透なる叙述を遂げ得べきを以て、是點より見る時は、人文史は政治史の所^{コンディシヨ}依なりと謂ふべきか。

然れども是二者は必ずしも全體と部分との關係に於て成立するものに非ず。政治史は國家生活に起りたる過去の出來事をありのまゝに描寫し、讀者をして當時の社會を回想せしむるに足るべき寫實的分子を要す。所謂「現在の生命を以て過去の時代に魂する」は政治史に缺くべからざるの要素なり。故に政治史家は灰冷枯淡の文字を列ねて抽象的叙述を以て能事とすべきに非ず、其摹寫點染に於て一段文人的の伎倆を要す。之れレオポルド・ランケ氏が政治史家とし

て尤も優秀なる位地を占むる所以の一なり。人文史とは自ら其のゆきかたを殊にせる所あれども、政治史として單に事實の記録を以て満足すべきに非ず。究りなき局面の變化を通じて動かざる發達の原理を認識するに非ざれば、國家生活の説明は遂に統一を期し難からむ。是點に於ては兩者ほゞ其軌を同くす。

又研究の方法に關して、政治史と文明史とは、劃然たる區別あり。即ち政治史は主として既に起りたる事件を以て發足點とし、吾人に告ぐるに是事件の進行發展する過程を以てす。而かも是の如き事件の由來する所の幾多の勢力に就ては多く語る所あらず、故に其の方法は概ね綜合的なり。人文史は則ち然らず。先づ人類社會に活動せる勢力そのものを捉へて其性質を研究し、そが中に常住なるものと流轉するものとを甄別し、其情性及動力より來るべき自然の結果としてこゝに外部の事件を解釋す。もとより時に叙述を事とする場合なきに非ざれども、大體に於て其方法は解析的なり。

兩者の間已に是方法の差別あり、材料の取捨に就て亦自ら徑庭無き能はず。

政治史は國家の生活に與れる事件の綜合的叙述なり。故に事苟も國家と重大

の利害を有するものは、其由來の必須と希俸とを問はず、其性質の常住なると一時なるに論なく、すべて網羅把住せざるべからず。然れども文明史にありては、事件そのものは何等の價值を有せず、只是の如き事件によりて、發現せられたる勢力思想に價值あるのみ。

政治史と文明史との差別是の如し。されば政治史家が人文史を以て空理となすことの過れるは、猶人文史家が政治史を以つて迂濶なりとするの正しからざるが如し。要するに二者其目的を異にするを解せざるの罪のみ。然れども政治史は獨り以て歴史的職能を完全に盡し得べきものに非ず。一般人文の一現象たる國家生活は、一般人文其物の究明に待つに非ずむば、其内面的因果の連鎖を解釋すること能はざるや素より論無し。之れ夙に近時政治史家の着眼したる所なり。試みに世界歴史若くは各國歴史と稱するものを意に任せて緝き見よ。是等は其根本の面目に於て全く政治史たるにも係らず、其中には人種の特質、文藝の進歩、若くは時代の精神に關して條章を設けざるもの無し。然れども編述の體制に伴ふて自ら主客幹枝の別あり、是種の書に於て人文發達の理

路を尋ねむこと甚だ難しとす。

蓋し政治史、若くは人類社會の一面の活動を對象とする特殊の歴史の一般文明史に於けるは、猶ほ自然科学の純理哲學に於けるが如し。例せば物理學は物質運動の法則を、植物學は植物の分類生理を、天文學は天體運行の系統を研究す。然れども是等の法則若くは系統が、主觀的には吾人の認識と如何の關係を有し、客觀的には宇宙の全體に對して如何の地位を占得せるものなりやに就いては、是等の自然科学は何等の解釋をなし得ざるなり。是の如き根本的原理の説明は、一切科學の総合的知識に本ける純理哲學の組織を待て、始めて爲され得べきものなりとす。幾多特殊歴史は、各自の範圍の於て興亡盛衰の聯絡を説き得べきも人類の全活動に關しては、遂に人文史の説明に依らざるを得ず。

或一派の史家は今日尙ほ文明史の可能的なることを否定するものあり。其の理由とする所は自ら二種あるが如し。一は個々の特殊なる歴史を離れて別に人文史なるもの有るべき理無し、所謂文明史は特殊の歴史に根本的説明を與ふと揚言するも、是れ哲學者の理想より打算し來りたる空理に過ぎずと。是

れ哲學界に於て純理哲學の存在を疑ふものと一般其説の淺薄誤謬素より取るに足らざるなり。古代若くは中世の形而上學に見たる所のものを以て、直に自然科學の結果に對する歸納的方法によりて成立せる現今の純理哲學に擬し、荒唐不稽を以て之を難するものは、全く哲學の歴史的發達に旨なるものなり。之と同じくヘーゲル氏、ヘルデル氏一輩の歴史哲學と、最近人文史家の攻究とを同一視するものは、菽麥河嶽を辨せざるものと謂はざるべからず。文明史の由來を尋ぬるに、素と純理哲學と均しく人智の統一的傾向に本けるものにして、中世紀の世界觀に於て夙に其萌芽を發せり。中世紀は何人も知る如く、基督教のドグマの維持を以て哲學の職能となし、一切自由の討究を容認せざりし時代なり。アリストテレス氏の形式論理が、所謂スコラの學者の唯一の武器となり。聖典の教義は其三段論法によりて凡ての方面の極端に至るまで推渡發展せられたるの時代なり。是の如き時代にありては、歴史は其の形而上的、はた宗教的系統に隨て思索せられ、社會の發達人類の運命は全く信條として制定せられたり。是故に當時人文史の原則として見るべきアウグスチヌス氏の宿罪説を超越す

ることは、中世學者の敢てし得ざりし所なり。文藝復興期に至りて歴史的人生觀は漸く其面目を革め來りしが、純正人文史はヘルデル、シレーゲル諸氏に至るまでは其の完全なる體制を成す能はざりき。然れども是等も亦當時の純理哲學の思想につれて演繹的説明を旨とせるものなるを以て、むしろ彼等の哲學主義の叙述として見るべきもの、人文其物につきて忠實なる客觀的考索を遂げたるものに非ず。ヘーゲル氏以下の所謂理想派に屬する獨逸史家にありては、是弊殊に甚し。是等は何れも中世及び近世獨逸の純理哲學と一般の攻撃を辭する能はざるものなり。

然れども今日の文明史は又昔日の文明史に非ざるなり。地質學、比較言語學、及人種學、比較神話學、人類學等の最近の研究の上に確乎たる科學的基礎を有するに至れり。クレム、ベシユル、ペール、ヘルワルド、リッペルト諸氏の著述はたしかに此傾向を代表す。人文史を斥けて空理なりとするものは、現今學界の實勢に通せざるものなり。

文明史に對する第二の批難は、人文の概念の廣大に失し、隨て其發達に關して

統一的原理を發見し得べからずと謂ふにあり是れ尤も有力なる批難なり。抑も人文史とは何ぞや。想ふに何人もこの疑問に答ふるに、數學的精密と、論理的確實とを以てする能はざるべし。そは難者の言の如く、人文の範圍及び種類は無限の廣袤を有すればなり。然れども明白なる觀念を寫象し得ざるの事物は、必ずしも吾人が研究の對象となり得ざるにあらず。誰か預想無くして一の觀念を作り得べきか。物理學とは何ぞやと問はば、物理學者は物質運動の法則を研究する學なりと答へむ。物質とは何ぞと問はば、エチルギーの所住なりと答へむ。然れども更にエチルギー其物の何たるを問ひ、又更に其何たるの何たるを問はば、茫茫として究まる所を知らじ。物理學の概念と雖も極めて不明瞭なるものなるを發見すべし。吾人今人文史を定義して、時間に於て繼續せる人類活動の原理を攻究する學なりと云はば、難者は其の漠然なるを答めむ。然れども吾人は凡べて彼れに向て世間何の科學が漠然たらざる概念を有するかを問はむ。

蓋し概念にして明瞭ならば、吾人豈是の如き概念を説明する尨然たる書冊を

要せむや。一個の科學の概念は數行の文字を以て悉くす能はざるを以て、茲に時として之を解釋するに等身の書をも要するのみ。もし強て吾人に向て文明史の定義を求むるものあらば吾人即ち是一卷を以て之に答ふべきのみ。

文明史の性質は以上論じたる所によりて略々明瞭ならむと信ず。之を要するに、文明史は人類活動の主腦を把へて、縦に之れを、歳時に繋け、横に之を、方處に照し、精神的及び物質的の全範圍に亘りて、社會發達の真相を究明せむことを企つる統一的歴史なり。世人動もすれば政治史を以て歴史の本領となす。之れ外觀の壯大に眩惑して内部の發動を顧みざるものゝみ。吾人は現時の我邦に於て殊に是弊を見る。中學以上の教程にも政治史ありて人文史なし。時は限り無く進み、史料は限りなく増殖し、今より數世紀の後に至らば、政治歴史の攻究は實に非常の時間を費すに非ざれば研究し得べからざるに到らむ。人文史は是繁縟を貫くに統一を以てし、是冗漫を律するに原理を以てす。庶幾くは政治史と相並びて其缺陷を匡救するに足らむか。

第三章 羅馬帝國と基督教

基督教は西洋歴史の一大事實、近世人文史の中心核子なり。其勃興及び傳播は古代と近世とを分つ所の一大鴻溝なり。吾人今是を叙述するに當り、先づ當時社會の情勢を一瞥せむことを要す。

抑も希臘は文藝の邦にして、羅馬は戰勝の邦なり。羅馬は希臘人文を繼紹し、戰勝の威を藉りて之を世界に弘布し、茲に歐羅巴人文の根據を造り、基督教傳播の素地を設けたり。今日歐羅巴の諸邦國は是大帝國の遺材によりて建設せられたるものにして、其人文精神の一致は羅馬統一の餘澤と共に基督教の勢力其の多きに居る。

羅馬が地中海四岸の地を統一して之を唯一主權の下に隸屬せしめしや、各國の間に交通漸く開け、其知識貨物の交換頻繁となるに隨ひ、異邦の民族間に一様平等の思想を養成するに至りき。是事實によりて最大の影響を受けたるものは各國民族の宗教なり。國民各々自家特有の神を樹て、無上絶對の威靈として

之を崇拜するの無意義なることが漸く各國民の間に認識せらるゝや、彼等は茲に冥々の中に一大統一的宗教の出現を憧憬せり。國家の上より見るも、帝國の統一は即ち宗教の統一を預想す。多神教は實際上羅馬の主權と兩立せざるなり。殊に從來僧侶の間に於ける紛争の多神教を根柢より搖撼するあり。是に於てか愚者は之を疑ひ、智者は之を信せず、國國の民は殆ど無宗教の状態に陥れり。『一切の事物は腐敗と罪惡とに充つ』。之れ哲人セネカ氏が當時の時勢を喝破したるの言なりき。信仰は死し、道義は滅し、地中海岸の國民は互に相視て其一様の悲運を嗟嘆せり。彼は缺焉として救濟の光を憧憬せり、然れども帝國は此等を救ふべき神を與へざりき。歐羅巴、亞細亞、亞非利加は失望の中に寂然たりき。羅馬は峻嚴なる國家至上主義を以て其國是となせり。個人人格の獨立自由を認めず、人よりは寧ろ物として之を扱へり。其國勢を振張せむが爲めには民人の塗炭に苦むを顧みず、人權の平等は夢にだも羅馬政治家の思想に入らず、慈悲博愛の感情は殆ど發揮せられざりしに似たり。殊に被征服者の如きは如何の輕侮壓制を以て統御せられたるかを想ひ見るべきなり。

基督教は是の如き時世に興りぬ。

スリアが羅馬に奉るべき租税として其收穫の三分の一を貢進する時、猶太の農夫は猶太の王なる、救世主の速に来るべしとの自國の傳説に傾聴し、咨嗟長息して其出現を翹望せるは極めて自然の事ならずや。是時に當りて獨一眞神の前に一切人類の無差別を説き、博大無際の慈悲を傾けて罪惡の救済を説けるものあらば、天下豈靡然として之に赴かざらむや。耶蘇基督は實に是の如き教義を唱へたる者なりき。

凡て新しき教義の傳播に二個の制約あり。教義其物の性質及び傳播せられむとする社會の狀態之なり。是二點の何れより觀るも、基督教は其傳播の過程に何等較著の障害を有せざりき。其反對者たる從來の多神教、基督教徒の所謂パガニスムは前にも述べたる如く、已に内部の弱點を暴露し、毫も人心を結合し指導するの勢力を有せず。僧侶は自己の信神を偏執して互に權勢を争ひ、有識者の指彈を顧みず、徒に虛榮を衒ひて眞に貧苦罪惡の救済を思はず、専ら現世を説て未來を説かず、一時の名利を推獎して永遠の利福を言はず、隨て其道義の

觀念の如きは極めて陋劣なるを免れざりき。基督教は即ち然らざるなり。其熱誠と燃ゆるが如き信念とを以て、永遠の攝理を説き、未來世に於ける無究の幸福を説き、懺悔によりてなさるべき罪惡の救済と天國の恢復とを説き、神の子なる耶蘇基督の十字架に流せる血の衆生濟度の爲なるを説き、更に其復活の奇蹟と、世界の末路と、天國と、裁判の日の近けることとを説くや、基督教は實に一道希望の光明を當代の闇黒なる精神界に投射したりしなり。殊に眼を家庭及び下層の人民に注ぎ、貧き者に施し、悲める者を慰め、其教會にありては囚虜の嗟嘆に聴き、垂死の精靈を救はむことを神に禱れり。主人にも奴隸にも同一の法律、同一の希望、同一の洗禮、同一の救主、同一の判斷あるのみ。正義に苦めるものには來世の淨樂を約し、如何なる罪業も悔悛の期を失せざるを訓ふ。基督教は外面の形式禮文を打破し、直に人の肺腑に向て精靈の呼吸を通じたるもの。天下の人心翕然として之に謳歌したる、素より自然の勢ならずや。

そも、猶太人は古より外邦の羈絆を脱する能はず、窮厄困苦の間に在りて尙其セム民族に固有なる一神教を固執し、曾て其豫言者の唱道せし如く、何時か

は猶太の王なる救世主の出現して其國運を一轉するの期あらむことを信じた
りき。茲に紀元前四年の頃ベツレヘムの地に耶蘇なるもの生まれ、豫言者約翰
の教を受けて一新宗教を唱道せり。基督教即ち是れなり。耶蘇は猶太人の勝
利は政治上に在らずして精神上に在ることを説き、『其日を善き者にも悪き者にも
も照らし、其雨を正しき者にも正しからざる者にも降らせ給』へる天父の前には
一切の衆生盡く平等無差別なるを説き、自ら神の子救世主基督なりと稱し、『天國
は近けり、悔ひ改めよ』と宣傳せり。羅馬の代官は其説を以て叛逆となし、彼を磔
殺せり。然れども耶蘇の高足、即ち所謂十二使徒等は、尙ほ其遺志を紹ぎて其教
を傳へたり。

基督教は斯くて其生地なる猶太より漸く進み、羅馬の世界に向て其『精神的勝
利』を繼續せり。世界は末路に迫りたり、悔ひ改めよ、天國は近けり。是の『野』に呼
べる人の聲』は一世の人情を動かしたりき。キヤルス、フリギア、ガラチア、小亞細
亞の全部、希臘、以太利は暫時にして之に風靡せり。暴帝ネロの迫害は徒に同教
徒の熱火に薪せしのみ。教會は到る處に建設せられたり。

斯くて一世紀の終に到りては、教會組織の勢益々其旺盛を極め、羅馬の帝國も
是新宗教を從來の猶太教と同一視するの迷妄を覺り、之に對する態度を變更す
るの必要を認めたり。然れども基督教の精神は遂に帝國の國是と同じからず。
彼等は常に一切現世の快樂遊戲に關與せず、冷然として帝政の榮華を看他した
るのみならず、自ら精神的團結によりて一種特殊の帝國を自教内に建設せるの
狀あり。是れ羅馬の國家主義に不利なる事情なり。ドミチアン、トラヤヌス、ハ
ドリアヌス等の明君も亦之を迫害するの已むを得ざりし所以實に是に存す。
然れども種々の殘酷なる迫害は徒に基督教の決心を堅うし、其内部の團結を
鞏固にしたるのみなりき。デオクレチアヌス帝の世に至りては、教會と帝國と
の間に彌縫すべからざる大破綻を見るに至りぬ。當時全帝國に基督教會の設
立を見ざる一市一村だに無かりき。其勢力は延て政治上に及ぼし、帝國の主權
を危殆にするの恐ありき。是に於てか一方に迫害に加ふるの傍ら、他方に於て
は政治家、哲學者及び多神教徒の三角同盟を結成し、以て共同の敵者に當りたり。
基督教徒亦一步を譲らず、破裂は先づ軍隊の上起れり、即ち或儀式に際し、基督

教徒たる兵士は擧て國神を崇拜することを拒絶したり。デオクレチアヌスは事甚だ急なるを見、茲に従來未だ曾て見ざる所の大迫害を決行し、教會を毀ち、信徒を害し、慘酷到らざる所なし。然れども毫も信徒の意氣を沮喪せしむるに足らざりき。彼等は詔勅を破毀し、宮殿に火し、死に臨みて聖教の爲に命を抛つる譽れを神に感謝したり。全帝國の士民は等しく嘆美の聲を放てり。之れ人をして苦を喜び、死を樂ましむる基督教の感化の如何に靈妙偉大なるかを示すことに依りて、益々同教の勢力を増殖するのみなりき。死を怖れざる民に向ては國家の威烈はた何爲るものぞ。政治的羅馬は其劔を以て遂に基督教徒が組織せる精神的王國を征服すること能はざりしなり。

是時勢に鑑みて同教徒に對する政策を一變したる者をコンスタンチヌス帝となす。帝が國教として、基督教を公認したる必要の結果として茲に國家と教會の結合を見るに到れり。之れ歐羅巴の人文史上の一大事實なり。而して是事實の意義をして一層重大ならしめたるものは、實に帝の遷都なり。

吾人は茲に暫く筆を枉げてコンスタンチヌス帝が何故に羅馬の古城を捨て

て新に都を遙遠なるボスフォラスの海角に移せしかの事情を述べむ。

一個の國民としての羅馬は世界統一の日に於て消滅せり。人種上よりも、國性上よりも古羅馬は已に見るべからざりき。今や權力の中心は軍隊の中にあリ。幾代の帝王は軍隊の競争によりて擁立せられたり。是等の軍人王は其族籍概ね卑賤にして羅馬古來の歴史と何等親密の關係あるに非ず、陳營の中に人となりて禮文に爛はず、古代文化の遺物に對して何等の興趣を覺へず。是の如き帝王が首府の移轉、若くは新首府創立の念慮を起すは、極めて自然の勢なりとす。殊にコンスタンチヌス帝は自己の惡徳の爲に羅馬市民の怨府となれるを覺り、一時は全府民の屠殺を計畫したる精神を翻し、遷都の平和手段によりて却て其永遠の零落を企圖したり。帝が基督教を容認し、進で其保護者を以て自ら任じたるは、素より國家統一の政治的方便に出でたるなるべしと雖も、其の極惡なる私行に對して良心の慰藉を求めたるに外ならず。實に帝や名は基督教の保護者なりと雖も、晩年に至るまで其行動は一として基督教の精神に率由せるものに非ず。其惡逆非道は暴帝チロと伯仲の間にあリしが如し。

遮莫是遷都の事實は二個の點に於て基督教と重要なる關係を有せり。即ち羅馬は今や中央政府の直接の監視の下に在らざるを以て、羅馬教會の勢力は大なる障害に遇はずして驕々乎として増進し、遂に後年法王權の根據を爲せり。又新首府コンスタンチノポリスに於ては羅馬に於けると異なり、舊來多神教の迷信少なきを以て、茲に基督教は何等激烈の抵抗を見ずして發達するを得き。是の如く、遷都は同教の傳播に少からざる便利を與へ、羅馬、希臘、兩教會の根柢は漸く其確立を見るに至れり。

然れども顧みて基督教の内部を見れば、其間に神學上の爭論ありて、屢、其一致を殆うせり。尤も激烈なりしは三位一體に關する爭論なり。今其徑行を略說せむに、當時コンスタンチヌス帝の政略は、官職を餌にして基督教徒を懷柔し、以て其國家に對するの野心無からしめむとするにあり。其結果として基督教徒が現世の名利に眩惑し、俗了したるは著しき事實なり。所謂神學上の爭論も其の原因を尋ねれば、教義の眞摯なる研究に本けるもの少く、多くは是權勢の爭奪に起源す。三位一體の爭論も亦是一例なり。其顛末は略、左の如し。

アレキサンドリヤにアリウス氏なる僧侶あり。夙に僧正の位を望みしが、遂に志を得ず、失望の餘憤に乗じて反對黨を彈劾し、是罪によりて、教會を破門せられき。アリウス氏即ち其論據を哲學上に求め、三位一體に於ける神子の位置に就きて異説を立て、曰く、子は其子たるの性質上必ず父より生まれたるものならざるべからず。即ち子の未だ在らざりし時あり、而して初めて在りし時あらざるを得ず、父は子に先ちて已にありし者なりと。是説は明に三位の間に階級を立つるものにして、一體の説と兩立せず。反對派は痛く之を攻撃し、アリウス氏を以て神の唯一獨尊を潰す者となせり。是兩派の争は漸く昂まりて遂に政治上の争となり、一時は全埃及の男女は一人として是争論に關與せざる者なきに到りき。是に於てコンスタンチヌス帝自ら是争に干涉し、紀元三百二十五年、有名なるニカイアの公會を招集して之を決定せしめたりき。同會議はアリウス氏の説を以て異端と爲し、破門を宣告せり。

ニカイア公會以後、宗門教義の争は踵を接して起り、基督教徒は權勢爭奪の渦中に沈溺し、又救濟博愛の眞面目を遺却せり。コンスタンチヌス帝の後を繼ぎ

て帝位に上れる者、ニカイアの決議に反してアリウス氏の説を容認しければ、正教派は公然是帝を非基督教徒となし、其精神上の主権を否定せり。是に於てか暫く其跡を止めたりし迫害又大に行はれ、基督教の内部は再び慘澹たる光景を現出せり。是に於てか宗教は滅び神學は亡はれ、存する所ものは只權力の爭奪あるのみ。教會は自己の天分を忘れて現世的實力の收攬の外其他を知らず。是紛擾の中より二個の事實現はれたり。即ち(一)吾人の精神を支配するものは神の法律なり、靈魂に永遠の責罰を與へ得る所の神の意志なり。之を代表するものは即ち僧正なり。是法律は帝王の法律以上の制裁を有す。帝王は唯身體財産を左右し得べきのみ。(二)羅馬の僧正は基督教の主権を掌握す。

是二個の事實は是より永く政教二者の争源となり、中世以後宗教革命時代に至るまで、歐羅巴の歴史上最も重要な意義を有せり。

羅馬教會は如何にして基督教の主権を掌握するを得たりや。左に其徑行の大體を述べむ。

初め基督教の西方歐羅巴に傳播せるや、其東洋的風度は漸く希臘的となれり。

然れども帝座東に遷り、羅馬は帝國の一舊市に過ぎざるに及び、政治上の壓力の輕減すると共に、羅馬的精神は漸く希臘的基督教を羅馬化せり。是に於て羅馬教會は東方の諸教會と其性質を殊にし、アレキサンドリアに於ける三位一體の争議の如きも羅馬は毫も之に關らず、希臘教會とは全く別途の進路を執れり。其當初にありては其勢力微弱にして殊に言ふに足らざりしが、ニカイア公會以後の宗教會議が代議制度を採用するに及び、羅馬教會の中立的位置は幸にも其間に介立して權力平均の衡樞を握りしを以て、其舉働は争議を決斷するの勢力を有せり。是の如くにして判定者の實権おのづから其掌中に落ち、漸く凜然として犯すべからざるの威重を占有するに到れり。其間羅馬、コンスタンチノポリス及びアレキサンドリアの三教會は、數々其主権を争ひしが、羅馬の僧正は常に勝利を得き。且其の公明正大なる云爲は、他の陰險卑劣なる手段に對して自ら一世の望を得たりし者の如し。

基督教會中に於ける權力消長の争の間に、歐洲政治歴史の局面一轉を警告したる一大事實は起りぬ。何ぞや羅馬の没落即ち是れ。時に紀元四百十年なり。

初めコンスタンチヌス帝の歿後、幾ならずして歐羅巴は一の東方人種の侵入に遭遇せり。之れ即ち匈奴なり。匈奴は人種上ウラルアルタイ派に屬し、秦漢の際支那を苦めたる蠻族なり。後漢の時逐はれて西方に移り、イステル河畔のゴート人と戦へり。ゴート人は走りて羅馬の内地に住し、傭兵を貢して之に隷屬せり。テオドシウス帝歿して羅馬東西に分るゝや、西ゴート族の王アラリックは遂に羅馬を陥れ、其後嗣ガリアよりイスパニアに移り、其處に住せるフンダル人を逐てゴート王國を建設せり。當時西羅馬の主權は已に空名にして、實力無く、其領地は夙にチュートン諸民族の侵略する所となり、國家の事皆其傭兵なるチュートン民族の左右する所となれり。羅馬府の没落後六十六年にして、東帝は傭兵の首領オドアカル(Othakar)に以太利の統治を托せり。事是に及びて西羅馬帝國は名實共に歴史の中に埋られりたり。

古より無窮不易と唱はれし羅馬府のアラリックの爲に陥らるゝや、全帝國の人民は等しく眼を張りて事の意外に驚嘆せり。是に於てか平生基督教に反抗せる貴族哲學者、多神教徒は揚言して曰く、神聖なる羅馬府の没落は、羅馬に勝利と

光榮とを與へたる國民的神祇の所罰なり。國民が其祖先累代の國神を捨て、基督教の如き異端左道を信じたる應報なり。羅馬を滅ぼしたる者は即ち基督教なりと。一般國民は愛懼の中には批難を默認し、基督教の信仰は將に其根柢に於て搖撼せられむとせり。教會は勢ひ辯護の衝に當らざるを得ず。有名な神學者アウグスチヌス氏は是目的の爲に十三年の日月を費して『神の都府』なる大著述を成せり。其反對者に對する辯解は、嘗に當時基督教徒の精神及態度を察すべきのみならず、羅馬没落の小歴史として見ることを得べきを以て、吾人今是章を終るに臨み、左に其一節を譯載せむ。

羅馬の風教の頹廢、國家の崩解に對じて、當に其責を負ふべき者は即ち多神教のみ。吾人基督教徒が有せる政治上の權力は、厘に昨日の事のみ。是の一千年間に増長し來れる華奢浮麗に就て、與り知る所あらざるなり。異教者よ、爾等の祖先は戦争を職業となせり、彼等は實に隣國を征服して己に隷屬せしめたり。然れども驕奢慢心は、戦勝の必然なる結果には非ざりしか。以太利は奴隸を以て充されたり。羅馬人の懶惰は、其の避くべからざる結果には非

ざりしか。豪富と赤貧との鴻溝は時と共に擴大せり。中等社會は漸く消滅し、スリア、イスパニア、ガリア若くは亞非利加に有する領土の優に王侯と比肩すべき貴族のみ、獨り羅馬には殘らざりしか。國帑に養はるゝ放逸無頼の徒は到る處の街上に浪遊せざりしか。地方の小民は收斂の重きに勝えずして漸く凋落し去れり。吾人は彼等の爲に責を負はむや。吾人はダキアを捨て、國境の防備を怠慢に附せむことをトラヤヌス帝に懲慙せしことあらざりき。將又カラカラ帝に勸むるに萬邦の民をして羅馬の市民權を得せしめ、以て國家の團結を弱むべきことを以てせしことあらざりき。奴隸を以て以太利の野を掩ひ、是の憫むべき同胞をして牛馬の役に服せしめたるものは、吾人に非ず。吾人基督教徒の唱道し、實行したる教義は大に趣を異す。夜毎に州郡の臣民を鐵鎖に繋ぎて之を奴隸となしたるものは、吾人に非ざるなり。誰か是の如き暴政より當に來るべき叛逆、毒害、暗殺、復讐を以て吾人を責めむとするや。吾人は美衣、美食、遊戯、競技、演劇を以て國民を腐敗せしこと無し。否吾人は足を劇場に投せざるの故を以て却て迫害せられたりき。吾人は軍隊の内

訛を助成せしこと無し。異教者よ、爾等が喋々する所の愛國心を消耗したるものは、爾等の帝國には非ざりしか。彼等がガリア人、埃及人、亞非利加人、フン人、イスパニア人、スリア人を以て羅馬の公民を形成せし時に當り、彼等は恐にも、是の如き危難なる群聚が一個の伊太利の都府、而かも彼等が久來怨望したる其都府を、誠心誠意を以て保護すべしと思惟したりしなり。愛國心は勢力の集中を必とす、是の如き現世上の制約が如何にして人心の散漫を統一することを得べき。是の如き精神上の統一は獨り基督教の中に發見し得べきのみ。

思想感情の一致は言語の一致を要す。國の一半は希臘語を用ひ、他の一半は羅句語を談するもの、如何にして鞏固なる國家を組織することを得べき。元老院の廢止は基督教の起原に先づ。誰か歴代帝王の弊政を以て吾人の力なりと云ふや。九十年間に三十二帝と、二十七の僞帝を出したる軍隊の跋扈に就て、吾人豈何の責任あらむや。吾人はプレトルの親衛兵に帝國を競賣に附するを教へしことあらざるなり。

異教者よ、爾等は實に此の如き一切の事情が終局を告げたることを驚くか。吾人基督教徒は雷に驚かざるのみならず、却て天帝の恩澤を感謝するなり。今や人類が休息すべき時期は来りぬ。囚虜の歎願と祈禱とは遂に聴かれたり。羅馬府を陥れたるアラリックはゴート族なりと雖も、一個の基督教徒なり。彼は彼の同胞なる基督教徒を敬し、彼の爲に爾等は救はれたり。若し爾等の信憑する幾多の神等は果して不幸の中より爾等を救ひしことありや。ハンニバルが彼等を辱めしこと幾年ぞ。ブレンヌスの禍より政黨を救ひしものは、一羽の鷲鳥なりしか、將た又爾の神なりしか。敗北せる羅馬軍の中に何處に神ありしか。あゝ國民の膏血に酔ひたる賣女、羅馬府の陥落は幸なり。是現世的都府の没落は、迷信罪惡の長歴史に結局を告げ畢むぬ。而して神の都府は將に起らむとす。蠻族の劫火は異教の汚瀆を燒棄して基督の王國に適するものとなすべし。異教者よ、爾等が失望の中に回顧する數千年の罪惡の暗夜の代りに、預言者の宣傳したるミレニウムの日は羅馬に現はるべし。其の再建せる城壁の中には罪惡の汚れなく、只正義と平和とあるのみ。現世

の虚榮名利の競争、其跡を絶ちて、神聖なる敬虔の信仰あらむのみ。

文藝復興と羅馬教會

基督教及び日耳曼諸民族の歴史上に現はれてよりこのかた、十五世紀の後半より十六世紀の末に到るまで百餘年の間程、歐羅巴人文史の上に重大なる意義を有せるはあらじ。是れ何等振天動地の大活劇の人目を驚かす者ありしに非ず。隨うて過去の歴史に對して何等急激の破壊無く、新奇未曾有の事物の倏忽の間に一生面を拓發せしもの無し。而かも天下の大勢は冥々の中に暗移黙徙し、漸く人生世界を觀するの風趣を異にし、隨て國家、宗教及び個人の關係に就きて全く前代の思想を革むるに到れり。是傾向は中世思想の如く神學的ならず、稍、多年因襲の傳説及び證典を輕蔑し、寧ろ自然界の觀察に本きたる個々人の思想及び實力に憑依するの風あり。是れ所謂近世的と稱せらるゝ人文の特徴にして、其曙光を示したるものは、即ち吾人が茲に論せむと欲する所の古代文藝

の復興なり。

然れども一事の遺却すべからざるものあり。所謂文藝復興は是新傾向の精神に非ずして寧ろ其記號なり將に來らむとする一大活劇の序幕なり。將に來らむとする一大活劇とは何ぞや、宗教革命即是れ也。

そも、中世紀の一千年は、幾多人生の問題に對して一も確的なる解答を與ふる能はず、人は全く宗教に拘束せられ、其活動の自由を得ず、一切幸福は他力を仰ぎて初めて得べきものと思惟せられき。人は皆覆面の中に生息せり。彼等は快澗なる眼を放ち、面々相對して、世界の眞美を認むること能はず、良し是を認め得べき場合にも、彼等の怯懦なる故らに面を背けて之を忌避し、翻て罪死、裁斷等の憂鬱なる宗教的考察に耽りたり。以爲らく、現世の幸福は希望するに足らず、吾人の思想的生活は彼岸にあり。美は陷穽、快樂は罪惡。人は墮落して世は腐敗せり。一切の現象世界は詮する所流轉無常疑惑の巷にして、確乎不易なるもの獨り死あるのみ。是の如きは中世の宗教觀なりき。

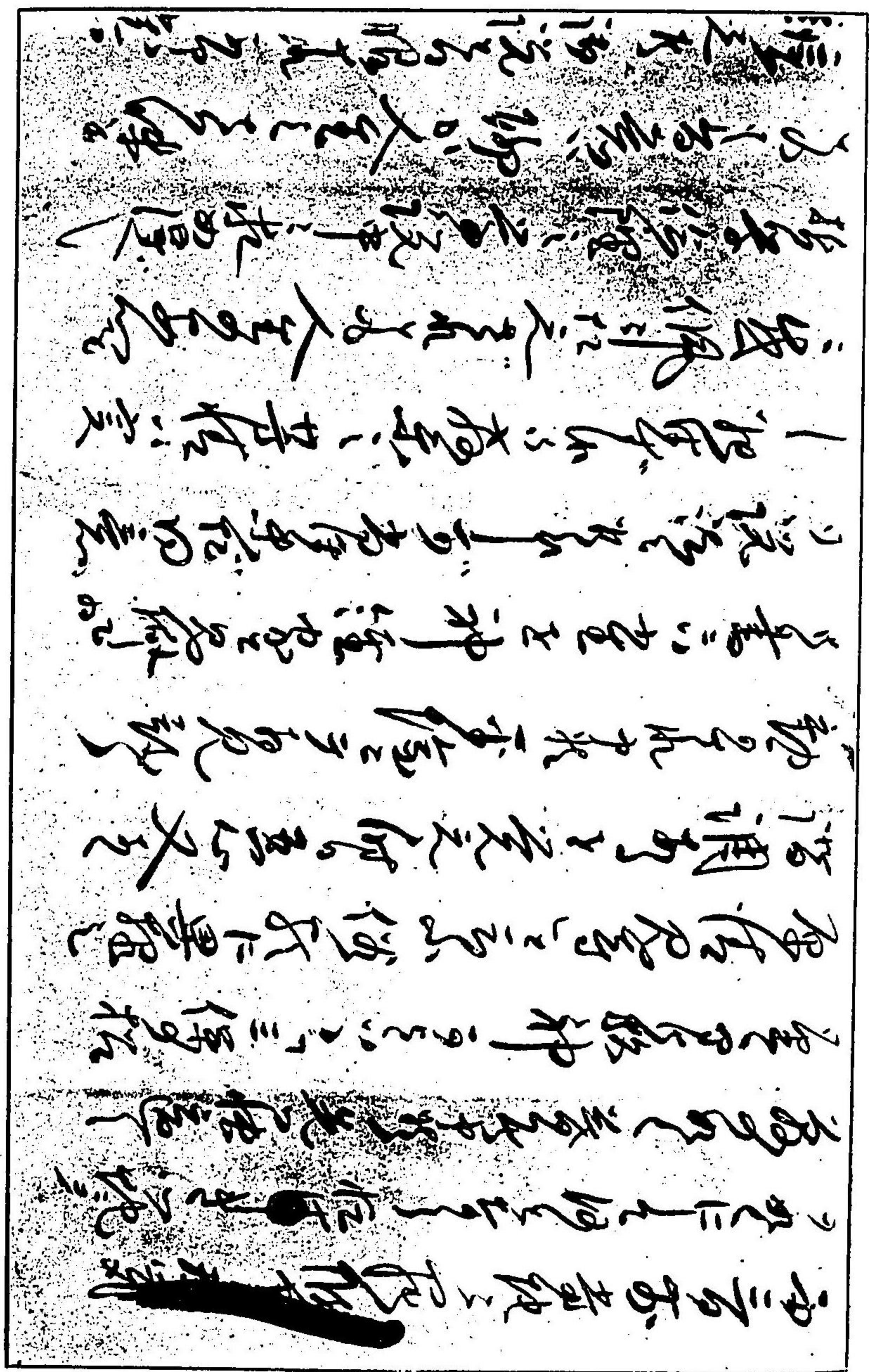
文藝復興は是覆面を轉落し、是昏速を排除し、示すに現在の世界及人間を以て

し、人皆其本に歸りて自己獨立の脚地を占得すべきことを訓えたり。『自ら欺く勿れ』是れ文藝復興期の齋らしたる福音なりき。所謂近世史は是時を以て初まりぬ。史家シモンズ氏曰へらく『文藝復興の歴史はやがて歐洲民心に現はれたる自覺的自由の到達の歴史なり』と蓋し甚だ當矣。

顧みれば中世紀の間古代人文は殆ど全く遺却せられき。其初期にありてはカシオドルス、ポエチウス等三四の學者の希臘の科學及び美術を鼓吹せしもの無きに非ず。然れども羅馬教會の權勢を占むると共に、一切の古代の學藝は異教者の文物として排斥せられたり。是を以て古典は多く遺却せられ、貴重なる美術も亦た自然の頽廢に委棄せられき。さしも輪奐の宏壯を極めたる七丘府の公堂は、地上に破却せられ、其殘墟には牧笛の響ありき。羅句語は僧侶の手に腐敗して舊時の典雅を止めず、一切獨創の意見は教會の爲に拘禁せられ、一切人智は聖書の中に限られたり。カル、大帝治世の文物は一旦にして跡無く、ホヘンスタウフェン家の燦然たる學藝はた一夕の榮に過ぎざりき。羅馬法典の研究は政治の必要に驅られて起りたり、然れども未だ以て是法典の由來せる古代の

文明を喚起するに足らず。哲學はスコラ學派の壟斷する所となり其目的は一に基督教會の臆説を確立するにあり。アリストテレス氏は曲解せられ眞理探究の爲になされたる其形式的論理學は今や却て思想發達の一大障害と化し畢むぬ。當時の思想中まゝ幽玄高尚なるもの無きに非すと雖も功罪遂に楮償ふに足らず。獨斷と形式と偏頗と固陋と是れ中世哲學の特徴なりき。

かゝる精神的暗黒時代に一道の曙光を放ち以て文藝復興の大運動の接近を預告したるものは西班牙に於ける亞刺比亞的文明なり。抑々西班牙はサラセシ民族が歐羅巴大陸に残したる唯一の領地なり。彼等は茲に彼等が地中海東岸の諸邦より承傳したる古代文物を移植し學校を立て圖書館を興し更に熱心に是を涵養せり。北方歐羅巴の學者所在風を傳へて茲に游學するもの亦尠からず。是に於て亞刺比亞人は古代學藝の公平なる研究者出版者傳播者として夙に歐洲の教師となれりき。加ふるに當時十字軍の一好結果として西歐羅巴と希臘及び亞刺比亞諸邦との間に交通の利便を得たりしかば希臘語は茲に新に歐羅巴人の注意を惹起しアリストテレス氏の典籍は先づ争て研究せられた



り。是に於て學校及び學會は到る處に建設せられ、國民文學も亦隨うて其萌芽を發せり。即ち十二世紀の半に到りて、ホ、ロ、ニ、ア及びオ、ク、ス、フ、オ、ド、大學は開始せられ、巴、里及びサ、ラ、マ、ン、カの大學亦次で起りき。又交通の開くるに隨うて、僧侶は漸く學問の專有權を失ひ、所謂自由思想家は諸邦に輩出せり。佛のア、ベ、ラ、ル、ド、ア、ル、ベ、ル、ツ、ス、マ、グ、ヌ、ス、英のロ、イ、ヂ、ャ、ー、ベ、ー、コ、ン、諸氏は正に文藝復興の先驅たり。

されど十字軍の齎したる希臘に關する知識は比較的僅少なりき。文藝復興の大思潮に最近の動機を與へしものは土耳其民族によりて物されたるコンスタンチノポリスの陷落にあり。幾多學藝の士は難を避けて西の方以太利に走り、茲に其安全なる生活を求めたり。斯くして爲されたる影響は亞刺比亞民族が西班牙に移植したりし者よりは其幅員に於て遙に廣大なりき。

今以太利に於ける文藝復興の由來を尋ぬるに、ベ、ト、ラ、ル、カ氏の時代にありては僅に其の萌芽を發せしのみ。是れ是詩人が『以太利を擧げてホメーロスを解するもの十人無し』と嘆せしにても知らるべし。而して當時希臘文學の傳はらざ

りしことは同じ人が『あはれイウリビデス、若くはソフホクレースの寫本が若しも航海者の手に依りて發見せられたらむには』と浩嘆せしを以て推測し得べし。以太利に於ける希臘古典の研究は紀元一千三百九十五年を以て初まれりと謂ふべし。是れコンスタンチノポリスより派遣せられたる希臘人クルソラ、ス氏が初めて羅馬市に於て希臘語を教授したる年なり。未だ幾ならず航海者アウリスバ氏廿八種の希臘語に書かれたる古典を齎らせしが中にはプラト、ン、ピ、ン、ダ、ル諸氏の著書ありき。是等の書典を羅匈語に翻譯することに就きては、初めは多少羅馬教會の反對ありしが、後には法王イウゲニウス四世自ら其保護者となりき、事勢の必要に驅られたる也。次で土耳其民族西侵の勢漸く加はり、東帝國の運命又預知し難からざるに及びて、希臘學者の以太利に移住せるもの踵跡相接し、古典の研究は年を追ひて榮え行きぬ。其地理上の中心をフレンツェ市となす。

フレンツェは古來學藝の地にして夙に以太利のアテネと稱せられき。紀錄の傳ふる所によれば、十四世紀頃既に一萬の兒童は讀書力を有し、其中六百は論

理學を解し、且羅匈語を談せりと云ふ。殊に其市長たるメデイチ家は累代文藝の保護者を以て自ら任せしかば、一時西歐羅巴文化の中心となりき。是に於てプラト、ン氏の眞正の哲學は猶太教と希臘哲學とが抱合してアレキサンドリアに起りたる新プラト、ン派を壓倒し、醇粹なるアリストテレス氏の學說亦多年スコラ學派に誤られたる偽學說をして顔色無からしめき。當時希臘哲學が眞に理解せられしとは、大畫家ラファエル氏『アテ、ネの學派』と題する一幅、是れを示して極めて明瞭なり。

古文藝の復興の爲に第一に影響を被りたるは羅馬教會なり、文藝復興の歴史的意義はた茲に存す。想ふに希臘文學の輸入は歐羅巴一般の人心に向ては殆ど一個の新世界の發見と等しかりき。基督教史の一半は實に是文學の啓示を待て初て知られたり。彼等が絶対的神聖として畏敬したる羅馬教會は、由來一個の教會に過ぎざること。是教會が無上證典として支撐する所の教義は希臘文學の中に其根據を有せること。亞刺比亞人其媒介者たりし、故を以て甚だ多く尊崇せられざりしアリストテレス氏が實に紛々たるスコラ學派の哲學者を超

絶せる一大碩學なりしこと。更にア氏以外幾多の學者、詩人、美術家の著述、製作の珍蔵十數すべきもの遙に中世の羅甸文學に優れること。今にして初めて知られたる這般の事情は如何に當代の耳目を驚かし、か。一時希臘語及び是に附帶して希伯來語が非常の熱心を以て偏く研究せられたる事實に依りても思ひ半ばに過ぐるものあらむ。

是時に當り、羅馬教會は極力是等古語の復活を防遏したるは寧ろ自然のみ。そも、羅甸語は從來神聖の言語とせらる。羅馬教會の統一主として是に依りたれば也。實に眇たる七丘府が精神的歐羅巴の中心たるを得しは、是神聖なる言語の力最も多きに居りき。是を以て羅甸語の流行は教會權維持の第一の條件隨うて其廢施は其盛衰の分るゝ所なり。換言すれば羅甸語が歐羅巴を通じて行はれざるの時は、即ち羅馬教會の權力が地中海中の一半島裏に限られたるの時なり。羅甸語の流行廢れて希臘語及び希伯來語の研究是に代り、同時に其必然の結果たるべき國民文學の興起は、即ち是れ羅馬教會の分裂を意味す。文藝復興の眞意義はた是に存しき。

羅馬教會に對する當代人心の態度を現はして尤も明晰なるものは恐くはト、マス・アケムピス氏の『基督の摸倣』に若くものは無からむ。是一卷の大主腦は、人をして教會僧侶の干渉を受けずして自ら信仰の向上と徳行の完美を期するにあり。即ち一言すれば、各自をして自己の僧侶たらしむるにあり。是れ、豈羅馬教會に對する大々の抗議に等しからずや。文藝復興及び宗教革命の福音は實に「各人をして自己の僧侶たらしむ」との一語に存しき。

羅馬教會は時事の日に非なるを見、百方力を極めて古文藝の復興を遮斷し、以て人心の統一を計りたり。教會は法王の名によりて希臘哲學の研究を左道と爲し、以て基督教の神聖を滂瀆するものとなし、學者に對して威嚇誘惑殆ど施さざる所無かりき。然れども時や既に遅かりき。科學的知識の進歩は却て基督教の根底たる奇蹟に向て合理的立證を要求し、自然界一切の實驗的知識を率ゐて傳説證典に格闘を挑みたり。時の人叫で曰く、「今や血證死を以て眞理の證據と信じ得べき時代は已に過ぎ去れり。血證死は嘗り教義の眞理を證するに力無きのみならず、却て其疑義を増大するものに非ずや。見よ、何處に直線は二

點間の最短距離なることを立證せむが爲に死を甘受したる幾何學者ある。眞理には素と犠牲を要せず、只明白確なる直觀的若しくは合理的證據を要するのみ。借問す、聖書の中何處に是の如き證據ありや」と。教會答へず、却て其聲の高きものを捕縛し、異端の名を以て是を迫害せり。斯くて不信と懷疑とは普く社會人心の根底に瀰蔓しぬ。看來れば、以太利文藝復興は歴史上一個の精神的自由戦争に外ならざる也。

是の如く、古代文藝の復興は、一面に於ける希臘語、希伯來語の研究及び是に伴へる羅句語の衰微と、他面に於ける國民文學の興起、國家體制の發達、自然科學の進歩及び活版印刷等諸般の發明と共に、羅馬教會の權力を滅殺し、其統一を打破し、以て獨逸に於ける宗教大革命の基礎を成せり。夫の文藝復興期に於けるジ・ルヂニの以太利史、マキャヱリの君主論、ボイアルド、アリオスト、タッソー等の詩篇希臘のペリクレス時代を外にして美術史上他に比無類き黄金時代即ち一千四百年二十年より一千五百二十年に到る一百年に出でたるマサチヲよりラファエルに到るまでの美術は、畢竟是精神的自由戦争の副産物のみ。

外篇第三

論理學

序言

序

一本書は、往年著者が第二高等學校教授たりし時の講義に基きて、慎重なる訂正を加へたる者なり。

一從來の論理學は、其著者の西洋人なると本邦人なるを問はず、組織煩瑣に過ぎて概ね統一を缺く、是れ長歴史を有する科學の通弊なり。著者聊か茲に見るあり、敢て必ずしも先人の跟迹に依傍せず、其系統を簡理し、其組織を統一するに於て、竊に新見地あるを負ふ。間々從來學者の意見に異なるものある、亦已むを得ざるなり。

目

一本書が從來多くの論理書と異なる要點を擧ぐれば概ね左の如し。

- 一 演繹法歸納法の差別を否定し、共に三段論法の下に包攝せり。
- 二 隨て歸納的研究法の目的等に關して從來の説に異なる所あり。
- 三 所謂方法論は、全く論理學の概念中より排斥せり。隨て定義分類の諸法は凡て説かず。

(539)

四 所謂五種の賓位語及び賓辭附量法に關する説は、全く省けり。

五 歸納法を改稱して歸納的三段論法と爲し、其根據たる自然法の一致、因果律及び兩者の關係に就いて務めて其説を詳明ならしめむことを期せり。殊に因果の概念に關しては、從來多數の説に一刷新を加へたりと信す。

著者の見る所によれば、從來の論理學の書中には、斯學の概念に包含せられざる幾多の事柄を説くを常とす。想ふに是れ徒に先人の遺例を襲げる弊にして、爲に斯學の統一を缺き冗漫繁縟、初學者を惑はすこと尠しとせず。方法論の如きは、素自ら別種の科學に屬すべしと見るを妥當とす。五種の賓位語の如きも亦全く歴史上の遺物にして、論理學の特に關知すべき所にあらず、殊に其區分極めて非科學的なることは掩ふべからず。著者は從來の學者が必ず是の如きものを説けるを以て蛇足なりと思惟するなり。ハミルトン氏の賓辭の附量法は、徒に推論の方式を煩瑣ならしむるのみ。是方法の爲し得べき所は、普通の方法亦能く是を爲すを以て、著者は是を省畧せり。若し夫れ演繹法と歸納法とによ

りて論理學を大別し、全く異種の推論式と爲すは、著者の見る所によれば全く謬見なり。故に本書に於ては所謂歸納法を以て三段論法の一類となし、定言的、假言的、撰言的等に對して假りに歸納的三段論法と名けたり。隨て自然法の一致と因果律との關係、及び所謂歸納的研究法に關しては、多少從來の理論を改めたり。

一 譯語は先輩用ふる所に就き、妥當にして最も稱し易きものを選択せむとを期せり。殊に井上哲次郎、大西祝兩氏の用語に據るもの多し。是れ本邦言語の性質上、哲學上の譯語は畢竟記號的性質を帶ぶるを免れざるを以て、約束を以て是を一定するに利あり、強て私見を樹て、世を惑はすの要無きを信すればなり。

一 本書の文章は、成るべく文字の平易にして意義の固匝ならむを期せり。間々俗語に近きて、卑野の詆りを顧みざるは是が爲なり。蓋し著者の不文なる、莊嚴なる文字を以て本書記する如き學理を説述して、遺憾なきを望むべからざればなり。

一 命題其他の記號は、概ね羅馬字を襲用せり、是れ論式の取扱上最も鮮明なりと思惟したればなり。羅馬字に通せざる讀者は、本書を讀むに當りて、數個の羅馬字母の發音を記憶するの勞を吝み給はざるべし。

一 卷尾に學語及び其他の重要なる字句と英語との對照表を掲げたり。

一 本書に關する批評は著者の最も歡迎する所なり。幸に先輩諸氏の教により、識らずして其非を遂げざらむことを切望す。

明治三十一年八月三十一日

目次

第一章 總論

第二章 名辭命題及三段論法序論

第三章 名辭

第四章 命題

第五章 命題の對當

第六章 直接推理

第七章 思想の原則

第八章 間接推論概論

第九章 三段論法の式及格

第十章 三段論法の諸變態

第十一章 假言的三段論法、撰言的三段論法、及び『兩刀論法』

第十二章 三段論法論

第十三章 不正確なる推論

第十四章 歸納法的三段論法概論

第十五章 似而非歸納的三段論法

第十六章 自然法の一致

第十七章 因果律

第十八章 觀察、設想、及立證

第十九章 歸納的研究法
 第二十章 原因の不定と結果の混淆とより生ずる歸納的研究法の困難
 第二十一章 經驗に關する誤謬
 結論

(第一章) 總 論

論、理、學、は、推、論、の、形、式、的、法、則、を、研、究、す、る、科、學、な、り。

是定義の中に三個の名辭あり、論理學の概念を明にせむが爲には是を説明せざるべからず。推論は言ふ迄も無く心の一の作用なり。心の作用は一にして足らず、知覺、認識、記憶、聯想、注意等、凡て心の作用なり。然れども推論が是等もろもろの心作用と異なる一の重要な點あり、何ぞや比較是れなり。知覺及び認識の場合には心の作用はそが知覺し認識せむとする對象のみに限られ、其以外の物と比較するの要を見ず。記憶聯想注意等に於けるも亦然り。然れども推論は是等のものとは異り、同時に心の中に現れたる二個もしくは二個以上の事物の間に成立する何等かの關係を意識するに基く。關係とは所詮比較に外ならず。例せば吾人茲に一個の樹木を認識したりとせよ、是れ認識せる樹木以外の何物にも關與する事無くしても爲し得べき心作用なり。然れども吾人若し是樹木をば一個の植物として考へむと欲せば、是樹木のみにては是心作用は成

立することを得ず、必ずや是樹木以外の何物かとの關係即ち比較に由らざるべからず。即ち是場合に於ては、植物てふ概念を要す。是概念との比較によりて後初めて是樹木一個の植物として考ふことを得。是れ即ち推論なり。故に推論は同時に心の中にある二個の概念を結合して其の一致するか一致せざるかを發表する所の心作用なり。

是故に推論は知覺認識等とは異なり、理性の産物なり。理性とは感覺、感情若くは意志とは異なり、事物の道理を辨別する心作用なり。事物の道理を辨別するとは畢竟一の概念と他の概念との間の關係を指定すること、更に換言すれば比較的に大なる概念の中に比較的に小なる概念を屬せしむることなり。例せば茲に梅樹と云ふ一個の概念と植物てふ他の一個の概念とを比較し、是二者の間の一致を見て前者を以て後者の一部に屬せしめ、茲に『梅樹は植物なり』てふ推論を爲すことを得るが如し。

更に精しく觀る時は、『梅樹は植物なり』てふ推論には二個の判定を包含することを見るべし。何となれば、『梅樹は植物なり』てふ推論を爲すには、豫め如何なるもの

るものが梅樹にして、如何なるものが植物なるかの判定を爲し置かざるべからざればなり。言ひ換れば是二個の概念の屬性を明にせざるべからず。彼此の屬性が一致するか又は一致せざるかを比較して、茲に初めて是二者の關係を斷定することを得べし。斯く見る時は推論とは二個の判定を比較して、更に第三の判定を立つる心作用なりと言ふを得べし。

是二個の判定を比較して第三の判定を立て、其の正確なるを得むが爲には、自ら一定の形式的法則あり。是形式的法則を明にするは、即ち是れ論理學の務なること、已に定義に述べたるが如し。然らば是思想の形式的法則とは何ぞや。是意義を明にするには、先づ法則と云ふことの意義を明にせざるべからず。政治上若くは法律上に謂ふ所の法則は措て間は、科學上に謂ふ所の法則には概して二義あり。一は事物の存在變化の必ず準據すべき法則にして、一は事物の存在變化必ずしも是に準據せざるも而かも或目的の爲には當に準據すべき法則なり。故に前者を必然の法則と稱し、後者を當然の法則と稱す。

必然の法則は、事物の存在し變化するには必ず是に據らざるべからざる法則

なり。天地間の事物は、各々一定不易の法則に隨て存在し且變化す。所謂自然科學は各、其の關係する所の範圍の中には必然の法則を發見するを目的とす。例せば物理學は物質運動の法則を究むることを力め、天文學は天體運動の法則を明にするを旨とするが如し。當然の法則は、やゝ是と趣を異にす。一切の事物は自然のまゝに放任すれば必ずしも是當然の法則に準據せず。唯吾人が或事物を或一定の目的の爲に運用せむとする時に當り、是當然の法則に準據する時は、是に準據せざる時よりも好く是目的に適ふ故に、事實上には必ずしも然らざるも、目的上には當に然るべき事を示す所の法則なり。論理學に研究する法則は、倫理學の法則等と均く、是當然の法則に屬す。例を擧げて是を説明せむに、吾人の心作用は是をありのまゝに放任する時は、必ずしも論理學に謂ふ所の推論の法則に遵ふものにあらず、隨分虚偽の推論を爲すことあるべし。推論は必ずしも論理學の法則通りに爲さるゝものに非ざればなり。然れども茲に是推論と謂ふ心作用を眞理探究の目的に使用せむとする時は、吾人は當に論理學の法則に隨て推論すべきことを見るべし。倫理學に於けるも亦然り、吾人は必ず

しも忠孝の道に隨ふものに非ず、隨分是に反對する行爲に出づることを得べし。然れども人生の目的を達せむが爲には當に是道に隨ふべきなり。

何物も必然の法則以外に出づること能はず。然れども吾人には一定の生活の目的あり、吾人は吾人の力の及ぶ限り是目的に適應する様に一切の事物を按配せむことを希望す。所謂當然の法則は是希望に基きて組織せられたるものにして、事物の存在及び變化に必須なる條件には非ず。吾人の一切の心作用は心理學上より見る時は、皆必然の法則に隨へるものなり。故に所謂虚偽の推論を爲す時も、又所謂正確の推論を爲す時と均しく必然の法則によれるなり。唯當然の法則に照して見る時は、一は虚偽として排斥せられ、一は正確として要求せらるゝなり。

一切の科學は是二種の法則の何れかを研究するものなり。必然の法則を研究するものを説明科學と云ひ、當然の法則を研究するを標準科學と云ふ。故に論理學は標準科學に屬す。

以上論理學に所謂法則の意義を明にしたれば、次に推論の形式的法則とは如

何なるものなるかを述べむ。形式とはそれが表はす所の事柄に對して云ふ謂なり。喩へば物の質に對して形と云ふが如し。或物體の形とは其物體の幾何學的輪廓にして千種萬様なを得べし、然れども是物體を構成する所の質は是千種萬様の形を通じて同一なるを得べし。又之に反して其形同一なるも其質は千種萬様なることを得べし。吾人の心は素より形而上の實體に屬するが爲めに、形而下の物體に云ふ如き意味に於て形あるべき理無し。唯是同一の形が千種萬様の質に對應し得べきが如く、或心の作用は其意識の内容の如何に係らず、同一の形式を有することを得。故に恰も其質異なる二物が其形に於て同じきが如く、其意識の内容に於て異なる二個の心作用は同一の形式を有することを得。例せば、『凡ての人は動物なり』と云へる判定と、『凡ての金屬は元素なり』と云へる判定とは、表示せる事柄は全く異れども、其文法上の組織、即ち論理學に謂ふ所の量に關係する命題としては同一なり。又

凡ての人は動物なり、
 補正成は人なり

$$\begin{array}{l}
 a = b \\
 a = a \\
 c = b
 \end{array}$$

故に補正成は動物なり、
 と云へる推論と、

凡ての金屬は元素なり、

凡ての鐵は金屬なり、

故に凡ての鐵は元素なり

$$\begin{array}{l}
 a = b \\
 b = a \\
 c = b
 \end{array}$$

と云へる推論とは其事柄は全く異なるも、其形式は全く相同じ。故に一般に云ふ時は形式とは事柄變化するも、不易なるものを謂ふ。

既に斯く形式と云ふ語の意義を明にしたれば、形式的法則の意義も亦おのづから明なるべし。即ち推論の主題と爲り居る事柄の如何に係らず、常に一定不易なる法則を云ふ。故に推論の形式的法則は、天文學にも、物理學にも、生理學にも、倫理學にも、其他何等の科學に通じて一定不易なり。論理學は是の如き法則を研究する科學なり。是法則の如何なるものなるかは本書を讀みて知るべし。扱最後に説明すべきは科學の義なり。科學は知識なること勿論なり、然れども凡ての知識は科學に非ず。科學の知識は第一正確ならざるべからず、然れど

も正確なる知識は必ずしも科學と稱するを得ず。例せば鐵は堅し、火は熱し、水は流る等の知識は正確なりと雖も、是の如き知識の幾百萬を雜然蓄積したりとて未だ一の科學と云ふを得ず。科學は必ずや秩序ある知識ならざるべからず。即ち其の目的とする所の眞理を究明せむが爲に、是に到達する順序方法を指示せざるべからず。各科學の關する所素より其範圍を異にす、例せば化學は物の化學的性質を、物理學、心理學は物理的もしくは心理的性質を研究することを目的とす。然れども形式上より見れば、各自の範圍に就て正確なる秩序的知識に本き、各其原理の究明を旨とするの一事は、何れの科學を通じて然り。是意味に於て論理學も亦一個の科學なり。

以上の説明に依りて論理學が推論の形式的法則を研究する科學なりとの定義は略釋了するを得べし。其詳細に到りては卷を掩て初めて知ることを得む。

以上説明したる如く、論理學は推論の形式的法則を研究する科學なり。然るに一切の科學は推論によりて成立するが故に、何れも論理學の法則に準據すべき者なり。是故に古人は論理學を『諸學の學』と名けたり。單に形式上の職能よ

り、斯學を見る時は是名稱は當れり。然れども物體は凡て形と質と相待て實在するが如く、科學も亦推論の形式と是推論の料となるべき事柄との二者を待て存在す。故に論理學のみにては實際上の事柄に就て何等の知識を得べからざるなり。是の如く見來れば、論理學と他の科學との關係自ら明なるべし。唯茲に特に一言すべきは、其の心理學及び倫理學との關係なり。何となれば、是二學は、論理學と共に吾人の心作用に關する科學なればなり。

心理學と論理學との第一の差別は、前者は凡ての心現象に、後者は其一部に關係することなり。即ち是二者は心現象の推論に關する部分に於ては互に其範圍を同じうす、然れども其觀察の方法及び目的とする所は、二者全く異なり。即ち心理學が心現象として推論を觀る時は、先に謂ふ所の必然の法則によりて起れるものとなし、其如何に起れるかを究明す。然るに論理學は之に異り、其起原成立等の次第に就ては一も問ふ所無く、唯是の如き推論が正確なるを得むが爲には、當に如何にすべきか、又其眞と僞とは如何に區別すべきかを研究す。故に論理學の研究せむと欲する所は如何に推論てふ心現象の成り立ち得るか、則ち

是心現象の必然なる法則に非ずして、正確なる斷案に到達せむが爲には當に隨ふべきすぢみち、即ち先に謂ふ所の當然の法則にあり。故に論理學の關する事柄は、心理學の關する事柄の一部なれども、二者の見かた及び目的は全く異なり。又倫理學は、心現象の一部に關することには於ては論理學と等しく、又是一部に關係するに當りて心理學の如く其起原成立の次第、即ち其必然の法則を究むるを旨とせず、或目的に關して當に然るべき、即ち當然の法則を明かにすることを目的とするの點に於ても亦論理學と似たり。然れども倫理の關係する心現象は、論理學の關係するものと同じからず。即ち彼は慾望意志に就て行爲の目的を究め、此は判定推論に就て斷案の確否を正す。彼の關する所は意にして、此の關する所は知なり。然れども心理學が必然の法則を研究する所の説明科學なるに對して當然の法則を研究する所の標準科學なることに於ては、二者其軌を一にす。今アリストテレス氏の用語に隨て是三科學を區別すれば、心理學は心現象の期成原因 (*causa efficiens*) を、論理學は人間行爲の結局原因 (*causa finalis*) を、論理學は推論の形式原因 (*causa formalis*) を研究する學なり。

論理學を分て通常演繹法、歸納法の二種となす。從來學者の説に據れば、演繹法論理學は既に與へられたる判定より當然推論せらるべき他の判定即ち斷案を演繹する方法を謂ふ。歸納法論理學は是に異りて個々の事物の觀察によりて是等事物に或統一的説明を與へ得べき原理を發見即歸納するの學又は方法なり。演繹法は先づ若干の原理を預定し、而して後是預定せる原理の中には如何なる事柄の含有せられあるやを究明す。換言すれば唯是原理を一見したる時に明瞭ならざる事柄にして、而かも實際是中に含蓄せられあるものを明々地に發見するの法なり。是預定せる原理其物が果して眞實なるや否やに就ては、毫も關係せず。歸納法は是に異り、預め若干の事實を假定す、而して後是の假定したる事實より、是等事實以上の原理にして、翻て是等の事實を説明し得べきものを發見せむと務む。換言すれば、個々の事實より直接に演繹し得べからざるも、而かも是等の事實より當然歸納せられ得べき原理を探索するの法なり。其基礎たる個々の事物其物の眞偽に就て毫も關係せざることとは、演繹法に同じ。故に一言すれば、演繹法は先天的推論法則を研究し、歸納法は後天的推論の法則

を發見するを目的とす。

又從來の學者以爲らく、是二種の推論法は決して衝突する者に非ず、學術の研究にとりて兩々相離るべからざる者なり。元來二者の是の關係に就て多少の誤解ありしは、畢竟是二法が同一の目的に向て兩面より進行する者あることを明瞭に理解せざりしが爲なり。前にも述べたる如く演繹法は一の原理を推して個々の事實を説明し、歸納法は個々の事實より溯て一の原理を構成するを目的とす。前者は説明するなり、後者は研究するなり。其目的は共に吾人の推論を正確ならしむるにあり、其範圍、職能亦明に相別れて毫も矛盾せず。蓋し吾人の知識の根源は是を大別すれば二あり、一は證據にして他の一は經驗なり。證據は吾人が安じて信憑すべしとなす所の人の言、書、典、報告等より出づるものにして、吾人自ら其の然る所以を實驗したるに非ず。例せば吾人の前代に楠正成と云ふ忠臣ありしことを信ずるは、歴史の證據に信を措くが爲にして、吾人自ら斯の如き人を實見せしにはあらず。經驗より得たる知識は是に異り、吾人自ら感官の知覺を経由して其事實なることを認識したるなり。吾人の知識は甚だ多

しと雖も、詮する所は二種を出でず。今演繹法と歸納法とは各々是二種の知識を誤謬なからしめむと保護するものなり。即ち證據を通じて來る所の知識に關して其推論を保護するものは演繹法にして、經驗より來る所の知識に關して其推論を保護するものは歸納法なり。又一度び證據として認められたる事實も、一朝其正確に對して疑問を起し得る時は是を證する所の最後の方法は必ず經驗に依らざるべからず。是の場合にありては演繹法は歸納法の助を借らざるべからず。又既に個々の經驗によりて組織せられたる原理も、翻つて個々の事物を説明するに當りては、必ず是原理を一の證典として見ざる可らず。是の場合には歸納法は却て演繹法に譲らざる可らず。是の如く是二種の方法は常に衝突せざるのみならず、學術研究の爲には寧ろ唇齒輔車の關係ありと謂ふべし。是の如きは論理學者が通常演繹法と歸納法との區別及び關係に就いて説く所なり。是の如く思惟するは、實際上毫も支障無しと雖も、推論の性質より見る時は、是二者は決して是の如く相異なるものにあらず、所謂歸納法も亦一種の演繹法に外ならず、是を別種の論式と爲すは、從來論理學者の謬見なり。故に著者は

特に歸納法を歸納的三段論法と名けて三段法の下に隸屬せしめたり。尙ほ是事に就きては第十四章以下に精説したれば就いて見るべし。

或は論理學の利益を疑ふものあり、是れ畢竟斯學を知らざる罪に坐す。論理學は先に述べたる定義に於て略明なるがごとく、決して事實の知識を吾人に與ふるものに非ず、是點のみより見る時は斯學は吾人にとりて何等の益なきが如し。然れども事實のみが吾人の知識を成すものに非ず。眞正の知識は科學的知識なり、即ち一定の秩序法則に遵ひて配列せられ證明せられたる知識なり。是秩序法則を散漫たる事實に與ふるの點に於ては、論理學の功用決して尠しとせざるなり。蓋し知識なるものは、必ずしも新事實によりてのみ増殖せらるゝものに非ず。是等事實間の新關係も亦其要素なり。是關係なるものは、如何に多くの事實を蒐集したりとて決して得らるべき者に非ず、論理的考察によりて初て得らるべき者なり。是事實間の關係を知るの必要は、文明の進むに隨ひて愈々加はる。故に論理學の一般科學の研究に必要なは猶ほ數學が自然科學に缺くべからざると一般なり。且論理學に通せる人は、言語文字の使用に精確

なるを得べく、且自己の思想論證に確乎たる自信力を加ふることを得、又推論の眞僞を容易に辨別するの力を修養し得べきを以て、批判辯難の際に當りても亦必ず多少の利便を有し得べし。

是故に論理學本來の目的は推論の形式的法則を研究するにあれども、是に伴へる實際の利益も亦決して少小に非ず。是の實際上利益あるの點より見る時は、斯學は一個の技術なり。論理學其物のみにては決して眞理を探究し得べきに非ず、唯研究者に對し、推理の際に當に守るべき法則を訓へて其斷案をして誤謬無からしむれば、斯學の目的即ち達せり。是意味に於ては、儘に技術たるなり。抑論理學は科學なりや、又は技術なりやは、古來西洋學者間に種々の異説ありたる疑問なれども、畢竟同一物の一面を見て他面を見ざるの論に過ぎず。一般に言ふ時は、論理學は科學たると共に技術なり。

(第十四章) 歸納的三段論法概論

茲に所謂る歸納的三段論法の何物なるかを明にせむが爲に、先づ(第一)演繹法と歸納法との關係を審にし、次に(第二)歸納法と云ふ名稱の適用に就て一言せざるべからず。今茲に次の如き推論ありと假定せよ。

甲の場合に於て水を攝氏百度に熱せしに沸騰せり。

乙丙丁其他經驗したる凡ての場合に於て同一の現象を見たり。

故に一般に水を攝氏百度に熱すれば沸騰すべし。

是れ普通に謂ふ所の歸納法なり。多くの論理學者は是種の推論の方法を演繹法に反對せしものとして説明せり。即ち以爲らく、演繹法は一般の事柄に關する立言を基礎として特殊の場合に應用し、以て斷案を得る方法なり。例せば「凡ての人は死すべきなり。ソクラテース氏は人なり。故にソクラテース氏は死すべきなり」と論する時は「凡ての人は死すべきなり」と云へる一設の事柄に關する立言を基礎として(即ち所謂大前提として)是一般の立言を「ソクラテース氏は

法 釋 演

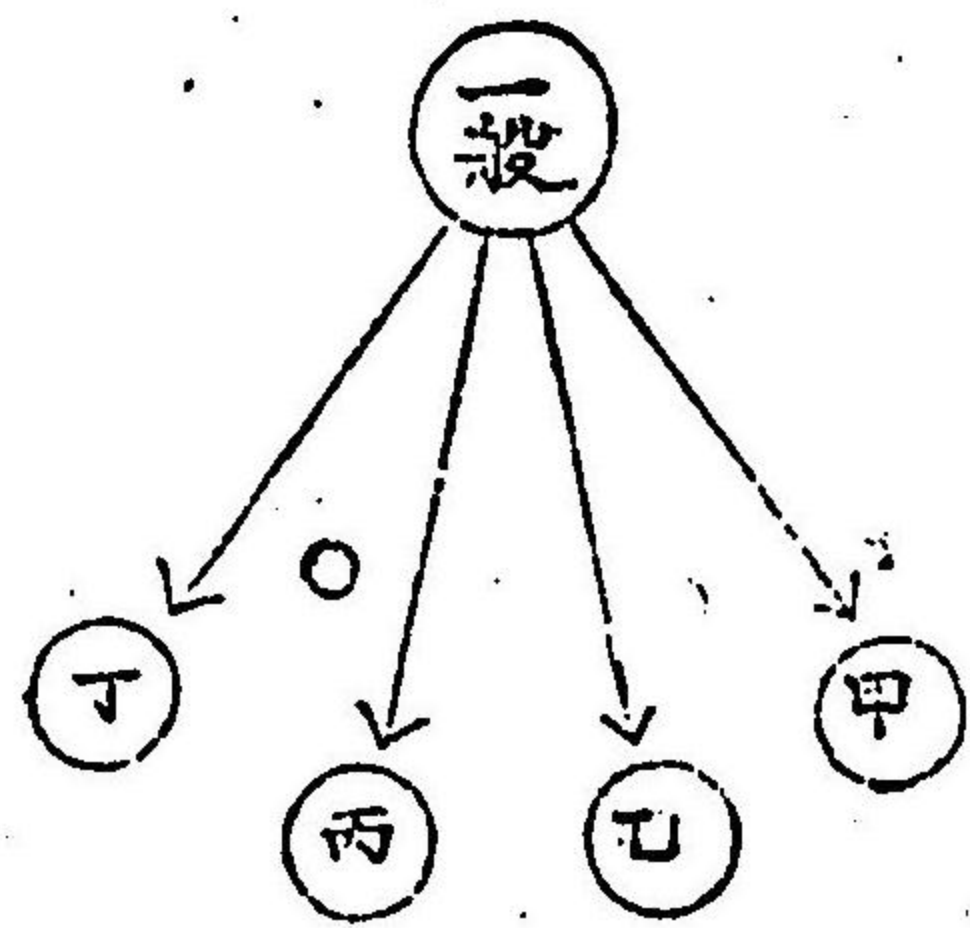


圖 十 三 第

法 納 歸

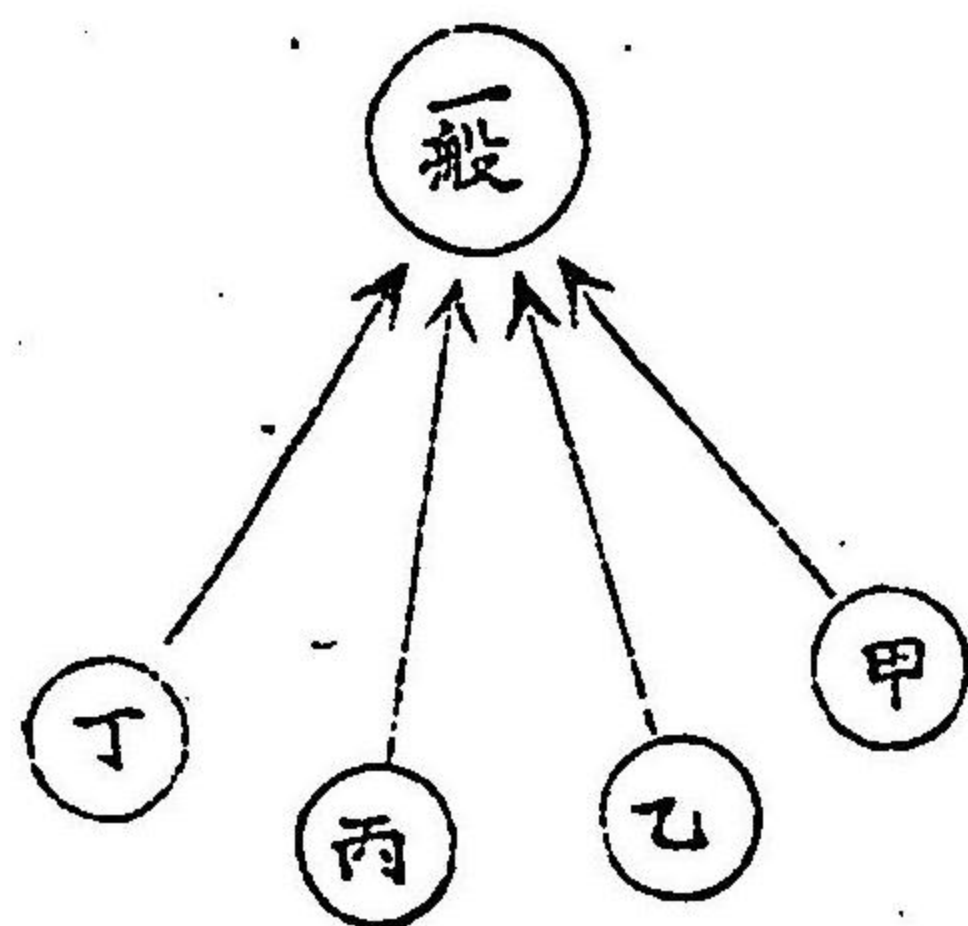


圖 一 十 三 第

人なり」と云へる特殊の場合に應用し、「故にソクラテース氏は死すべきなり」との斷案を下す。故に其推論は一般より特殊に及ぶものなり。然るに歸納法は是に反し、却て特殊の場合より一般の立言に推し及ぼすものなり。先に擧げたる例に見る如く、甲、乙、丙、丁等幾多の特殊の場合を綜合して「故に凡ての場合に於て斯くあるべきなり」と論するが如し。故に演繹法と歸納法の兩論法は、其方向全く相反す。一は一般より特殊に向ひ、一は特殊より一般に向ふ。從來の多くの論理學者は、是對比を左の如き圖を以て解し得べしとせり。